

工ト2J-65

再版

東大陸人蒙傳

文天祥



36

東大陸人豪傳

崑崙阿爾泰の西大雪山に趨り、黄河楊子江の東大瀛洋に注ぐの輿域、
 是れ蒙古民族人文發暢の淵源、上下四千餘、一局風雲の地、之が歴
 世の英豪を捕捉して逐次に其の時代を描く、亦一幅の史繪卷たらず
 んばならず、東大陸人豪を傳する所以なり。

曹操	劉徹	劉邦	項藉	嬴政	蘇秦張儀	管仲	伯夷叔齊
藤田劍峯	漢武帝 征川 臨風	漢高祖 知山 呂泣	知山 呂泣	秦始皇 田岡 嶺雲	石川 香菴	白河 禮洋	福本 日南
岳飛	王介甫	陸贄	郭子儀	李世民	蕭衍	謝安	諸葛亮
淺水 雨八	高橋 月山	八木 霞山	志賀 翔川	唐太宗 志賀 翔川	梁武帝 長澤 則天	藤田 劍峯	國府 厚東
未定	未定	曾國藩	ヌルハチ	劉基	忽必烈	鐵木真	文天祥
桂 湖村	陽 瑞雨	船垣 木芥	清太祖 三宅 雪嶺	高橋 紫燕	三宅 雪嶺	成吉思汗 三宅 雪嶺	國府 厚東

280
B994

289.2
B97Kb

33360

小序

爾に嘉謀嘉猷有らは、則ち入て爾の後に内に告げ、爾乃ち之の外
 に順ふ、輔弼翊翼の責、大臣常に處する所以此に在り。若夫れ天喪
 亂を降し、我が立王を滅し、國步艱難にして、孔棘なり、我が圍大臣
 變に處する所以寔に何の道かある。宗廟社稷は胡羯韃虜の爲め
 に傾覆せらる、赤手天日を捧げて之を雲衢に燭せしむる、綱繆亦
 術靡し、大臣の此に處する所以、其の道を全うせるもの、千古獨り
 宋の文天祥在り、一身天下の重を負ふもの、此の如きを要す。
 村田清風は吉田松陰の師なり、夙に天下の大を以て自ら任す、居
 常武内宿禰神孫を抱くの圖を掲げ、當年萬方多難、宿禰か輔弼の
 重責在る所を憶ひ、泣數行下ると云ふ、忠忱斯の如きありて、甫め
 て以て天下の大を托するに足るへし、邦家と俱に生き、邦家と俱



に死す、赫々たる大節、日月と俱に其光を争ふ、是に於て乎在り。
 夫れ然り、雍熙和平は宿禰の心あつてこゝに效すを得へく、宿禰
 の心は天祥の節あつてこゝに語るべきとなす。當路と曰はす、處
 士と曰はす、苟くも天下を以て自ら任するもの、必ず深く邦家の
 大變に處する所以を思はざるへからず。天祥を傳する、亦區々微
 衷の存する所なり。傳既に成る、是に於て乎敢へて言ふ。

皆明治丁酉孟夏谷中の草莽に於て

犀 東 逸 人 識

目次

第一	宋史を讀む	一
第二	盧陵有人	十二
第三	廷對第一	十八
第四	讜論と正義と	四十二
第五	牧民の治績	五十五
第六	江山と風月と	六十三
第七	哀痛の詔下る	七十七
第八	入衛赴闕	八十二
第九	臯亭山の樽俎折衝	八十九
第十	間關と崎嶇と(其一)	九十六
第十一	間關と崎嶇と(其二)	百〇一
第十二	間關と崎嶇と(其三)	百〇七

目次

第十三	間關と崎嶇と(其四).....	百十一頁
第十四	間關と崎嶇と(其五).....	百十六頁
第十五	間關と崎嶇と(其六).....	百二十一頁
第十六	福建の朝廷.....	百二十五頁
第十七	崖山の朝廷.....	百三十三頁
第十八	北行の丞相(上).....	百四十七頁
第十九	北行の丞相(中).....	百五十五頁
第二十	北行の丞相(下).....	百六十七頁
第二十一	不拜不跪不屈.....	百七十二頁
第二十二	獄中の神仙(上).....	百八十一頁
第二十三	獄中の神仙(下).....	百八十九頁
第二十四	正氣の歌.....	二百頁
第二十五	衣帶中の賛.....	二百十六頁

文天祥

國府犀東著

第一 宋史を讀む

落花撩亂風に隨て霞の如く、吾が腮に吹き入て、吾が几を撲つ、花吹雪の下、吾箕踞して宋史を讀み、方に南宋の末造に及ぶ、卷を掩ふて長嘆するもの之を久うす、開くものは落ち興るものは亡ぶ、之をして開かしめたるものは風雨なり、之をして落ちしめたるものも亦風雨なり、之をして興らしめたるものは機運なり、之をして亡びしめたるものも又機運なり、花の○一○開○一○落○は○風○雨○に○よ○り○邦○の○興○一○亡○は○機○運○に○よ○る○然○而○し○て○花○の○開○き○又○落○つ○る○も○の○何○ぞ○獨○り○櫻○の○み○な○ら○ん○や○邦○の○興○り○又○亡○ぶ○る○も○の○豈○亦○翅○に○宋○の○み○な○ら○む○や○獨○り○櫻○の○み○な○ら○す○翅○に○宋○の○み○な○ら○す○春○夏○秋○冬○四○季○相○推○移○す○る○も○の○亦○皆○風○雨○之○を○し○て○開○落○せ○し○む○往○古○來○今○史○上○相○變○遷○す○る○も○の○亦○凡○て○機○運○之○を○し○て○興○亡○せ○し○む、

花には梅あり、櫻あり、牡丹あり、桐の花、藤の花あり、萩あり、菊あり、千紫萬紅、四季の花

固より擧げて數ふべからずと雖ども、春の花は春の風雨之を開落せしめ、秋の花は秋の風雨之を開落せしむ、たゞ夫れ開落するの時を異にするは、各其の種類によるべしと雖ども、其の開落するの状も、亦各其の種類に隨て異ならざるを得ず、而かも之をして開落せしむる所以のものは一なり、

邦亦然り、大塊の上、往古來今、邦をなし又邦をなすもの何ぞ限あらむ、而かも其の時と態とを異にして、歴史に反映する影象に於ても、各其の興亡する所以を異にす、埃及はアッシリアに異り、バビロニアに異り、希臘は羅馬に異り、英佛獨露埃米以てモンテネグロ、サルビア、土耳其に至るまで、凡て其の興亡する所以を異にせざるはなし、我が邦に於ては、奈良朝時代と、志賀時代と、平安時代と、及藤原時代と、源平時代と、北條時代と、足利時代と、豊臣時代と、徳川時代と、各其の興亡を同うするはなし、支那と曰ひ朝鮮と曰ひ印度と曰ひ暹羅と曰ひ、古來各其の興亡する所以を以て興亡し、亦其の國によつて其の時と態とを異にせざるはなし、而かも其の之をして興亡せしむる所以のものは一なり、

花の何たるを問はず、邦の何たるを論せず、其の開くと落つると、及興ると亡ぶるとは、一の有機的現象の幻出と、破滅と、及一の有機的團體の結合と、解裂とに過ぎざる

なり、花は草木の一の有機的現象なり、邦は土地人民の一の有機的團體なり、此の現象幻出すれば花あり、破滅すれば花なし、然かも花なしと雖ども、草木は一の植物として依然舊に仍る、此の團體結合すれば邦あり、解裂すれば邦なし、然かも邦なしと雖ども、土地人民は一の地理的土地、一の人類の民族として、長へに存在す、之を指して花と曰ひて、其の開くと喜び、其の落つるを悲しむは、何が故ぞ、之を目して邦と曰いて、其の興れるを慶し、其の亡ぶるを吊するは、亦何か故ぞ、一開一落と、一喜一悲と、抑も何の所因かある、一興一亡と一慶一吊と、亦何の所由かある、吾自ら花の開落に悲喜し、邦の興亡に慶吊す、而かも其の悲喜する所以を解せず、又慶吊する所以を知らず、知らずして、慶吊し、解せずして、悲喜す、吾自ら所以を知らず、誰か其の故を知ら

ひ、
憂ふるものは樂しみ、喜ぶものは怒る、兩極必ず然るなり、積極と消極と、環の端なきか如し、花の開くと喜ぶものは花の落つるを悲しまさるはなかるへく、邦の興れるを慶するものは、邦の亡ぶるを吊せざるはなかるへし、開くと興るとは一極なり、落ると亡ぶるとは亦一極なり、彼は積極なり、此は消極なり、兩極即是れ、故に落つる花の下に、亡ぶる邦の史を讀める我は、消極の我となれるなり、花の落つるを悲しみ、邦

の亡ぶるを吊するなり

花の落つると、邦の亡ふるとは、嗚呼誰か之を然らしむる其の然らしむるは、吾も知らず、惟夫、れ、落、つ、る、者、と、亡、ぶ、る、者、と、は、必、ず、

(一) 外部の來壓

(二) 内部の破綻

による、故に花には風雨、外より來壓し、結力内に蓄きてこゝに落つるを見、邦には一方に外來の刺撃あり、一方に内國の破綻ありてこゝに亡ぶるを見るなり、目今櫻花の落つるは、吾其の昨夜の風雨に力を失ひたるを知る、讀む所史中の宋、果して如何にして亡べる、吾をして先づ外部の來壓を觀察せしめよ、

(一) 疆外の壓力

羅馬かゴツスに、フランク스에、チュートニツクに、スラボニツクに、八面より來侵せられたるは、羅馬の氣壓、羅馬以外の氣壓よりも低度なればなりき、文明は常に氣壓低度に在り、野蠻は常に氣壓高度に在り、物質的の勢力を以て言へば、文明の氣壓は毎に野蠻の氣壓よりも低し、低きは高さに壓せらる、物理然る所なり、

之を支那史に見るに、所謂中國と云ふものは、常に亞細亞大陸文明の一中心なりしなり、東は大平洋より以て西は烏拉爾嶺裏海黒海の邊に至るまで、亞細亞民族の住するもの幾許ぞ、此等の民族は、毎に文明の一中心なる中國に向つて集注し來るなり、支那は亞細亞大陸の最低氣壓の地なりしなり、

太古は措て言はず、周の犬戎より、秦漢の匈奴、晉の五胡、唐の契丹吐蕃、而して宋の遼、金、元、而して明の愛親覺羅に至るまで、其の中國以外の民族に侵蝕せられ、壓抑せられたるもの比々皆然り、然り而して其の爲めに亡ぼされ、爲に代られたるもの、尤も彰明較著なるものは、宋と明とのみ、所謂中國の衣冠地を掃うて空しきは、宋の滅亡と明の傾覆とを然となす、宋は其の建國以來、實に始は遼、中は金、終は元に壓せられたりしなり、壓せられて終に益收縮し、收縮して亦た膨大なる能はず、此れ其の内部に反撥力と抵抗力を失いたればなり、

北宋は一たび眞宗の景德六年に反撥して遼を退かし、寇準の力なり、再たひ神宗の熙寧二年に反撥して夏に抗す、王安石の力なり、北宋は是にて其の反撥力を失へり、徽宗の重和六年金と約して遼を夾攻めむとせり、而して遼は亡びたれども、金は直ちに宋の汴京を陥れたり、南宋は一たび高宗の建炎元年を以て抵抗して金を扼

したり、李綱宗澤の力なり、再び同しく紹興十年を以て抵抗して金を敗る、岳飛の力なり、爾來抵抗力のみは暫く存せり、
 宋は金に對しては猶ほ抵抗力を有せり、然るに亞細亞大陸より歐羅巴大陸に向つて進行せる、一大旋風たる蒙古民族は、既に西南の方中央亞細亞より東歐羅巴に蹂躪し亘りて、更に東南に向ひて中國たる宋を指して進行し來れり、反撥力を既に失ひて僅に抵抗力のみを有する南宋は、氣壓固より低し、蒙古の旋風か地を捲いて來歴する、固より其の所に於て宋の之か爲めに其の抵抗力をさへ失ひたるも、固より怪むに足らず、

宋は江南に在り、金は中原に在り、元は北方に在り、抵抗力のみを存する南宋は、元と共に金を夾撃して其の弊に耐へず、金は亡ひたるも、楊子江以北は是れ元の有、而して金に對して抵抗力を有せる南宋も、元に對しては蓋し全く抵抗力なきもの、如し、抵抗力なきか故に歴せらるゝまゝに收縮するのみなるは、宋の末路なり、尙ほ楊子以南を有せる宋は、是より湖南を失ひ、江西を失ひ、江蘇を失ひ、江浙を失ひ、福建を失ひ、廣東を失ひ、收縮又收縮、宋の朝廷は陸地の上海より排除せられて、海上の一船に在り、禹域九州の版圖收縮せられて、一船の版圖となり、竟に南海の一漚となりて亡

ふ。

如何にして宋か此くの如く、反撥力をも、抵抗力をも失ひ、九域八區の大版圖をば、一點の海漚にまで收縮せしめたるかは、内部の弾力を組成する要素たる、内治と外交との、其の機宜を失したるに職由せずむはあらず、

(一) 内治と外交と

「一」 内治

(甲) 兵糧

宋は唐か藩鎮の弊に懲りたり、羹に懲るゝ者、噲を吹き、狂を矯る者は直に過さず、宋は兵糧を擧げて、之を朝廷に歸し、兵糧の集中をなせり、其の結果は、

- (イ) 中央政府には驕傲用ゆへからざるの兵あり
- (ロ) 州郡倚任すへきの將帥なし
- (ハ) 關外の將軍毎に關内の權臣に掣肘せらる、

(乙) 政權

政治は文儒の朋黨をなして相論議するの具となり、理學道學の徒漫に言論問學の間に、經綸の策を講せむとし、政權は朋黨の玩具となり、畢り政治機關の運轉は、毎に

活動せず其の結果

(ウ) 政令は繁文にして擧禮朝令にして暮改、

(ろ) 迂遠の理學發達して、經濟の術に粗笨なり、

(ハ) 文弱萎靡、武強の氣風空となる、

(丙) 奠都

國の根本は奠都なり、形勝を擇て之に據るに非すひは以て天下を制するに足らず、

(シ) 北宋の都は汴京なり、

汴は形勝の恃むべきなく、勢兵に倚て重をなさざるを得ず、是に於て禁兵、廂兵、鄉兵、蕃兵の制なきを得ず、天下の力、百萬游民たる兵備に彈く、

(ス) 南宋は臨安に都す

臨安(錢塘)の地は狹隘なり、以て萬乘の都となすに足らず、規模の大ならざるは、王業を樹つる所以にあらず、

(イ) 李綱は曰ふ

舉天下形勢、以關中爲上、東南形勢、以建康爲便宜都之、

(ロ) 張浚曰ふ

錢塘僻在一隅、不足以號召、莫若居建康、可以北望中原、形勢を占めて建康に都する能はず、却て臨安に都して力を防備に費やす、其の國力の疲弊する怪むべきものなし、南北兩宋共に、蓋し立國の大本を愆する、奠都の其の地を得ざるは衰亡の一大原因なるへし、

III 外交

(ウ) 守らずして遷都す、

臨安——温州端宗福州——潮州——廣州——潮州淺灣——秀山——井澳——
謝女峽——潮州端宗廟帝廟立新會之崖山

(ろ) 戦ふに及ばずして和を媾す

宋此の如くにして、内治と外交と共に、其の機宜を失し、内部の反撥力と抵抗力とを併せ失ひ、強外の壓力の爲めに、歴し窮せられて、數省の地より二省の地、一省の地より一浦頭、收縮又收縮、終に收縮し盡して、一滴の海漚となり、畢る、是れを宋の衰亡せる所以の梗概なりとす、

宋の亡ふるは此の如し、花の落つる亦此に類するあり、今宇内萬國の歴史は暫く措

き試みに支那姫周以來衰亡の狀を花の墜落に比較し見よ亦一趣味なしとせむや、花獨り櫻のみならずとど同しく邦亦支那史上に於ても獨り宋のみならず花には梅あり櫻あり牡丹あり藤の花桐の花あり萩あり菊あり邦には固より秦あり漢あり晋あり唐あり宋あり明あり皆中國民族がなせる邦家の衰亡したるもの、花の落つるを悲む情と邦の亡ふるを吊するの心を以て吾はこゝに中國民族がなせる邦家にして古來衰亡したるものを取り之を諸種の花が墜落するの狀に比較し見む、

周 梅の花 風雨に打るゝも容易く落ちす

秦 桐の花 開くと見れば落つ (春秋戰國の亂を経て始めて亡ぶ)

漢 藤の花 萎みくゞて後に落つ (更革急激に過ぎ衰亡直に至る)

晋 萩の花 風雨に縁亂して散す (外戚と宦臣との爲に萎縮して亡す)

唐 牡丹花 已の重きに耐はずして落つ (五胡の亂の爲めに動亂して亡せり)

宋 櫻花 力なく風に狼藉たり (自ら藩鎮の弊に堪はずして亡す)

明 菊花 凜として霜に枯る (元の爲めに脆く一撃に亡す)

周は梅の如く、秦は桐の花の如く、漢は藤の花の如く、晋は萩の花、唐は牡丹、宋は櫻、明は菊の如し、其の亡ふるの狀、各其の時代によりて逕庭あり、而かも其の落つるの尤も惜しむべく憐むべきは、櫻花の雪の如く霞の如く、開き盡して咲き亂れたる花、一陣の微風にも力なく、千點萬點、縁亂して、篩ふが如き、若くはなく、隨て其亡ぶるの狀、尤も櫻に似たる宋の衰亡、是れ尤も惜しむべく憐れむべきもの、たらずんばあらず、

花落ちて餘萼存し、墜葩存す、櫻の落つるや、餘萼猶ほ玉葩を存し、墜葩亦た地に敷いて白雪の如し、是れ他の花の凡て及ばざるところ、桐の花も、藤の花も、萩も、牡丹も、菊も、其の凋落のときは、餘萼の存するものも、墜葩の存するものも、亦見るべきものな

し梅花は見るべきも亦櫻に如かず然らば獨り櫻花是れありと曰ふも可なり周の
 亡び秦の亡び漢の亡び晋の亡び唐の亡ぶる皆終に大節大義炳々赫々直ちに嵩華
 と高を争ひ日星と光を競ふものあるを見ず其れたる宋か櫻の落つるや餘華と墜
 葩と雪の如く霜の如し宋の亡ぶる忠烈の臣正大の人凛たるあり巍たるあり文天
 祥即ち是れ斯の人ありて宋の亡ぶる甫めて以て歴史に無窮の光彩を陸離たらし
 むるなり嗚呼是れ猶ほ櫻花繚亂して樹上樹下共に白瓊の如く水精の如く花神繚
 繚として春月と相映し皚々乎皓々乎人の魂を埋没せんとするもの如きか櫻の
 如き天祥は櫻の如くに散りたり而して櫻の如き宋は櫻の如く亡す悲しむべし吊
 すべし

第二 廬陵有人

若し夫れ風帆一挂揚子江を溯り鎮江より江寧に出て建康金陵より稍西南に向ひ、
 魯港池州を経て安慶を右舷に望み更に西南に斜行して湖口に抵り九江即潯陽よ
 り東南彭蠡湖を南下し南康即隆興より鄱陽湖に出て、南望せばこゝに錦江の一
 水か北流して鄱陽湖に入るを見む

錦江の上流南昌臨江以南之を贛江と曰ふ江西廣東兩省の境なる大岳山より發源
 し北流して贛州を過ぎ梅江を合せ萬安を経て吉州に至り潯江を合せ更に北流し
 て峽江を朝せしめ南昌臨江の間を貫流して錦江に注ぐ是を贛江の梗概となす
 贛江か吉州廬陵より更に北流して未だ峽江の水を合するに及ばざるの邊一里わ
 り富田と曰ふ江西省吉安府廬陵縣に屬すこれを宋狀元宰相文天祥其人か甫めて
 宋末の一臣民として生れたるの地となす江の南洞庭湖の南東にして彭蠡湖の西
 南たる江西省中央一團吉州の地即ち是れ天祥か出生し生長し嬉遊し學習したる
 の山河たり吉州の山河千古萬古崢嶸たる者は崢嶸滾々たる者は滾々天祥の英風
 天祥の大節凛々耿々千古に高く萬古に耀く
 天祥字は宋瑞一の字は履善宋の理宗端平三年丙申五月二日子刻を以て廬陵富田
 に生る廬陵の文氏もと成都より來る天祥六世の祖炳然永和鎮に居り五世の祖正
 中に至りて徙りて富田に家す曾祖安世は大保那國公を贈られ大父時用は太傅永
 國公を贈られ父儀字は士表人稱して革齊先生となす太師惠國公を贈らる母は曾
 氏齊魏國夫人を贈らる
 天祥の生るゝや大父時用兒か紫雲に騰して上るを夢み而して天祥生る故に雲孫

と名く既に長し、朋友字して天祥と曰ふ、後字を以て郷に貢せらる、字する者改めて履善と曰ふ、乃ち天祥を名となす、寶祐乙卯三年、進士に擧げられ、對策するに及び、理宗親しく對策を覽る、其の名を見て曰く、これ天の祥乃ち宋の瑞なりと、朋友遂に又字して宋瑞と曰ひ、之を通稱となす、

天祥の人となりて就ては、今之を知悉する能はずと雖も、之に關する二三載籍の叙する所によれば、宋史は云ふ、

體貌豐偉、美皙如玉、秀眉而長目、顧盼輝然。

廬陵劉岳申撰及吉水胡廣撰の二傳紀は、共に云ふ、

英姿雋爽、目光如電。

以て天祥の容貌奇偉にして、温醇の風を帶ふるものありしを見るへし、

天祥の嬰孩時代も、亦之を審にするを得ずと雖も、其の家庭に就ては、二三の記載なきにあらず、父の莊重嚴肅なる一の儒者たりしことは、後來天祥か燕獄より、男陸子に批付したる、獄中家書に於て、

汝祖革齋先生、以詩禮起門戶、吾與汝生父及汝叔同產三人、

と曰ふに見ても明なれども、更に天祥が撰せる、先君子革齋先生行實なる者に觀な

は、此の端莊なる郷先生の眉目を窺ふに於て、蓋餘師あらむ、曰く、

先君子嘗言、滯學守固、化學來新、以一革字、志韋佩、人皆稱革齋、性愛竹、依竹闢一室、傍竹居、或稱竹居、不竹孤、聞之諸父、先君子幼穎慧、器質端重、進止如有尺寸、書經目、輒曉大義、越時舉全文、不一遺、見鄉曲前輩、必肅容請益、暨長、天才逸發、志聞道、嗜書如飴、終日忘飲殮、夜擊燈密室、至丙丁、或達旦、黎明挾冊、立認蠅字、不敢抗聲、愕寐者、人雖苦之甘焉、蓄書如山、經史子集、皆手自標、序無一案、朱黃勘點、纖屑促密、靡不到、至天文地理醫卜等書、游鶯殆徧、手錄積帙、以百、揮汗呵凍、弗教、鈎引貫穿、舉大包小、各有條、問貨難疑、剖析響應、某事出某書某卷、且指數以對、

父は此の如く端莊勤勉なる郷先生たり、而して母は則ち如何、天祥の弟壁が撰せる、
齊魏兩國夫人行實を見るに曰く、

先夫人、生有華性、事舅姑盡孝、相夫子以儉勤、自奉極菲薄、惟延師教子、至鬻簪珥給費、無吝色、

父業已に彼の如く端莊にして勤勉、母亦た此の如く、眞摯にして儉勤、然らば天祥が、鞠育され、撫養されたる家庭の一斑も、之を知る亦難きにあらず、簪珥を鬻いてすら、尙は兒の爲めに師を延き、學を修むるの費を給するを吝まず、家庭に於ける母の眞

攀此の如し而して家庭に於ける父の嚴肅更に畏敬すべきものあり天祥の先君子革齊先生行實を看よ

始天祥兄弟幼且長先君子日授書痛策彌夜呼近燈誦日課誦竟旁摘曲詰使不早恬以習于弗懈小失眠即示顔色雖盛寒暑不縱檢束天祥兄弟慄々擊漿水無色于偷自此名師端友招聘仍年至時先疇給費久之室罄力弗逮乃率天祥兄弟藏修于竹居陳所哀籤軸俾挾精剔華鈎索遐奧董綱要竟日夕弗倦雖貧浩然自怡有未見書輒質衣以市得書注意鑽研又以授天祥俾轉教諸弟繇是程督益峻天祥兄弟奉嚴訓早暮侍膝下唯諾怡愉不翅師友或書聲呬唔或歛襟各靜坐潛誦或掩卷相與感嗟人情世道此時氣象父母俱存兄弟無故天下之樂莫加焉

此の如く嚴肅なる父と此の如く眞摯なる母の下に兄弟嬉遊し學習し其の間趨師友の如きのみならず一の趣味多き家庭之れか教養を受け之か薰陶を承けたる天祥其の幼にして夙に挺然群を抜くの志操を保持したる固より怪むに足るものなし

天祥稍長して郷校に遊び學ぶ學宮には郷先生歐陽文忠公修揚忠襄公邦父胡忠簡公銓の像を祠せり此の諸先生蓋し皆廬陵の人なり天祥之を見欣然として之を慕

ふて曰く没して其の間に俎豆せられずは夫に非すと前賢の景行端なく一道の靈光を天祥の頭腦中に投入せり特に胡詮如上高宗封事の如何に天祥の心底に徹するものありしかは固より多言を要せざる所に屬す天祥の志操此の時業已に定る

天祥は此の如き鞠育と監督と策彌とを承けて此の如き巋然たる秀拔の志操を挺持し彼今や年將に二十ならむとす孤鶴の雞群に秀つるが如く泰華の連緯に抜くが如く天祥は業已に一代の偉人たり百世の儀標たるの面目を掲げむとせり

寶祐乙卯三年天祥二十なり字を以て郡の貢士に擧げらる弟壁も亦同しく擧らる提舉知郡李迪擧送る天祥時に次鹿鳴宴詩一首あり

禮樂皇皇使者行光華分似及鄉英貞元虎榜雖聯捷司隸龍門幸綴名二宋高科猶易事兩蘇清節乃眞榮囊書自負應如此肯遜當年稱正平

時に天祥仲弟霆孫年尙は十六未だ試せず窓に墨書して曰く出師未捷身先死長使英雄淚滿襟と蓋亦奇才なり惜むらくは天祥貢舉の日に先つること一月疾を以て夭折す父革齊の哀惜幾何そや涕を墜り哀惋し恒々として痛悼せり而して今や天祥も弟壁も將に共に東の方臨安に送られ禮部に進められむとす新に一子を失へ

る父革齋、今亦佗の二子に別れざるを得ず、天祥兄弟其の共に俄に左右を去るは、父君の哀を重ふするものなるを恐れ、同年十二月、父を奉し、父子三人吉州を出で、東の方臨安を指す、道玉山を經由す、一異僧に遇ふ、僧天祥を指して曰く、此郎必ず一代の偉人たらむ、然れども一家の福にあらずと、かくて父子三人相具して都に上る、

寶祐丙辰四年の難旦、彼天祥父子三人臨安の旅邸に在り、屠蘇の杯を舉げて、開曆の祝をなせり、而して天祥が其の天資の才氣を煥發して、集英殿上光儀萬丈、一世を驚破し、百代を推倒する、將に日あらむとす、天祥大飛躍の第一着歩、此の時を以て始まらむとす、天驥は今や躍らむとす、孤鶴は將に啜らむとす、天驥は今や躍らむとす、孤鶴は將に啜らむとす、

第三 廷對第一

實祐丙辰四年二月朔を以て、禮部は榜を開けり、中正は名を奏せり、天祥弟壁と同一く登る、五月八日大廷に試策あり、天祥河魚に苦む、此の日天祥丑寅の間を以て、病後の身を起こし、強いて籠輿に乘し、廷に趨む、丑寅の間は、今の午前二時より四時の間に當る、廷に到る頃は、寅卯の間即ち今の午前五時なり、諸進士皆な麗正門の旁門

に赴む、天祥群に随ひ併を推して入る、病餘の天祥も、是に至つて頂踵共に汗流れ、身軀に蘇醒するを覺ゆ、卯の刻即ち今の午前六時、集英殿の殿廊に至り、恭しく御策題を受け、題命の意に就き對策す、文思泉の如く湧き、運筆飛ふに似たり、對する所且萬言、未時即ち今の午後二時、天祥業已に出つ、然らば天祥が集英殿に對策するの時間、は僅かに八時間に過ぎず、御試策題に曰く、

蓋聞道之大原出於天、超乎無極、太極之妙、而實不離乎日用事物之常、根乎陰陽五行之隨、而實不外乎仁義禮智剛柔善惡之際、天以澄著地以靖謐、人極以昭明、何莫由斯道也、聖聖相傳、同此一道、由修身而治人、由致知而齊家、治國平天下、本之精神心術、達之禮樂刑政、其體甚微、其用則廣、歷千萬世而不可易、然功化有深淺、證效有遲速者、何歟、朕以寡昧、臨政、願治于茲、歷年、志愈勤、道愈遠、宜乎其未朕也、朕心疑焉、子大夫明先聖之術、咸造在廷、必有切至之論、朕將虛已以聽、三墳而上、大道難名、五典以來、常道始著、日月星辰、順乎上、鳥獸草木、若於下、九功惟叙、四夷來王、百工熙哉、庶事康哉、非聖神功化之驗歟、然人心道心、寂寥片語、其危微精一之妙、不可以言、既歟、誓何爲而時、會何爲而疑、俗何以不若結繩、治何以不若畫像、以政疑民、以禮疑士、以天保采薇、治內外、憂勤危懼、僅克有濟、何帝王勞逸之殊歟、抑隨時損益、道不同歟、及夫六典建官、蓋爲民

極則不過曰治曰教曰禮曰政曰刑曰事而已。豈道之外又有法歟。自時厥後以理欲之消長。驗世道汗隆。陰河之日常多。陽明之日常少。刑名雜霸。佛老異端。無一毫幾乎道。暇乎無以讓焉。然務德化者不能無上郡鵬門之警。施仁義者不能無末年輪臺之悔。甚而無積仁累德之素。紀綱制度爲足維持。憑藉者又何歟。朕上嘉下樂。夙興夜寐。靡遑康寧。道久而未洽。化久而未成。天變游臻。民生寡遂。人才乏而士習浮。國計殫而兵力弱。符澤未清。邊備孔棘。豈道不足以御世歟。抑化裁推行。有未至歟。夫不息則久。久則微。今胡爲而未微歟。變則通。通則久。今其可以屢更歟。子大夫熟之復之。勿激勿泛。以副朕詳延之意。寶祐四年五月八日。

天祥對策して曰く

臣對恭惟皇帝陛下。處恒之久。當泰之交。以二帝三王之道。會諸心。將三紀于此矣。臣等鼓舞於鳶飛魚躍之天。皆道體流行中之一物。不自意得旅進于陛下之庭。而陛下且嘉之。論道。道之不行也久矣。陛下之言及此。天地神人之福也。然臣所未解者。今日已當道久化成之時。道洽政治之候。而方歎焉有志勸道遠之疑。豈望道而未之見耶。臣請溯太極動靜之根。推聖神功化之驗。就以聖問中不息一語。爲陛下勉。幸陛下試垂聽焉。臣聞天地與道同一不息。聖人之心與天地同一不息。上下四方之宇。往古來今之宙。其

間百千萬變之消息盈虛。百千萬變之轉移闔闢。何莫非道。所謂道者一不息而已矣。道之隱於渾淪。藏於未瑀。未瑀之天。當是時。無極大極之體也。自太極分而陰陽。則陰陽不息。道亦不息。陰陽散而五行。則五行不息。道亦不息。自五行又散而爲人心之仁義禮智。剛柔善惡。則乾道成男。坤道成女。穹壤間。生生化化之不息。而道亦與之相爲不息。然則道一不息。天地亦一不息。天地之不息。固道之不息者爲之。聖人出而爲天地立心。爲生民立命。爲往聖繼絕學。爲萬世開太平。亦不過以一不息之心。充之。充之而修身治人。此一不息也。充之而致知。以至齊家治國平天下。此一不息也。充之而自精神心術。以至於禮樂刑政。亦此一不息也。自有三墳五典以來。以至於大平六典之世。帝之所以帝王。所以王。皆自其一念之不息者始。秦漢以降。而道始離。非道之離也。知道者之鮮也。雖然其間。英君誼辟。固有號爲稍稍知道矣。而又沮於行道之不力。知務德化矣。而不能不尼之以黃老。知施仁義矣。而不能不遏之以多欲。知四年行仁矣。而不能不盡之以近效。上下二三十年間。率補過時。架漏度日。母惟夫暇乎無以議爲也。獨惟我朝。式克至于今日。休陛下傳列聖之心。以會藝祖之心。以參帝王之心。參天地之心。三十三年間。臣知陛下不貳以二。不參以三。托乎天運。宵爾神化。此心之天。混兮闢兮。其無窮也。然臨御浸久。持循浸熟。而算計見效。猶未有以大快聖心者。上而天變不能以盡無。下而民生不能

以盡達人才士習之未甚純。國計兵力之未甚充。以至盜賊兵戈之警。所以貽宵旰之憂者。尤所不免。然則行道者殆無驗也邪。臣則以爲道非無驗之物也。道之功化甚深也。而不可以爲迂。道之證效甚遲也。而不可以爲遠。維天之命。於穆不已。天地之所以爲天地也。之德之純。純亦不已。聖人之所以爲聖人也。爲治順力行。何如耳。焉有行道於歲月之暫。而遽責其驗之爲迂且遠邪。臣之所望於陛下者。法天地之不息而已。始以近事言。則責躬之言方發。而陰雨旋霽。是天變未嘗不以道而弭也。賑錢之典方舉。而都民歡呼。是民生未嘗不以道而安也。論辯建明之詔一頒。而人才士習稍稍渾厚。招填條具之旨一下。而國計兵力稍稍充實。安吉慶元之小獲。維揚灑水之雋功。無非憂勤於道之明驗也。然以道之極功論之。則此淺效耳。速效耳。指淺效速效。而遽以爲道之極功。則漢唐諸君之用心是也。陛下行帝而帝。行王而王。而肯襲漢唐事邪。此臣所以贊陛下之不息也。陛下儻自其不息者而充之。則與陰陽同其化。與五行同其運。與乾坤生生化化之理同其無窮。雖充而爲三紀之風移俗易可也。雖充而爲四十年闕空刑措可也。雖充而爲百年德洽於天下可也。雖充而爲千世過曆億萬年敬天之休可也。豈止如聖問八者之事。可徐就理而已哉。臣謹昧死。上愚對。臣伏讀聖策曰。蓋聞道之大原出於天。起乎無極太極之妙。而實不離乎日用事物之常。根乎陰陽五行之隨。而實不外仁義禮智。

剛柔善惡之際。天以澄著。地以靖謐。人極以昭明。何莫由斯道也。聖聖相傳。同此一道。由修身而治人。由致治而齊家。治國平天下。本之於精神心術。達之於禮樂刑政。其體甚微。其用則廣。歷千萬世而不可易。然功化有淺深。證效有遲速。何歟。朕以寡昧臨政。願治于茲歷年。志愈勤。道愈遠。竇乎其未朕也。朕心疑焉。子大夫明先王之術。咸造在庭。必有切至之論。朕將虛已以聽。臣有以見陛下遡道之本原。求道之功效。且疑而質之臣等也。臣聞聖人之心。天地之心也。天地之道。聖人之道也。分而言之。則道自道。天地自天地。聖人自聖人。合而言之。則道一不息也。天地一不息也。聖人亦一不息也。臣請溯其本原言之。茫茫堪輿。扶扎無紀。渾渾元氣。變化無端。人心仁義禮智之性。未賦也。人心剛柔善惡之氣。未稟也。當是時。未有人心。先有五行。未有陰陽。未有陰陽。先有無極太極。未有無極太極。則太極無形。沖漠無朕。而先有此道。未有物之先。而道具焉。道之體也。既有物之後。而道行焉。道之用也。其體則微。其用甚廣。即人心。而道在人心。即五行。而道在五行。即陰陽。而道在陰陽。即無極太極。而道在無極太極。貫顯微。兼費隱。包小大。通物我。道何以若此哉。道之在天下。猶水之在地中。地中無往而非水。天下無往而非道。水一不息之流也。道一不息之用也。天以澄著。則日月星辰循其經。地以靖謐。則山川草木順其常。人極以昭明。則君臣父子安其倫。流行古今。綱紀造化。何莫由斯道也。一日而道。

息焉。雖三才不能以自立。道之不息。功用固如此。夫聖人體天地之不息者也。天地以此道而不息。聖人亦以此道而不息。聖人立不息之體。則斂於修身。推不息之用。則散於治人。立不息之體。則寓於致知。以下之工夫。推不息之用。則顯於齊家治國平天下之效。立不息之體。則本之精神心術之微。推不息之用。則達之禮樂刑政之著。聖人之所以爲聖人者。猶天地之所以爲天地也。道之在天地間者。常久而不息。聖人之於道。其可以頃刻息邪。言不息之理者。莫如大易。莫如中庸。大易之道。至於乾道變化。各正性命。保合太和。而聖人之論法天。乃歸之自強不息。中庸之道。至於溥博淵泉。上天之載。無聲無臭。而聖人之論配天地。乃歸之不息。則久豈非乾之所以剛健中正。純粹精也者。一不息之道耳。是以法天者。亦以一不息。中庸之所以高明博厚。悠久無疆者。一不息之道耳。是以配天地者。亦以一不息。以不息之心。行不息之道。聖人即不息之天地也。陛下臨政。願治于茲歷年。前此不息之歲月。猶日之自朝而午。今此不息之歲月。猶日之至午而中。此正勉強行道。大有功之日也。陛下勿謂數十年間。我之所以擔當宇宙。把握天地。未嘗不以此道。至于今日。而道之驗如此。其迂且遠矣。以臣觀之道。猶百里之途也。今日則適六七十之候也。進於道者。不可以中道而廢。遊於途者。不可以中途而畫。孜孜矻矻。而不自已焉。則適六七十里者。固所以爲至百里之階也。不然。自止於六七十里之間。則

百里雖近焉。能以一武到哉。道無淺功化。行道者。何可以深爲迂。道無速證效。行道者。何可以遲爲遠。惟不息。則能極道之功化。惟不息。則能極道之證效。氣機動盪於三極之間。神采灌注於萬有之表。要自陛下此一心始。臣不暇遠舉。請以仁宗皇帝事爲陛下陳之。仁祖一不息之天地也。康定之詔曰。祗勤抑畏。慶曆之詔曰。不敢荒寧。皇祐之詔曰。緇念爲君之難。深惟履立之重。慶曆不息之心。即康定不息之心也。皇祐不息之心。即慶曆不息之心也。當時仁祖。以道德感天地。以福祿勝人力。國家綏靜。邊鄙寧謐。若可以已矣。而猶未也。至和元年。仁祖之三十三年也。方且露立仰天。以畏天變。碎通天犀。以救民生。處買斷吏銓之職。擢公弼殿柱之名。以厚人才。以昌士習。納景初減用之言。聽范鎮新兵之諫。以裕國計。以強兵力。以至講周禮。薄征緩刑。而拳拳以盜賊爲憂。選將師明紀律。而汲汲以西北虜爲慮。仁祖之心至此而不息。則與天地同其悠久矣。陛下之心。仁祖之心也。范祖禹有言。欲法堯舜。惟法仁祖。臣亦曰。欲法帝王。惟法仁祖。法仁祖。則可至天德。願加聖心焉。臣伏讀聖策曰。三墳以上云云。豈道之外。又有法歟。臣有以見陛下慕帝王之功化。證效而亦意其各有淺深遲速也。臣聞帝王行道之心。一不息而已矣。堯之兢兢。舜之業業。禹之孜孜。湯之漂漂。文王之不已。武王之無貳。成王之無逸。皆是物也。三墳遠矣。五典猶有可論者。臣嘗以五典所載之事。推之。當是時。日月星辰之順。以道而順也。

鳥獸草木之若，以道而若也。九功惟叙，以道而叙也。四夷來王，以道而來王也。百工以道而熙，庶事以道而康。光天之下，至於海隅蒼生，蓋無一而不拜帝道之賜矣。垂衣拱手，以自逸于土階巖廊之上，夫誰曰不可，而堯舜不然也。方且考績之法，重於三歲，無歲而敢息也。授曆之命，嚴於四時，無月而敢息也。凜凜乎一日二日之戒，無日而敢息也。此猶可也。授受之際，而堯之命舜，乃曰：允執厥中，夫謂之執者，戰兢保持，而不敢少放之謂也。味斯語也，則堯之不息，可見已。河圖出矣，洛書見矣，執中之說未聞也。而堯獨言之，堯之言贊矣，而舜之命禹，乃復益之，以人心惟危，道心惟微，惟精惟一，之三言，夫致察於危微，精一之間，則其戰兢保持之念，又有甚於堯者。舜之心，其不息，又何如哉。是以堯之道化，不惟驗於七十年在位之日，舜之道化，不惟驗於五十年視阜之時。讀萬世永賴之語，則唐虞而下數千百年間，天得以爲天地，地得以爲地，人得以爲人者，皆堯舜之賜也。然則功化抑何其深，證效抑何其運歟。降是而王，非固勞於帝者也。太僕日散，風氣日開，人心之機械日益巧，世變之乘除不息，而聖人之所以網維世變者，亦與之相爲不息焉。俗非結繩之淳也，治非畫象之古也，師不得不警，侯不得不會，民不得不凝，之以政，士不得不凝，之以禮，內外異治，不得不以采薇天保之治治之，以至六典建官，其所以曰治曰禮曰教曰利曰政曰事者，亦無非扶世道而不使之窮耳。以勢而論之，則夏之治，不如唐虞商

之治，又不如夏周之治，又不如商帝之所以帝者，何其逸，王之所以王者，何其勞，慄慄危懼，不如非心黃屋者之爲適也。始於憂勤，不如恭己南面者之爲安也。然以心而觀，則舜之業業，即堯之兢兢，禹之孜孜，即舜之業業，湯之慄慄，即禹之孜孜，文王之不已，武王之無貳，成王之無逸，何莫非兢兢業業，孜孜慄慄之推也。道之散於宇宙間者，無一日息。帝王之所以行道者，亦無一日息。帝王之心，天地之心也，尚可以帝者之爲逸，而王者之爲勞耶。臣願陛下求帝王之道，必求帝王之心，則今日之功化證效，或可與帝王一視矣。臣伏讀聖策曰：自時厥後，云云，爲足以維持憑藉者何歟。臣有以見陛下陋漢唐之功化證效，而且爲漢唐世道發一慨也。臣聞不息則天，息則人，不息則理，息則欲，不息則陽明，息則陰濁。漢唐諸君，天資敏，地位高，使稍有進道之心，則六五帝，四三王，亦未有難能者。奈何天不足以制人，而天反爲人所制，理不足以御欲，而理反爲欲所御，陽明不足以勝陰濁，而陽明反爲陰濁所勝，是以勇於進道者少，沮於求道者多。漢唐之所以不唐虞三代也歟。雖然是爲不知道者言也，其間亦有號爲知道者矣。漢之文帝武帝，唐之太宗，亦不可謂非知道者，然而亦有議焉。先儒嘗論漢唐諸君，以公私義利，分數多少爲治亂。三君之心，往往不純乎天，不純乎人，而出入於天人之間，不純乎理，不純乎欲，而出入乎理欲之間，不純乎陽明，不純乎陰濁，而出入乎陽明陰濁之間，是以專務德化，雖足以陶後

元太和之風，然而尼之以黃老，則鴈門上郡之警，不能無。外施仁義，雖足以致建元富庶之盛，然而遏之以多欲，則輪臺末年之悔，不能免。四年行仁，雖足以開真觀昇平之治，然而畫之以近效，則紀綱制度，曾不足爲再世之憑藉。蓋有一分之道心者，固足以就一分之事功；有一分之心者，亦足以召一分之事變。世道汗隆之分數，亦係於理欲消長之分數而已。然臣嘗思之，漢唐以來爲道之累者，其大有二：一曰雜伯，二曰異端。時君世主，有志於求道者，不陷於此，則陷於彼。姑就三君而言，則文帝之心，異端累之也；武帝太宗之心，雜伯累之也。武帝無得於道，憲章六經，統一聖真，不足以勝其神仙土木之私；干戈刑罰之慘，其心也荒。太宗全不知道，闔門之耻，將伯之誇，末年遼東一行，終不能以克其血氣之暴，其心也驕。雜伯一念，憧々往來，是固不足以語常久不息之事者。若文帝稍有帝王之天資，稍有帝王之地步，一以君子長者之道待天下，而晁錯輩刑名之說，未嘗一動其心，是不累於雜伯矣。使其以二三十年恭儉之心，而移之以求道，則後元氣象，且將駸駸乎商周，進進乎唐虞，奈何帝之純心，又問於黃老之清淨，是以文帝僅得爲漢唐之令主，而不得一儕於帝王。嗚呼！武帝太宗，累以雜伯，君子固不敢以帝王事望之；文帝不爲雜伯所累，而不能不累於異端，是則重可惜已。臣願陛下，監漢唐之跡，必監漢唐之心，則今日之功化證效，將超漢唐數等矣。臣伏讀聖策曰：朕上嘉下樂，云

云：抑化裁推行，有未至歟？臣有以見陛下念今日八者之務，而甚有望乎爲道之驗也。臣聞天變之來，民怨招之也；人才之乏，士習蠹之也；兵力之弱，國計屈之也；虞寇之警，盜賊因之也。夫陛下以上嘉下樂之勤，夙興夜寐之勞，愷歲月之逾邁，亦欲以少見吾道之驗耳。俯視一世，未能差強人意。八者之弊，臣知陛下爲此不滿也。陛下分而以八事問，臣合而以四事對，請得以熟數之於前。何謂天變之來，民怨招之也？天視自我民視，天聽自我民聽。天明畏自我民明畏，人心之休戚，天心所因以爲喜怒者也。熙寧間大旱，是時河陝流民入京師，監門鄭俠，書流民圖以獻。且曰：陛下南征北伐，皆以勝捷之圖來上，料無一人以父母妻子遷移困頓，皇皇不給之狀爲圖以進者。覽臣之圖，行臣之言，十日不雨，乞正欺君之罪，上爲之罷新法十八事。京師大雨八日，天人之交，間不容髮，載在經史，此類甚多。陛下以爲今之民生何如邪？今之民生困矣。自瓊林大盈積於私貯，而民困；自建章通天頰於營繕，而民困；自獻助疊見於豪家巨室，而民困；自和籩不問於閭閻下戶，而民困；自所至貪官暴吏，視吾民如家雞圈豕，惟所咀啖，而民困；嗚呼！東南民力竭矣。書曰：怨豈在明，不見是圖。今尙可謂之不見乎？書曰：怨不在大，亦不在小。今尙可謂之小乎？生斯世爲斯民，仰事俯育，亦欲各遂其父母妻子之樂，而操斧斤，淬鋒鏑，日夜思所以斬伐其命脉者，滔滔皆是。然則臘雪斬瑞，蜚雷愆期，月犯於木星，殞爲石，以至土雨地震之

變無恠夫屢書不一書也。臣願陛下持不息之心，急求所以爲安民之道，則民生旣和，天變或於是弭矣。何謂人才之乏？士習蠱之也。臣聞窮之所養，達之所施，幼之所學，壯之所行，今日之修於家，他日之行於天子之庭者也。國初諸老嘗以厚士習爲先務，事收落韻之李迪，不取鑿說之賈邊，事收直言之蘇轍，不取險恠之劉機，建學校，則必崇經術，復鄉舉，則必欲參行藝，其後國子監取湖學法，建經學治道，邊防水利等齋，使學者因其名以求其實，當時如程頤、徐積、呂希哲皆出其中，嗚呼！此元祐人物之所從出也。士習而薄，最關人才，從古以來，其語如此，陛下以爲今之士習何如耶？今之士大夫之家，有子而教之，方其幼也，則授其句讀，擇其不戾於時，不震于有司者，俾熟復焉，反其長也，細書爲工，累牘爲富，持試於鄉校者，以是較藝於科舉者，以是取青紫而得車馬也，以是父兄之所教，詔師友之所講明，利而已矣。其能卓然自拔於流俗者，幾何人哉！心術旣懷於未仕之前，則氣節可想於旣仕之後，以之領郡邑，如之何？責其爲卓茂黃霸，以之鎮一路，如之何？責其爲蘇章何武，以之曳朝紳，如之何？責其爲汲黯望之，奔競於勢要之路者，無恠也。趨附於權貴之門者，無恠也。牛維馬繫，狗苟蠅營，患得患失，無所不至者，無恠也。悠悠風塵，靡靡俗，清芬消歇，濁滓橫流，惟皇降衷，秉彝之懿，萌蘖於牛羊斧斤相尋之衝者，其有幾哉！厚今之人才，臣以爲變今之士習而後可也。臣願陛下持不息之心，急求所以爲

淑士之道，則士風一淳，人才或於是而可得矣。何謂兵力之弱？國計屈之也。謹按國史，治平間，遣使募京畿淮南兵，司馬光言：邊臣之請兵無窮，朝廷之募兵無已，倉庫之粟帛有限，百姓之膏血有涯，願詔禁軍訓練，舊有之兵，自可備禦，臣聞古今天下，能免於弱者，必不能免於貧，能免於貧者，必不能免於弱，一利之興，一害之休，未有交受其害者。今之兵財，則交受其害矣。自東海城築，而調淮兵以防海，則兩淮之兵不足，自襄樊復歸，而併荆兵以城襄，則荆湖之兵不足，自腥氣染於漢水，冤血澱於寶峰，而正軍忠義，空於死徙者過半，則川蜀之兵又不足，江淮之兵又抽而入蜀，又抽而實荆，則下流之兵愈不足矣。荆湖之兵又分，而策應分而鎮撫，則上流之兵愈不足矣。夫國之所持以自衛者，兵也，而今之兵不足如此，國安得而不弱哉！扶其弱而歸之強，則招兵之策，今日直有所不得已者。然召募方新，調度轉急，問之大農，大農無財，問之版曹，版曹無財，問之餉司，餉司無財，自歲幣銀絹外，未聞有畫一策爲軍食計者，是則弱矣。而又未免於貧也。陛下自肝鬲，近又創一安邊太平庫，專一供軍，此藝祖積糴帛以易賊首之心也。仁宗皇帝出錢帛以助兵革之心也。轉易之間，風采立異，前日之弱者，可強矣。然飛芻輓粟，給餉餽糧，費於兵者幾何，而琳宮梵宇，照耀湖山，土木之費，則漏卮也。列竈雲屯，樵蘇後爨，費於兵者幾何，而霓裳羽衣，靡金飾翠，宮庭之費，則尾閭也。生熟口券，月給衣糧，費於兵者幾何，而

量珠輦王倖寵希恩威曉之費則濫觴也。蓋天下之財專以供軍則財未不足者。第重之以浮費重之以冗費則財始瓶罄而籌耻矣。如此則雖欲足兵其何以給兵耶。臣願陛下持不息之心急求所以爲節財之道則財計以充兵力或於是而可強矣。何爲虜寇之驚盜賊因之也。謹按國史紹興間揚么寇洞庭連跨數郡大將王瓌不能制時僞齊狹虜使李成寇襄漢么與交通朝廷患之始命岳飛措置上流已而逐李成擒揚么而荆湖平臣聞外之虜寇不能爲中國患而其來也必待內之變內之盜賊亦不能爲中國患而其起也必將納外之侮盜賊而至於通虜寇則腹心之大患也已今之所謂虜者固可畏矣然而逼我蜀則蜀師策瀘水之勳窺我淮則淮帥奏維揚之凱狼子野心固不可以一捷止之然使之無得棄去則中國之技未爲盡出其下彼亦猶畏中國之有其人也獨惟舊海在天一隅逆難兀之者數年于茲颶風瞬息一葦可航彼未必不朝夕爲趨浙計然而未能焉短於舟疎於水懼吾唐島之有李寶在耳然洞庭之湖烟水沉寂而浙右之湖濤洶沸驚區區妖孽且謂有揚么之漸矣得之京師之耆老皆以爲此寇出沒倏閃往來翕霍駕舟如飛運施如神而我之舟師不及焉夫東南之長技莫如舟師我之勝兀尤於金山者以此我之斃逆亮於采石者以此而今此曹反挾之以制我不武甚矣萬一或出於揚么之計則前日李成之不得志於荆者未必今日之不得志於浙也。曩聞山東饑饉

有司貪市權之利空蘇湖根本以資之廷紳猶謂互易安知無爲其鄉道者一夫登岸萬事瓦裂又聞魏村江灣福山三寨水軍與販鹽課以資逆難廷紳猶謂是以扞衛之師爲商賈之事以防拒之卒開鄉道之門憂時識治之見往往如此肘腋之蜂蠹懷袖之蛇蝎是其可以忽乎哉陛下近者命發運兼憲合兵財而一其權是將爲滅此朝食之圖矣然屯海道者非無軍控海道者非無將徒有王瓌數年之勞未聞岳飛八日之捷子太叔平菴澤之盜恐不如此長此不已臣懼爲李成開道地也。臣願陛下持不息之心求所以弭寇之道則寇難一清邊備或於是而可寬矣。臣伏讀聖策曰夫不息則久久則微今胡爲而未徵歟變則通通則久今其可以屢更歟臣有以見陛下久於其道而甚有感乎中庸大易之格言也臣聞天久而不墜也以運地久而不隕也以轉水久而不腐也以流日月星辰而常新也以行天下之凡不息者皆以久也中庸之不息即所以爲大易之變通大易之變通即所以驗中庸之不息變通者之久固肇於不息者之久也蓋不息者其心變通者其跡其心不息故其跡亦不息遊乎六合之內而縱論乎六合之外生乎百世之下而追想乎百世之上神化天造天運無端發微不可見充周不可窮天地之所以變通固自其不息者爲之聖人之久於其道亦法天地而已矣天地以不息而久聖人亦以不息而久外不息而言久焉皆非所以久也。臣嘗讀無逸一書見其享國之久者有四君

焉。而其間三君爲最久。臣求其所以久者。中宗之心。嚴恭寅畏也。高宗之心。不敢荒寧也。文王之心。無淫于逸。無遊於畋也。是三君者。皆無逸而已矣。彼之無逸。臣之所謂不息也。一無逸而其效如此。然則不息者。非所以久歟。陛下之行道。蓋非一朝夕之暫矣。寶紹以來。則涵養此道。端平以來。則發揮此道。嘉熙以來。則把握此道。嘉熙而淳祐。淳祐而寶祐。十餘年間。無非持循此道之歲月。陛下處此也。庭燎未輝。臣知其宵衣以待。日中至昃。臣知其玉食弗遑。夜漏已下。臣知其丙枕無寐。聖人之運。亦可謂不息矣。然既往之不息者。易方來之不息者。難。久而不息者。易。愈久而愈不息者。難。听臨大庭。百辟星希。陛下之心。此時固不息矣。暗室屋漏之隱。試一警省。則亦能不息否乎。日御經筵。學士雲集。陛下之心。此時固不息矣。宦官女子之近。試一循察。則亦能不息否乎。不。息於外者。固不能保其不息於內。不。息於此者。固不能保其不。息於彼。乍勤乍怠。乍作乍輟。則不。息之純心。間矣。如此則陛下雖欲久則微。臣知中庸九經之治。未可以朝夕見也。雖欲通則久。臣知繫辭十三封之功。未可以歲月計也。淵媚嬖孽之中。虛明應物之地。此全在陛下自斟酌自執持。頃刻之力不繼。則微久之功俱廢矣。可不戒哉。可不懼哉。陛下之所以策臣者。悉矣。臣之所以忠於陛下者。亦既略陳於前矣。而陛下策之篇終。復曰。子大夫熟之復之。勿激勿泛。以副朕詳延之意。臣伏讀聖策至此。陛下所謂詳延之意。蓋可識已。夫陛下自即

位以來。未嘗以直言罪士。不惟不罪之。以直言。而且導之以直言。臣等嘗恨無由以至天子之庭。以吐其素所蓄積。幸見錄於有司。得以借玉階方寸地。此正臣等披露肺腑之日也。方將明目張膽。寒寒譎譎。言天下事。陛下乃戒之。以勿激勿泛。夫泛固不切矣。若夫激者。忠之所發也。陛下胡併與泛者之言。而厭之邪。厭激者之言。則是將胥臣等而爲容容唯唯之歸邪。然則臣將爲激者歟。將爲泛者歟。抑將遷就陛下之說。而姑爲不激不泛者歟。雖然。奉對大庭。而不激不泛者。固有之矣。臣於漢得一人焉。曰董仲舒。方武帝之策仲舒也。慨然以欲聞大道之要爲問。帝之求道。其心蓋甚銳矣。然道以大言。帝將求之。虛無渺冥之鄉也。使仲舒於此。過言之則激。淺言之則泛。仲舒不激不泛。得一說曰。正心。武帝方將求之。虛無渺冥之鄉。仲舒乃告之以真實淺近之理。茲陛下謂所切至之論也。奈何武帝自恃其區區英明之資。超偉之識。謂其自足以凌跨六合。籠駕八合。而顧於此語。忽焉仲舒以江都去。而武帝所與論道者。他人矣。臣固嘗爲武帝惜也。堂堂天朝。固非漢比。而臣之賢。亦萬不及仲舒。然亦不敢激不激。泛切於聖問之所謂道者。而得二說焉。以爲陛下獻。陛下試采覽焉。一曰。重宰相以開公道之門。臣聞公道在天地間。不可一日壅闕。所以昭蘇而滌決之者。宰相責也。然扶公道者。宰相之責。而主公道者。天子之事。天子而侵宰相之權。則公道已矣。三省樞密。謂之朝廷。天子所與謀大政。出太令之地

也。政令不出於中書。昔人謂之斜封墨勅。非盛世事。國初三省紀綱甚正。中書造命門下。審覆。尚書奉行。宮府之事。無一不統於宰相。是以李沆猶得以焚立妃之詔。王且猶得以沮節度之除。韓琦猶得出空頭勅以逐內侍。杜衍猶得封還內降。以裁僥倖。蓋宰相之權尊。則公道始有依而立也。今陛下之所以爲公道計者。非不悉矣。以資緣戒外戚。是以公道責外戚也。以裁制戒內司。是以公道責內司也。以舍法用例戒群臣。是以公道責外廷也。雷霆發。星日燭幽。天下於是咸服陛下之明。然或謂比年以來。大庭除授於義有所未安。於法有所未便者。悉以聖旨行之。不惟諸司陞補。上瀆宸奎。而統帥臚級。闕職超遷。亦以資緣而得恩澤矣。不惟姦賊濶洗。上勞渙汗。而選人通籍。姦胥追刑。亦以鑽刺而拜寵命矣。甚至閭閻預屑之鬪訟。皂隸狼賤之干求。悉達內庭。盡由中降。此何等蠱惑事。而陛下以身親之。大臣幾於爲奉承風旨之官。三省幾於爲奉行文書之府。臣恐天下公道自此壅矣。景祐間。罷內降。凡詔令皆由中書樞密院。仁祖之所以主張公道者如此。今進言者猶以事當問出。敕斷爲說。嗚呼。此亦韓絳告仁祖之辭也。朕固不憚自有處分。不如先盡大臣之慮而行之。仁祖之所以諭絳者何說也。奈何復以絳之說啓人主。以奪中書之權。是何心哉。宜靖間。制御筆之令。蔡京坐東廊。專以奉行御筆爲職。其後童貫。梁師成用事。而天地爲之分裂者數世。是可鑒矣。臣願陛下重宰相之權。正中書之體。凡

內批必經由中書樞密院。如先朝故事。則天下幸甚。宗社幸甚。二曰收君子以善直道之脈。臣聞直道在天地間。不可一日頽靡。所以光明而張主之者。君子責也。然扶直道者。君子之責。而主直道者。人君之事。人君而至於沮君子之氣。則直道已矣。夫不直則道不見。君子者直道之倡也。直道一倡於君子。昔人謂之鳳鳴朝陽。以爲清朝賀國朝。君子氣節大振。有魚頭參政。有鶻擊臺諫。有鐵面御史。軍國之事。無一不得言於君子。是以司馬光猶得以強守忠之姦。劉摯猶得以折李憲之橫。范祖禹猶得以罪宋用臣。張震猶得以擊龍大淵。會觀蓋君子之氣伸。則直道始有所附而行也。今陛下之所以爲直道計者。非不至矣。月有供課。是以直道望諫官也。日有輪割。是以直道望廷臣也。有轉對。有請對。有非時召對。是以直道望公卿百執事也。江海納汗。山藪藏疾。天下於此咸服陛下之量。然或謂比年以來。外庭議論於已有所未協。於情有所未忍。者悉以聖意斷之。不惟言及乘輿。上勸節貼。而小小予奪。小小廢置。亦且寢罷不報矣。不惟事關廊廟。上煩調停。而小小抨彈。小小糾劾。亦且宜諱不已矣。甚者意涉區區之貂瑤。論侵預預之姻婭。不恤公議。反出諫臣。此何等狐兒輩。而陛下以身庇之。御史至於來和事之譏臺吏。至於重訖了之報。臣恐天下之直道自此沮矣。康定間。歐陽修以言事出。未幾即召以諫院。至和間。唐介以言事貶。未幾即叙以諫官。仁祖之所以主直道者如此。今進言者猶以臺諫之勢日

横爲疑嗚呼茲非富弼忠於仁祖之意也。弼傾身下士。事以宰相受臺諫風旨。弼之自處何如也。奈何不知弼之意。反啓人君以厭君子之言。是何心哉。元符間。置看詳理訴所。而士大夫得罪者八百餘家。其後鄒浩陳瑾去國。無一人敢爲天下伸一喙者。是可鑒已。臣願陛下壯正人之氣。養公論之鋒。凡以直言去者。悉召之于霜臺。烏府中。如先朝故事。則天下幸甚。宗社幸甚。蓋大道之行天下爲公。周道如砥。其直如矢。自古帝王行道者。無先於此也。臣來自山林。有懷欲吐。陛下悵然疑吾道之迂遠。且慨論乎古今功化之淺深。證効之遲速。而若有大不滿於今日者。臣則以爲非行道之罪也。公道不在中書。直道不在臺諫。是以陛下行道用力處。雖勞而未逮。食道之報耳。果使中書得以公道總政要。臺諫得以直道糾官邪。即陛下雖端冕凝旒於穆清之上。所謂功化證効。可以立見。何至積三十餘年之工力。而志勳道遠。渺焉未有際邪。臣始以不息二字爲陛下勉終以公道直道爲陛下獻。陛下萬機之暇。儻於是而加三思。則躋帝王軼漢唐。由此其階也。己臣賦性疎愚。不識忌諱。握筆至此。不自知其言之過於激。亦不自知其言之過於泛。冒犯天威。罪在不赦。惟陛下留神。臣謹對。

滔々たる萬餘言。長江の下流を決するか如く。一瀉千里の勢。固より稿を爲すに違わらず。筆を呵し墨を叱し。一揮して成る。天祥時に年二十一。此の時理宗位に在ること

既に久しく政理浸怠る。故に天祥天の不息に法るを以て對をなす。有司之を第五に實く。理宗親しく天祥の對策を覽て。擢て第一となし。軒に臨ひて名を唱へらる。蓋五月二十四日なり。考官王應麟奏して曰く。是の卷古誼龜鑑の若く。忠肝鐵石の如し。臣敢へて人を得るか爲めに賀すと。齡二十一。而して穆陵の廷對。僅々八時間を以つて。天道を論し。人事を論し。政を論し。勢を論す。筆鋒鍊峻。誰れか克く之に當る者乎。全文を淨寫するすら。業已に八時間以上を費すへきに。隨つて案し。隨つて筆し。此の大議論をなす。燃犀の眼識。凌雲の才氣。あるにあらすんば。奚ぞ克く此の如きを得じ。方今青年。年二十を超ゆれば。大抵大學に入り。法律に經濟に。文學に哲學に。理學に。工學に。各將來の碩學を以て。自ら任せむとする者の如し。而かも昔みに。各其の學ぶ所に由つて。其の臆する所を陳せしめ。果して克く。此の如く。巍々堂々。此の如く。精確明快。此の如く。炳々赫々。此の如く。摯實剴切なるを得るか。一小論文すら。之を辨するに於て。曠日彌久。徒らに役々自ら勞するの徒輩。天祥の對策を讀まば。必ず應さに愧殺すへし。大學を以て。國家人材の府なりとせば。方今の所謂人材なる者。亦た一喙に値せし。嗚呼。擾々たる斗背の輩。一に何を多き。而かも。千羊の皮は。一狐の腋に如かず。百千の群小才之を陶し。之を汰するに。あらずこは。一の天祥たる者。亦た舉に見るな

きのみ、慨すへきかな。

丙辰の狀元天祥業已に及第し、穆摺の親摺を忝うし、舊例により三魁名を唱へられ、罷ひて袍笏を賜はる、恩を謝す、恭謝の詩あり、曰く、

於皇天子自乘龍、三十三年此道中、悠遠自參天地化、昇平奚羨帝王功、但堅聖志持常久、須使生民見泰通、第一臚傳新渥重、報恩惟有屬清忠。

幕に入る、御饌を賜ふ、謝恩の詩を進め出づ、席帽を闕門外に賜ひ、馬に上はせて迎て期集所に入る、所又狀元局と名く、官錢物を給し、供張皂隸等凡てこゝに聚る、舊例によれば、此より聞喜の宴を賜ひ、謝宴の詩を進め、此の如くする一月、然る後榜下の士を率て、闕門に詣り恩を謝す、之を門謝と謂ふ、門謝の後之に初階内狀元を命し、承事郎簽書某軍節度判官廳公事を授け、後一科か進士の榜を放するに至て、則ち前一科の狀元、召し入れて秘書省正字となす、名けて對花召と曰ふ、之れ舊例の概略なり、五月二十四日を以て、親摺第一の榮を承けたる天祥は、かくて方さに期集所に在り、而して父此の時暑を病み、客邸に昏倒す、涼劑を投して僅に甦る、乃ち一靜室に徙し、便を規して攝理す、第を賜へるの後、天祥寓館に歸り、父の疾を省し、時を移して期集所に之く、明二十五日、父疾又侵する、と聞き、朝に告げ、命を俟たすして亟に去り、退て

湯藥に侍る、而して割下り、暇三日を給はる、時に父病ひと雖ども、神色改らず、脈を視る者聚て變候を伺ひ、僉な曰ふ、虞なしと、二十八日、病忽ち革まる、藥を進むれども、獨けて服せず、曰く、度るに吾此の疾に起つこと能はさらむ、汝兄弟、それ之を勉めよと、天祥弟壁と、震怖號慟し、椎心禱呼す、凡て益なく、夜に入り、父竟に寂然として逝く、明朝に聞す、朝官吏に命し、來て喪事を治せしめ、榜下の士、費して道路の費を送くる、費粗給す、六月朔、天祥弟壁と服を持し、柩を扶護して、國門を出て、還里の程に上る、七月先廬に返り、九月葬る、天祥喪を服して、吉州に在ること一年、寶祐戊午六年、此の時相丞丁大全方さに事を、用ゆ、或ひと天祥に書を通するを勸む、天祥曰ふ、仕是の如く、夫れ汲々せむやと、郡候爲めに朝に言ふて、初官に除せしめむと欲す、天祥力め辭謝して止む、而して服未だ除せず、

此の歳の九月元の憲宗親大軍を率ひて巴蜀を平け、勢に乗し江に順ふて東に下り、一軍は潭州に至り、一軍は鄂州を圍む、而して臨安の朝廷に於ては、丁大全を罷め、吳潛を左相となし、賈似道を右相となす、既にして元軍利あらず、潭の圍先解く、似道漢

湯に駐り鄂の援をなす、

第四 議論と正義

開慶己未元年天祥服除す五月二十八日旨あり簽書事海軍節度判官廳公事に除せられ承事郎を授けらる天祥未だ進士門謝の禮を畢へざるを以て官を受けず九月京に入て門謝表を上る

臣某言伏準省劄五月二十八日三省同奉聖旨文天祥添差簽書事海軍節度判官廳公事仍舊務臣以賜第之初未經門謝未敢祇拜劄命甲乞指揮續準省札七月十一日三省同奉聖旨令朝謝訖之任臣謹遵奉旨揮詣闕庭朝謝者御大廷而發策式廣旁招奉清問以摠忠諫承親擢尙阻紫宸之謝違叨黃紙之除曠世遭逢瞻天感激臣切以竇與下詔同天地宗祀之彝科舉取人代造化爵賢之柄豈曰利人才之進取其間實天道之流行肆萬乘之臨軒受諸侯之貢士占小善者率以錄成造在廷取一人焉拔其尤必有名世豈應庸預可在蒐羅臣稟質凡庸道猶淺才非洛陽之年少偶玷薦書學非廣川之大儒遽應舉首自叨異數亦既三年回思臚唱之蒙恩莫與鳧趨而奉表有懷就日無路賤天方待德於丘園乃寵綏其祿秩輒請展爲臣之禮幸許修詣闕之恭茲蓋伏遇

皇帝陛下德體乾行道符常久世更三紀遠追成周式化之風歲啓後庚近接藝祖開基之運凡際風雲之會咸依日月之光遂令一介之姓名亦被九重之記錄臣敢不誓堅素守勉企前修自揆讀書非爲平生溫飽之計願言竭節用副上心忠孝之期臣無任瞻天望聖激切屏營之至謹奉表陳謝以聞

此の時元主憲宗は既に去七月を以て軍中に殞し弟忽必烈喪を發せず鄂州を攻むること益急なり城兵死傷する者一萬三千人似道方さに鄂に赴いて師を督す大に懼れ亦戦ふの意なし内都知董宋臣因りて遷幸の議を主張す左相吳潛固く執て不可となし議漸く止むを得而かも京師爲めに洵々求言の詔こゝに煥發せらる天祥方に門謝を訖へ即ち詔を奉し上疏して董宋臣を斬り以て宗廟の神靈に謝し以て中外の怨怒を解かむことを乞ひ且數事を條陳す其の概略に曰く

十一月吉日勅賜進士及弟臣文天祥昧死百拜謹奉詔獻書于皇帝陛下臣甫及赴闕庭兩讀繪音爲之哽咽下泣君臣之義與天地並立况臣蒙被厚恩非衆人比使於此時混々默々上負陛下内負帝裏尙何以飲食於葢履間哉是用不避斧鉞輒奮愚衷條其說以獻惟陛下裁幸一曰簡文法以立事二曰做方鎮以建守三曰就團結以抽兵四曰破資格以用人

董○宋○臣○以○謝○宗○廟○神○靈○以○解○中○外○怨○怒○以○明○陛○下○悔○悟○之○實○則○中○書○之○政○必○所○有○機○而○不○得○行○賢○者○之○車○必○有○所○忌○而○不○敢○至○都○人○之○異○議○何○從○而○消○敵○人○之○心○膽○何○從○而○破○將○士○忠○義○之○氣○何○自○激○昂○軍○民○感○泣○之○淚○何○自○奮○發○禍○難○之○來○未○有○卒○平○之○日○也○千○金○之○家○得○一○僮○奴○稍○足○以○稱○其○私○雖○害○于○而○家○未○忍○亟○去○况○其○人○給○事○之○歲○月○已○深○乞○憐○之○懇○款○已○熟○陛○下○性○資○仁○厚○豈○亦○忌○違○甘○心○焉○然○宗○社○之○事○重○左○右○之○恩○輕○蓋○民○誤○國○之○罪○深○承○顏○順○色○之○愛○淺○伏○惟○陛○下○以○宗○廟○社○稷○之○故○割○去○私○愛○勉○從○公○議○下○臣○此○章○付○之○有○司○暴○其○罪○惡○明○正○典○刑○傳○首○三○軍○以○徇○如○此○而○天○下○不○震○動○人○心○不○喜○悅○將○士○不○感○激○而○思○奮○虜○寇○不○駭○愕○而○謀○還○是○人○心○天○理○可○磨○滅○也○是○天○經○地○義○可○漸○盡○也○臣○所○不○信○神○臣○非○不○知○疎○遠○之○人○指○陳○無○狀○于○犯○天○誅○罪○在○不○赦○且○使○幸○赦○之○不○誅○則○右○左○之○人○仇○疾○臣○言○亦○將○不○免○然○臣○所○以○不○顧○危○亡○寧○以○身○犯○不○測○之○鋒○者○義○命○之○際○臣○固○擇○之○精○矣○方○今○社○稷○震○動○君○父○驚○虞○此○所○謂○危○急○存○亡○之○秋○臣○委○質○爲○臣○與○國○同○休○戚○親○見○外○患○如○火○燎○原○而○內○寇○又○復○植○根○固○流○波○漫○則○禍○難○無○涯○臣○死○正○自○無○日○與○怵○迫○於○權○勢○之○威○憂○疑○於○一○己○之○禍○噤○口○結○舌○以○坐○待○國○家○之○難○而○後○死○孰○若○犯○死○一○言○感○悟○天○聽○如○陛○下○以○爲○狂○妄○而○誅○之○臣○固○已○自○分○一○死○萬○一○陛○下○察○臣○之○忠○行○臣○之○言○以○幸○宗○社○則○臣○與○國○家○同○享○其○休○榮○等○死○之○中○又○有○生○路○此○臣○所○以○奮○沓○涕○洟○望○闕○懇○悃○而○不○能○自○已○也○臣○冒○瀆○天○威○殞

越震懼謹席謫私室以俟威命之下臣無任瞻天望聖激切屏營之至不備臣某昧死再拜上

辭旨剴切論する所幾萬餘言書奏報せられず時に年二十四天祥乃ち自ら免して里に還る而して鄂に在るの右相賈似道使を元の營に遣はし臣と稱して幣を納めむことを請ふ忽必烈時に燕に在るの弟阿里不哥王尊號を襲はむとすとの報を得乃ち似道に和を許し且歲幣の數を約し遂に寨を拔て去り明年三月忽必烈位に開平に即く嗚呼元を擊するの第一機を逸し畢れり故に天祥後年燕獄に於て編輯せる集杜詩開卷第一に掲げて曰く

社稷第一

三百年宗廟社稷爲買似道一人所破壞哀哉

嗚呼三百年宋の宗廟社稷は而に賈似道一人の爲めに破壊せられ畢れり此の歲即ち景定庚申元年忽必烈か留め去りたる元の偏帥張傑は湖南の兀良哈ダか兵と鄂州に會して北に還る業已に和を忽必烈に請ひ臣と稱したる彼賈似道は將を遣はして元師の後軍を擊破し一方に於て元に對する信義を破ふり而して一方に於て君聽を蔽ひ其の和を議し臣と稱し納幣を約するの事を匿し却て上表して曰ふ鄂

の圍始て解け、江面肅清となる。宗社危うして而して復安し、實に萬世強りなきの休なりと、帝似道を以て再造の功ありと爲し、詔して褒美し、賞賚甚厚し、嗚呼、元の内訌に乗して、萬里懸絶の軍を、一撃の下に摧破するの勇も、斷もなく、業已に和を議し、臣と稱して、亦た其の約を破ふり、而して元軍の北に還るを幸とし、江面の肅清を上表し、以て君聽を塞蔽す、翔に臣と稱し、歳幣を約するの國辱たるのみならず、其の約を破ふり、信を失ふは、固より國際の徳義を棄る者、嗚呼、宋三百年の宗廟社稷は、買似道一人の爲めに破壊せられ、畢れり。

此の歳の二月、天祥簽書鎮南節度判官廳公事に除せらる、而かも彼拜せず、請ふて、宮觀の香火を奉し、以て分に安せむと欲し、祠祿を乞ふ、乃ち旨あり、主管建昌軍仙都觀に差せらる、此の時や、元軍業已に和を講して北に還り、破其の内訌の鎮定に是れ噫わらず、幸ふして宋其の來侵を受けさること、爾來六七年、而かも此の間に於て、元の基礎は却て鞏固にせられ、一出亦内顧の患なきに至れり、元軍の北還を以て、自己の功となし、得々として朝庭に重きとなす、彼右相賈似道は、倫安姑息、亦た國家の大計を講するをなさず、天祥をして當時似道か和を議し、臣と稱するの事實を知らしめ、は、彼亦再び上書して、似道を斬らむことを乞ひたるや、必せり、惜ひへし。

明年即ち景定辛酉二年十月、天祥秘書正字に除せらる、詰詞あり曰く、

倫魁登瀛、故事也、然始進、大率以虛名、既久、乃知其實踐、爾則異於是、初以遠士、奉董生之對、繼以畢官、上梅福之書、天下誦其言、高其風、知爾素志不在温飽、麟臺之召、其來何遲、語有云、居大名、難又云、保晚節、難爾其厚、養而蕃發之、使輿論翕然曰、朕所親擢、敢言之士、可劉克莊行。

天祥乃ち辭免新除秘書省正字狀を申す、曰く、

具位文天祥照會、十月二十六日、伏準省劄、十月三日、三省同奉聖旨、文天祥除秘書省正字者、某猥以疎賤、叨被聖恩、望闕瞻天、莫知所措、伏念、某自叨親擢、未歷外庸、以讀書學從政之方、以奉祠爲書考之日、方竊山林之暇、敢圖臺省之登、負乘非宜、循牆無任、伏望公朝、特賜敷奏、令某滿足宮觀、兩考日、祇被新命、其於出處得宜、庶幾無負聖明、拔擢之意、所有省劄、未敢祇受、除寄本州軍資庫、外須至申聞者、

十二月旨あり、允されず、仍て明年景定壬戌三年、再ひ申狀して曰く、

具位文某照會、於去年十月二十六日、伏準省劄、十月三日、省同奉聖旨、文某除秘書省正字者、某伏念、一介庸賤、叨竊非宜、加以從任以來、未有庸歷、輒具狀申控、乞候宮觀兩考滿日、祇被新命、十二月二十九日、伏準省劄、十二月九日、三省同奉聖旨、不允、某除已

望闕謝恩、擇日前來供職、外須至申聞者。

旨あり秘書省官を以て、瓊林の宴を賜ふ、天祥御作に和して詩を奉る、

奉詔新彈入仕冠、重來軒陛望天顏、雲呈五色符、旗蓋立千官、雜珮環燕席、巧隨牛女節、驚章光映壁、奎間獻詩陳雅恩、臣事況見、庶歌氣象還。

四月天祥正字職に供せられ、尋て景獻府教授を兼ね、五月殿試考官に充たされ、校書郎に進めらる、誥詞あり曰く、

新進士唱第前舉首必召、故事也、爾以涉帖之故、稍登瀛之擢、一旦來歸、如麟遊秦、鳴鳳集阿閣、甫繙黃本、俄映青藜、在他人爲遠、在爾爲晚矣、人之不可及者、年也不磨者、名也、至哉、天下樂者、書也、朕將老汝之才、而極其用焉。

天祥恭しく詩を進む、

於皇藝祖、德乘乾聖、主宣光奕、葉前運再、庚申、皇建極、祝同癸亥、數參天、中嚴外、辨三千、禮累洽、重熙四十年、願贊帝心、長對越、至忱、功用貫埃壤。

明年景定癸亥四年正月、天祥著作郎に除せらる、天祥御書の韻に和す、

墨灑天奎、映籀紅、斯堂殿閣、與俱隆、方壺圓嶠、神仙宅、溫洛榮河、造化工、列聖文章、千載重諸孫、聲氣一時同、著庭更有邦人筆、稽首承休學、二忠。

著作の庭、蓋胡呂簡周文忠二公の書あり、結句故に此に及ふ、

是より先き、忽必烈既に立ち、使を宋に遣はし、兵を息め好を講せむとす、郝經修好使に充てられ、南行す、賈似道彼れ臣と稱し和を請ひ、而して其の約を破れるの姦謀、こゝに呈露せむことを懼れ、事に托して、經を真州に拘留す、而して元の使者至るとの報は、雖なく帝聽に入れり、帝宰執に謂て曰く、北朝の使來らば、事体當に議すへしと、賈似道百計帝聽を蔽塞せむと圖り、奏すらく、和は彼か謀に出つ、豈に一切輕しく徇ふへけむや、倘し隣國に交るの道を以て來らば、當さに入り見へしむへしと、此の時朝廷は、獨り賈似道の跳梁する所となり、直道清議の士皆貶せられ、以て景定の四年に至り、二月元更に王德素を正使とし、劉公諒を副とし、書を致し、來て前の修好使郝經を稽留するの故を詰問せしむ、賈似道國家を誤るの姦謀、是に至て破綻す、天祥故に其の集杜詩に於て後來書して曰く、

誤國權臣第三

似道夷邦之政、不一而足、其禍、虜使開邊、覺、則兵連禍結、之始也、良哉、

堂々たる春秋の筆法、寸鐵直に姦猾の心膽を貫く、似道は國を誤り畢れり、而して此の月天祥權刑部郎官を兼ね、刑部は事尤も繁重の府なり、天祥の任や重し、特に官に

居る者率に公平ならず吏私曲を逞す清流者の尤も屑とせざる所なり天祥其の間に居り嚴正以て持し慎重以て斷し鈞考し裁決し晝夜精を覃し力を罄して倦まず吏欺く能はず秋霜烈日皆な懷服せざるなし七月董宋臣再ひ出て、都知となる天祥復上疏して其の惡を極論す上書に曰く、

七月吉日具位臣文天祥謹昧死百拜獻書于皇帝陛下。臣試畝末學天賦樸忠遭逢聖明早承親擢已未之夏陛下廷策多士記憶微臣俾佐京兆尹幕時臣不敢拜恩乞行進士門謝旨令赴闕。其冬實來行禮適值寇難方殷江上勝負未決而全永衡且破于時京師之勢危如綴旒上下皇皇傳誦遷幸臣得之日雖忱恐六師以一朝而動宗社之事關係不細采之公論則謂寇禍起於僉壬之聚斂而僉壬用事則主於董宋臣至於遷幸一事宋臣張皇處分尤駭觀聽事勢至此死且無日臣忠憤激發叩關上疏乞以宋臣尸諸市曹以謝生靈荼毒之苦指陳觸忤自分誅斥出關待罪不報。亟歸山林側聽聖裁臣章雖不付出施行而竟亦不坐臣以罪非惟免於罪而已改命洪幕從欲與禍又寵綏之臣嘗以爲區區父母之身既委而殉國矣陛下赦而不誅臣之再有此身是陛下賜之也感激奮發常恨未有一日答天地之造。前多誤辱收召早以館職會未幾時進之以著庭寵之以郎省臣之取數於明時者蓋以過多其惟聖德日新朝無闕事臣得從事鉛

栗悉意科條以無忘靖其爾位之訓忱幸忱荷。茲者倭讀報狀宋臣復授內省職事臣驚歎累日不遑事處繼傳御批洵罕兼職且使之主管景獻太子府臣備員講授實惟斯邸此人者乃爲之提綱當其覆出臣自授以義且無面目以立朝況可與之聯事乎請命以去臣之分也然臣端居深念託故而去謂之潔身可也陛下未嘗拒言者言而當於可陛下未嘗不行臣不言而去則於事陛下之道爲有未盡是用不敢愛於言伏惟陛下鑒臣之衷而幸聽焉。臣伏讀國史竊見孝宗皇帝所以待賢御者終始之際恩威甚明臣嘗以爲自古人主寬仁莫如孝宗英斷亦莫如孝宗方會觀龍大淵輩用事周必大言之屢茂良言之劉度言之鄭鑑哀樞言之言者日以盛而孝宗假以恩寵未曾爲之少衰孝宗豈嗜諫者哉聖心寬仁未恣驩有所加也。比其招權弄勢日益翕赫小心謹畏之態昵昵於前者迄不能掩其陰私傾險之迹或以見踈死或以坐罪廢英斷如此豈以寬仁而遂失之姑息哉。開國承家小人勿用聖子神孫一守是法。其惟皇帝陛下以聰明操制萬幾以神武經緯六合四十年間凡經幾大禍亂幾大驚危易轍改絃重新整頓功業逐日以新聲名隨風而流尙論聖德三代以下之英主未能或之先也神明之下侍御僕從罔匪正人且夕承弼厥辟固其所也。惟是宋臣兇驚慘毒不可嚮避陛下蓋以其小有才而假借之小人不足大受倚恃權勢無所不至戊午己未間天下不指自其欲甘心臣胃死先

爲陛下言之。陛下於此時猶有徘徊顧惜之意。未即加罪也。而縉紳學校。交疏其惡。伏闕投匭。殆無虛日。陛下始豁然大悟。奪其大阿。屏置畿郡。中外鼓舞。歌誦盛德。臣妄謂陛下之寬仁。全似孝宗。陛下之英斷。亦全似孝宗。漢家自有制度。固應如是。詩云。維其有之。是以似之。雖然。陛下置天地冲和之全氣。接帝王忠厚之上傳。寬仁英斷。雖並行而不相悖。二者分數。寬仁較多。是以如此人者。遂得以生全於覆載之內。尋醫之旨。未幾。朝請之命。復下。今者又使之內居要地。日觀宸光。惟至聖爲能寬裕有容。有如此者。然臣嘗聞之。惟仁者能好人。能惡人。蓋仁則無私。無私故能好能惡。聖人豈專以博愛爲仁哉。漢唐宦官之禍。其後至於濫觴而不可救。推原其初。則起於時君一念之不忍。是故古人之防微杜漸。不敢忽也。語曰。往者不可諫。來者猶可追。宋臣前此誤國之罪。陛下既赦之。而勿問矣。臣何敢追尤往事。上瀆聖聰。獨爲方來計。則葵藿之憂。不能忘情焉。夫以陛下聖明在上。孤雛腐鼠。亦何敢晝舞夜號。少作喘息。其人心性殘忍。群不肖所宗。竊恐復用之後。勢欲肆張。植根既深。傳種益廣。末流之禍。莫知所屆。近者陛下親製十四規。丕哉聖謨。爲萬世計。甚悉。有如此事。獨可以爲小故。無與於貽謀而涸路之哉。宋臣之爲人。臣實疎遠。亦安能以盡知之。惟是天下之惡名。萃諸其身。京國閭巷。無小無大。輒以董閻羅呼之。陛下之左右。使令亦衆矣。此名不歸之他人。而惟此一人是歸。則豈不召而自至也哉。陛下無以其退然謹愿。而謂其未必怙威生事也。毋以其甘言卑詞。而謂人言爲已甚也。千金之家。強奴悍僕。恣橫閭里。至其服役於主人之前。固亦未嘗不小廉曲謹而可信也。此事雖小。可以喻大。陛下儆察及此。則亦何愛於此一人。而獨惜英斷。以重遠天下之心哉。伏望陛下稍抑聖情。備從公議。縱未忍論其平生之惡。以寘之罪。亦宜收回成命。別選純謹者而改畀之。失一兵。得一兵。於國家事。夫亦何損。於以厭人心之公子。以示來世之法。子以防天下之禍於未然。令聞令望。施於無疆。臣子之願。莫大於此。臣實何人。輒上封章。以仰及於萬乘之所親信。蚍蜉撼木。自速齏粉。可謂愚甚。然臣方備位中朝。使其以厚祿糊口。坐取遷擢。豈不得計。而臣子所以事君正義。謂何世道升降之大。幾國家利害之大。故奈何坐而視之。噤不發一語。上負天子。下負所學。貽無窮羞。此臣所以不敢強顏。以留。亦不敢詭辭。以去。忘其櫻鱗不測之危。以冀陛下萬一聽而信之。臣言得行。宗社之利也。臣之榮也。如臣之積忱。未足以仰動天聽。坐受斧鉞。九隕無悔。謹杜門席藁。以聽威命。之下。臣無任望闕瞻天。激切屏營之至。不備。臣昧死百拜。

書奏報せられず。時に年二十八。天祥直に東擔して去り。將に關を出ひとす。相府人を遣はし。天祥を留めて謂はしめて云ふ。天祥差るへからすと。乃ち出て、瑠州に知たらしむ。是に於て天祥甫めて牧民の官となる。

題陳國秀小園
 長鶴展輕扇、遠樓松桂林、故宇入清夢、盤盤亦苦心、中林風月、餘十畝、團幽陰、林下有奇士、繞樹從之吟。

文 天 祥

贈閻丘相士

急流勇退識真隱、昔有麻衣接地爐、我亦愛君雲水趣、莫言雷雨起江湖、言余過水則發故云。

贈鑑湖相士

瘦竹凌風弄碧漪、山光雲影共熹微、月黃昏裏疎枝外、認取半天孤鶴飛。

贈金稱

我有一叢籬、下花黃金滿、眼無人拾、夜看璇璣度、玉衡猿啼、雨外青山濕。

題羅雪崖樵青

蕭々山下人、閉門衣裘單、春心動溪谷、曉起捫松看。

閑居和雪屋道士

孤、柳、聊、共、此、時、心、文、字、追、隨、落、醉、吟、仙、子、樓、臺、修、竹、外、行、人、冠、蓋、書、橋、陰、一、年、芳、草、東、風。

老、五、月、空、江、夜、雨、深、且、作、關、亭、歡、喜、集、更、論、誰、後、又、誰、今、

遊青原

空、庭、橫、蟬、蟬、斷、碣、偃、龍、蛇、活、火、參、禪、竈、真、泉、透、佛、茶、晚、鐘、何、處、雨、春、水、滿、城、花、夜、影、燈、前、客、江、西、七、祖、家、

第五 牧民の治蹟

臨安の朝廷は今や權臣の跋扈する所となり、一の清議骨鯁の士を容れず、或は貶せられて死し、或は責せられて亡す、天祥固より直言不諱の徒なり、彼の一の董宋臣すら共に朝に齒するを願はず、東擔して都門を出てひとし、端なく瑞州に知たるの命を承け、乃ち已むを得ず、牧民の官として、同じ景定四年の十一月を以て、瑞州の任に赴けり、瑞州は故里吉州を隔ること遠からず、齊しく鄱陽湖以南の地たるを以て、十二月天祥親を迎へてこゝに奉養し、菽水の歡を効せり、然れども瑞州當時、恰も兵火の後を受け、瘡痍未だ復せず、理務亦た太だ艱し、天祥銳意治を勵み、撫するに寬惠を以てし、鎮するに廉靜を以てし、施設頗る勤む、兵亂の後

郡兵素より騷擾而て民皆疲弊す天祥確乎として持し斷乎として裁し其の榮耀なる者を取て之を法に實き亦假借することなく以て綱紀を張布す上下肅然として四民其の堵に安す冗費を節理し經費に外に緡錢數萬を積み便民庫を創つ是に於て瑞州の郡政一朝にして振興し亦舊觀なし遺愛民に在り民皆天祥の至治を仰く景定甲子五年元は至元と改元し燕京を以て都となす而して同年十月理宗皇帝昇遐し給ふ此の時賈似道方に柄を乘る理宗晩年漸く其の專横を察し屢似道と相容ざるの跡ありと雖ども未だ更變するの英斷に及ばずして崩せり惜むべし同月天祥召されて行在に赴き尋て禮部郎官に除せられ十一月江西提刑に除せらる天祥辭免すれども允されず

明年乙丑は度宗咸淳元年なり賈似道舊に仍て政を専らにし平章軍國重事魏國公に進み相を立て以て自ら副す臨安府の士人上書して似道を彈劾す似道怒り罪して之を遠州に竄す而して元の朝廷に於ては安童新に右相となり伯顔左丞相となり經國の基王業の本既に定まる

此の歲二月天祥江西提刑を以て瑞州に就き提刑の職事を交割す時方さに先帝崩御の後大赦あり天祥廣徳の意を推し全宥多きに居る而かも平寇の一事あり稍以

て天祥の風采を振ふに足る天祥明斷果決任を伸へ冤を白らし罪狀を案し刑罰を執る私なく偏なく民其公裁に服せざるなし四月刑部吉州恭和縣に至る天祥伯祖母梁夫人歿す蓋天祥か父の本生母なり解官を申し未だ制を得るに阻むらすして即日官を解く臺臣黃萬石もどより天祥を忌み憚る乃ち不職を以て天祥を論し罷めしむ是歲天祥郷里の文山を開き佗日曲樓の地と定む天祥蓋此の時既に嘉應の志ありしなり嗚呼廟堂は凡て權臣の壟斷する所となる苟くも一片の清操を持する者誰れか此際に於て軒冕を泥土視し黃冠道服以て自ら高うするを期せざらんや天祥か此の志ある亦已むを得ざるもの

明年丙寅咸淳二年天祥服中なり曾夫人長男道生を生む此の時に當て賈似道第を西湖の葛嶺に建て遠自ら娛樂を恣にし五日に一ひ湖船に乗て入朝し復堂に赴き事を治せず機務滯滞關白するなく又敢て行はれず一時の正人端士袂を聯ねて影を廟堂に留めす吏は争て賂を納れ美職を求め貢獻俗をなし貪風大に肆なり兵外に喪ふも匿して以聞せず民下に怨むも下情通するに由なく刑罰濫用せられ誅責無積なり而も敢て言ふ者なし國此の如くにして亡びざるもの古より未だ之れあらざるなり

天祥服未だ除せず、丁卯咸淳三年、次男佛生生る、二月女柳生れ、三月女環生る、而して喪終る、九月天祥尙書左司郎中に除せらる、辭免すれども允さず、十二月闕に赴き職に供はる、詰詞に曰く、

蘇軾有云、仁宗皇帝在位最久、得人最盛、進士高科、類至顯位、我理宗享國、庶幾仁祖、取士之數、却又夥焉、當時裏然之選、今其存者、無不登進、獨爾以陳情之表、讀禮之文、淹恤在外、尙遲擢用、夫風之積不厚、則其負大翼、無力若爾之植立不凡、非特以高科也、而又益培厥栽、則其滋長也、孰禦、尙左高於郎位、其以是起家、方天之休、敬之哉、可、馮夢得、行而して此の時、既に元兵の威、荆門に振ひ、襄樊孤立せり、明年戊辰、襄陽圍を受く、守將呂文煥使を馳せて急を告ぐ、三學の士人、上書して諸道の兵を調し、力を發せて襄陽を救はむと乞へども、報せられず、江萬里、馬廷鸞出でて、相たりと雖ども、朝廷多くは是れ權臣内豎の徒黨、常に之が控制を受けて、百度意の如くなるを得ず、方に是れ、君子道消し、小人道長するの時、此の歲正月、天祥學士院權直兼國史院編修官實錄院檢討官の愛職を命せる、而して同月臺臣黃鑄の議する所となり、奏して天祥居る所の官を免せしむ、同年冬至、天祥亦福建提刑に除せらる、雖ども臺臣陳懋欽の奏する所となり、新命を寢めらる、姦邪讒佞の徒、相資縁し、相聲援して、正を陥れ直を擠す

ること、仇讐も嘗ならず、天祥一日も山林に處するの、安うして清きと思はざるなし、而かも君を思ひ民を憂ふる一片の誠、未だ爾かく亟かに蟬蛻飄舉するを許さるるなり、然れども、朝令暮改紛更又紛更、天祥固より其の煩に耐はせるものありしに相違なし、

故に明年己巳四月、其の知軍國府に除せらるゝや、天祥直に辭免の狀を申す、

具位文某、照會伏準尙書省劄子、四月十七日、三省同奉聖旨、文某差知軍國府、替朱應元缺者、起家超躐、望闕徘徊、伏念某、實無他腸、粗有遠志、昔年憂國、昌當事任之、難數歲杜門、事悔身謀之、拙屬明良之胥慶、念岳牧之疇庸、曾謂栖遲、叨選用、惟是某省愆已至、貶秩新、雖公論至久而愈明、而丹書未謂之無過、儘不量於出處、是自速於顛濟、欲望公朝、特賜敷奏、收回成命、改界叢祠、使某得以讀書養親、安身寡過、逸有驅馳之日、無非報效之年、所有省劄、已寄留吉州軍資庫、未取祇受、須至申聞者、

辭免すれども允されず、十一月任に軍國に赴き、府事を領す、府もと彫弊を極む、天祥始めて至り、條理を爬梳するに、曠然として事なし、軍國の郡たる、上流に居る、斗絶僻塞して、稅務辦を取る所なし、則ち推剝して民害をなす、天祥奏して之を罷めしめ、別に郡計を取て、以て課額を補ふ、民皆歡舞し、天祥去て後、争て錢を隘し、天祥の爲めに

生祠を立つ

明年庚午正月朔、天祥軍器監兼右司に除せらる。辭免すれども允されず、乃ち寧國府を去て京を指す。途、胡姓の飯店に宿す。胡はもとより相知るの家。天祥之れに遇されは、胡乃ち天祥に資助を求む。天祥笑て曰ふ、諸擔の中意に任して其の一を擇取れ。胡一擔を取る、開けは則ち皆扇なり。天祥笑て曰く、是れ遠方の土宜にして、郷里親友の爲めに饒るへき者。汝是を以て何の用をかなさむ。乃ち時値に準して、其の直を以て之を與ふ。蓋、胡天祥の貴を見て、必ず輻重充溢するならむと意ひしに由る。然かも寧國府の財、理着々整頓し、民富惟れ豊なりと雖ども、天祥の行囊は實に此の如く枵然たりしなり。天祥民に臨むの一斑以て察するに餘あらむ。

四月、天祥新除軍器監の職に供はり、兼右司を免せられ、尋て崇政殿說書兼學士院直兼玉牒所檢討官を兼ぬるに至る。時に襄陽圍を受けて業已に三年、江萬里援兵を遣はし、襄を救はむと請ふ。議似道と合はす、乃ち罷め去る。帝因て似道に問て曰く、襄陽圍を受ること三年、之を奈何せむと。似道對て曰く、北兵已に退く、陛下何人の言を得る。上曰く、適女嬪あつて之を言へりと。似道乃ち其女嬪を詰問し、証ふるに佗罪を以てして、之に死を賜ふ。是れより亦敢て邊事を以て言ふ者なく、汲々として方に大

平を粉飾するを以て事となす。天祥今や召されて京に在り、會平章買似道疾に託して紹興に歸り、致仕を乞ふ。旨あり、學士院をして詔を降し、之を允さしむ。似道蓋し君を要するの志ありしなり。天祥時に學士院權直たり、當さに之を制裁するに正義を以てすへきなり。然るに當時學士院は専ら宰相の願使する所となり、内制相承け、皆先づ議を相國に呈し、改竄命維從ふ。是重く王言の体を失する者たり。天祥直道して、枉けず、似道の意に忤ふ。似道別直院を諷して、改め作らしむ。嗚呼、詔を紳するすら尙權臣の左右する所となる。源既に涸る、千載河の清きを俟つ。も、何の期かあらむや。天祥か作れる内制の擬進御筆に曰く、

書曰、三人占則從二人之言、蓋占取其同、自二人之同推之、卿士庶民無往不同者、師相欲去、二府以爲不可去、是千萬人皆以爲不可去矣。朕自師相有請、寢食不爲安、朕必不能違衆心、師相亦必不忍違朕心、嗚呼、尙鑒時忱、永綏在位、師相其聽之哉、所請宜不允。又擬して曰く、

周○公○相○成○王○終○身○未○嘗○歸○國○孟○子○嘗○齊○世○不○合○故○致○爲○臣○蓋○常○情○以○去○就○爲○輕○惟○大○臣○以○安○危○爲○重○苟○利○諸○國○皇○恤○其○身○若○時○元○勳○爲○我○師○相○先○帝○付○託○大○義○所○存○太○母○留○行○前○言○可○覆○胡○爲○以○疾○而○欲○告○休○惟○醫○藥○所○以○補○精○神○惟○安○身○所○以○保○家○國○古○者○之○賜○几○杖○雖○當

七十而不得引年。我朝之重辯章。雖過九旬而尙使爲政。勉。重務。勿。困。恥。懷。所。請。宜。不。允。

似道此の擬遣御筆か先己に呈せられざるを怒り、又其の己を責むるの意あるを憤り、改作進呈して批出せしめ、竟に天祥の所擬を用ひず、天祥即ち先朝揚大年翰林に在り、詔を草し一字其宗の聖意に合せざるを以つて、明且唐の故事、學士文書を作り、改むる所あるは職に稱はずとの例を援いて、自ら罷めむとせるを先例となし、亟に職を解かひことを求む、似道勉め留むと雖ども、天祥亦力めて祠を丐ひ東擔し去り、白鶴飛來奉我衣、東風吹我下漁磯、當年祗爲青山誤、直舛君王一詔歸。

と明吟して都門を出つ、七月天祥秘書監に遷る、似道臺臣張志立をして効して之を罷めしむ、明年辛巳冬至、湖南運判に除せらる、臺達陳堅復奏して新命を寝めしむ、天祥既に數斥けらる、明年因りて錢若水の例を援て致仕す、此の歳元水軍七萬を練り、戰艦五千を造り、環城を築て、以て襄陽に逼る、而して宋の援兵至らず、嗚呼、襄陽一たひ陥らば、荆門守らず、江面一帶直に守を失せむ、天下の事亦なすへからざるなり、而して天祥は乃ち冠を挂けて高踏勇退、將に猿鶴に伴ひ、麋鹿に伍し、白雲と幽石と、以て長に終へむとす、

第六 江山と風月と

文山の春紫にして、錦江の秋白し、山は江に臨み、江は山を遶る、好箇盤桓の地、天祥業己に致仕して吉に還り、明年壬申、乃ち宅を文山に起す、而して襄陽竟に陥る、守將呂文煥、嬰守て、いに六年、而かも似道取て、調授せず、遂に城を以て降り、荆門要害の地、一朝にして、元人の用となる、是に至て、似道章を累ね、出て督せんと請ひ、而して陰に朝庭に諷して、之を留めしめ、遂に行かす、かくて襄陽は業己に陥れり、元若し一舉樊城を陥れ、江に沿ふて、東下せば、破竹の勢、誰か亦た之を防くものぞ、臨安業己に宋の都にあらざるなり、而して天祥この時早く文山に幽棲して、浮丘道人と號す、時年三十

七、日、日、騎馬來山中、歸時、明月長在地、但願山人、一、百、年、一、年、三、百、餘、番、醉。

文山は廬陵の南十里、天祥か家の上游に居る、兩山夾一溪、溪中石林立、水曲折、其間從高注下、姿態橫出、山下石尤奇怪、跨溪綿谷、低昂臥立、各有天趣、山上下流、泉四出、隨意灌注、無所不之、其高處而勢數百里、俯視萬壑、烟芊綿、真廣大之觀也、其南曰南涯、可五里、主人曰、領客其間、窮幽極勝、樂而忘疲、其北

曰北涯以南長潭爲止清遠深絕蓋以時至焉宅基在南涯其地平曠長可百丈餘深可三十丈溪水至其前泓渟演迤山勢如盤礪如拱如趨蓋融結非偶然者宅當其會青山屋上流水屋下誠隱者之居也

是文山の勝概なり其の甫めて文山を開きしは乙丑の歲に在りと雖も其の始めてこゝに倦遊し嘯傲したるは成辰の歲に在り其の文山觀大水記に曰く成辰歲余自禁廬罷歸日往來徜徉其間蓋開山至是兩年餘矣

又同記に於て文山濱江一帶の大概を陳へ曰ふ

自文山門而入道萬松下至天圖書一江橫其前行數百步盡一嶺爲松江亭亭接堤二千尺盡處爲障東橋橋外數十步爲道體堂自堂之右循嶺而登爲銀灣臨江最高處也銀灣之上有亭曰白石青崖曰六月雪有橋曰兩峰之間而止焉天圖書居其西兩峰之間居其東東西相望二三里此文山濱江一直之大概也

天祥この間に箕踞し盤桓し俯焉として軽く舉り悠然として自ら適し清泉に掬み幽石に嗽き佳木に磨し歸雲を觀し殆ひと世と相關せざるものゝ如し天祥文山の樂を陳へて曰く予讀蘭亭記見其感物興懷一欣一成隨時變遷予最愛其說客曰羲之信非曠達者夫

富貴貧賤屈伸得喪皆有足樂蓋于其心而境不與焉欣於今而忘其前欣於後則忘其今前非有餘後非不足是故君子無入而不自得豈以昔而樂今而悲而動心於俯仰之間哉予慨然有間自予得此山予之所欣日新而月異不知其幾矣人生適意耳如今日所遇霄壤間萬物無以易此前之所欣所過者化已不可追紀予意夫後之所欣者至則今之所欣者又忽焉忘之故忽起奮筆乘興而爲之記且詔同游者發一嘆

天祥か自ら意に適するの高趣趣味此の如く其れ津々として把すへきものあり而して其の如何に恬澹なる生涯を送くりたるかは其の自記

予於山水之外別無嗜好衣服飲食但取粗適不求鮮美於財利至輕每有所入隨至隨散不令有餘常歎世人乍有權望即外與獄訟務爲兼并登第之日自矢之天以爲至戒故平生無官府之交無鄉鄰之怨閑居獨坐意常超然雖凝塵滿室若無所睹其天性澹如也

と云ふに觀るも其の一樹を味ふへし天祥はまた更に其の超然高踏の志を陳へて曰く

於官情亦然自以爲起身白屋邂逅早達欲俟四十三歲即請老致仕如錢若水故事使國家無虞明良在上退爲潛夫自求其志不知老之將至矣時之不淑命也何尤山中新

宅

天祥の宿志、而に此の如きありしなり、四十三歳を俟て致任せむと期せし天祥をして、三十七歳にして勇退せしめたるは、抑も誰か然らしむる所ぞ、國家をして虞なく明良をして上に在らしめ、而して己退いて潜夫となり、樵牧に混し、芻蕘に伍せむと期せし天祥、未だ其の期圖の一半をも了する能はずして、憤慨冠を掛けて、強て山水の行樂を藉て、自ら慰むるの已むを得ざるに至りしは、將た誰か之をして然らしめたる、

天祥既に黄冠道服、江山と風月と、長へに文山崖石の一角に老いひどす、江湖の遠に在ては、其の君を思ふ、彼一日も邦家を忘るゝ能はざるなり、業已に此情あり、故に江山も風月も、天祥の眉目に映しては、特に清淑なるなり、幽雅なるなり、嘗みに其の山中に於て、吟咏する所を見よ、

宇寅風烟湖山林日月長、開灘通燕尾、伐石割羊膺、磐谷堪居李、廬山偶姓康、知名總聞事、一醉棹滄浪、

其の他、山中の風咏する所、凡て塵を出て、仙骨を露はす、

關山寄朱約山

一笠一蓑三釣磯、歸來不費買山貨、洞天福地深數里、石壁湍流清四時、樵牧舊溪今可馬、鬼神天巧不容詩、先生曾有崆峒約、那裏江山未是奇、

山中即事

携壺藉草醉斜陽、白鶴飛來月下雙、蘆葉西風驚別浦、芭蕉夜雨隔疎窓、千年帝子朱籬夢、一曲仙人鐵笛腔、若問山翁還瘦否、手持漁竹下寒江、

宿山中用前韻

南山之隩北山陽、羽扇輕風共影雙、書檠菴浦明月笛、青燈蟋蟀白雲窓、半生游子成行債、一夜佳人作別腔、倚釣重來此蓑笠、梅花十里雪空江、

山中

滄州棹影荻花涼、款乃一聲江水長、願有尊風堪斫脍、便無花月亦飛觴、山中世已驚京晉、席上人多賦晚唐、何處魚羹不可飯、蚤拚泉石入膏肓、

山中泛舟觴客

便作乘槎客、蕭々骨髮清、尊前山月過、笛裏水風生、半夜魚龍湧、三秋河漢明、雪堂眠二客、夢與白鷗盟、

山中六言三首 其二

雨○雨○漁○舟○搖○下○雙○雙○紫○燕○飛○回○流○水○白○雲○芳○草○清○風○明○月○蒼○苔○
鶴○外○竹○聲○數○數○座○邊○松○影○疎○疎○夜○靜○不○收○棋○局○日○高○猶○臥○紗○厨○

用蕭敬夫韻

底○院○芭○蕉○碎○綠○陰○高○山○一○曲○寄○瑤○琴○西○風○游○子○萬○山○影○明○月○故○鄉○千○里○心○江○上○斷○鴻○隨○我○
老○天○涯○芳○草○為○誰○深○雪○中○若○作○梅○花○夢○約○莫○孤○山○人○姓○林○

八月十六日見梅

廣○寒○殿○裏○玉○梅○開○那○得○孤○山○處○士○寒○半○夜○西○風○半○身○影○夢○中○騎○得○雪○驢○回○

和蕭秋屋韻

蘆○花○作○雪○照○波○流○黃○葉○聲○中○一○半○秋○明○月○嬋○娟○千○里○夢○扁○舟○汗○漫○五○湖○遊○星○辰○活○動○驚○歌○
笑○風○露○輕○寒○敵○拍○浮○贏得○年○年○清○賞○處○山○河○全○影○入○金○甌○

月夜

月○到○中○天○雲○劃○開○斷○橋○幻○出○玉○樓○臺○夜○深○一○鶴○掠○舟○過○疑○是○坡○仙○亦○壁○來○

江行

日○日○看○山○好○山○山○色○蒼○忘○機○鷗○下○早○懸○厖○鳥○行○忙○松○曉○清○風○濕○荷○秋○流○水○香○短○簑○吹○鐵○
笛○歲○歲○大○江○長○

為劉定伯索油巖

我○欲○登○山○去○采○薇○江○南○秋○雨○正○霏○霏○仙○家○解○有○逸○巡○手○一○筋○西○風○落○翠○微○

生日山中和蕭敬夫韻

山○深○不○用○結○涼○棚○風○起○江○蘋○暑○氣○輕○處○士○林○泉○自○今○古○男○兒○孤○矢○付○豪○英○客○來○不○必○籠○中○
羽○我○愛○無○如○橘○裏○枰○一○任○蒼○松○栽○十○里○他○年○猶○見○茯○苓○生○

所懷

英○英○香○蕙○登○朝○華○收○恰○東○風○作○一○家○燕○語○鶯○啼○春○又○夏○燈○花○剔○盡○暗○牕○斜○

贈南安黃梅峰

清○淺○風○流○聖○得○知○黃○昏○歸○鶴○月○來○時○嶺○頭○更○有○高○寒○處○却○是○江○南○第○一○枝○

和胡琴窓

買○得○青○山○貴○似○金○瘦○筇○上○下○費○沉○吟○花○開○花○落○相○關○意○雲○去○雲○來○自○在○心○夜○雨○一○江○漁○唱○
小○秋○風○兩○袖○客○愁○深○夾○堤○密○與○栽○楊○柳○剩○有○行○人○待○綠○陰○

曉起

遠○寺○鳴○金○鐺○疎○窓○試○寶○熏○秋○聲○江○一○片○曙○影○月○三○分○倦○鶴○行○黃○葉○癡○猿○坐○白○雲○道○人○無○一○
事○抱○膝○看○回○文○

借朱約山韻就賀挂冠

身健尙堪松下飯。眼明正好橘中棋。青山有約當朱戶。白首何心上彩闌。栗里田園供雅興。午橋鐘鼓賞清時。曉來倦客秋江上。坐看半天黃鶴飛。

用前人韻賦招隱

釣魚船上聽吹笛。煨芋爐頭看下棋。賸有晚愁歸別浦。已無春夢到端闌。去年尙憶桃紅處。好景重逢橘綠時。珍重山人招隱意。猿啼鶴嘯白雲飛。

壽朱約山八十三歲

八十餘翁雪滿顛。深衣大帶耳垂肩。礪溪回首今三載。絳縣論心又十年。歸去來兮真富貴。美哉壽也活神仙。門前燕雀紛如雨。媿我白雲深處眠。

亦以て天祥か如何に文山の浮丘道人として詩的山人となり畢りたるかの一斑を窺ふへし其の他天祥か山中にて朗吟せる詩句詩人として之を評するも優に古人に愧ざるもの多し。

醉菊醉餘披草坐。探梅吟罷帶花回。山中再次胡德昭韻

不必清高逼鼻許。祗教瀟灑勝由求。空花自滿三千界。老樹相看五百秋。山中自賦

夕釣江澄練。春行路布棋。山中即事

采芝復采芝。終朝不盈掬。山中感興

昔爲江上潮。今爲山中雲。江上潮有聲。山中雲無情。同上

水霞明畫卷。草樹幼騷詞。山中

桑弧未了男子事。何能局促甘囚山。生日和謝愛山長句

虹光滿袖生瓊瑰。一栢相屬慰岑寂。同上

簾揚且聽箕張口。丈夫壯氣須衝斗。夜闌拂劍碧光寒。握手相期出雲表。同上

朝遊崑崙暮崆峒。颯風鞭霆迎我公。丹崖翠壁千萬丈。與公上上上上上。生日謝朱約山和

來韻

鴈拖秋月洞庭邊。客路淒涼野菊天。送人往湖南

爲我祝融峰上看。朝暎白處禮蓬仙。同上

疎枝不入帽。川書暗香不到東山棋。題張景石潭梅墅并饋入雨

日落未落天蒼涼。懸匡掛壁留餘光。紫烟翠霧空迷茫。颺颺度壑松風長。牛背短笛催歸

忙。和謝愛山晚吟韻

長歌浩浩相激昂。淡雲弄月微昏黃。同上

君今拂衣去。我獨枕書眠。一片過林雨。數聲當戶蟬。別謝愛山

蟾影裏千秋蟾蜍聲中七月圖詩思飄飄入雲漢歌聲隱隱動江湖七月十三夜用盤

睡餘吸海龍身瘦渴裏奔雲馬骨高病中作

形羸心自壯手弱筆仍遒又賦

倦策吟詩杖頻燒讀易香同上

羽扇看棋坐黃冠扶杖行同上

野樹辭秋落溪雲帶雨行同上

酒壺釣具有時樂茶籠筆床隨處安借道冠有賦

古鼎龍團雪虛鑿壁尾春商山奕棋老赤壁洞簫寶病愈簡劉小村

蕭々秋夜涼明月入我戶不遇王子喬此意誰與語夜坐偶成

江山如有意天地可無秋夜月馮驩缺西風王粲樓早起偶成

屏裏江山如出色亭阜松菊已成行細參不語禪三昧靜對無弦琴一張和朱松坡韻

閒雲舒卷無聲書醉石敲推一色棋翰林權直罷歸

一水樓臺影滿山桃李花羅山長存來謝宴山中

五湖圖裏添彭祖南極光中約祝融日日青山醉春色年年黃菊飽西風壽朱約山八十

韻

荆流春浪湧峽樹暮雲飛挽湖守吳西華

八天下鳴鶴半水偃蛟龍挽王遠叔

天馬高風骨秋鷹折羽翰挽太傅朱古平

魏野神仙宅元龍湖海樓西風一揮泪世事蓋棺休同上

鶴髮垂袍葉龍孫上榜花詩書新雨露松柏老烟霞挽張致政

等の詩句皆琅々として金玉の響あり凡て誦するに堪へ吟するに耐ゆ天祥か野鶴

と溪猿とに伍し白雲と幽石とを友とし簡然として羽化登仙し崑崙の頂に遊ひ群

玉の圃を撫するの高風幽趣千載の下尚は長へに拘すへく退すべし春蘭秋菊之と

佩し之を攪る亦塵中の人にあらず一枰の棋一瓠の酒之を圍み之を瀝ひ眞に仙都

の客なり

然而して襄陽は業己に降り元軍は將さに手に唾して樊城を圍まんとす長江一
帶早く宋の有にあらず浙江一團亦宋の畿甸にあらず文山に新宅を經造しつゝあ
る天祥も江上の一たひ變を告ぐるや乃ち匠事を罷めたりかくて文山の山屋は僅
かに廳堂を築き成して止む

咸淳九年癸酉の正月、天祥湖南提刑に除せらる。辭免すれども允されず。是に於て文山に幽棲せる天祥亦官游するの己むを得ざるに至れり。天祥は竟に山を出てたり。謝安山を出てすんは蒼生を奈何せむ。天祥山を出つ蒼生と國家と其れ將何ぞや。かくて天祥は山を出たりと雖ども彼一日も文山を忘るゝ能はざりしなり。彼末年燕に囚せらる文山を思ふ特に切なり。彼乃ち弟壁に書を遺りて曰く、

文山我盤桓地我死幸爲立廟以慰孤死首丘之正吾之願也
 以て天祥が如何に終生文山に結縛たる者ありしかを觀るへし。文山の雲は春夏秋冬岫を出て岫に還る。錦江の水は寒暑裘葛石を嚼み石を陶ふ。天祥の魂長へに此の清泉白石の間を遊る。

天祥は山を出てたり。同し年三月を以て湖南提刑として任に赴き事を領す。滯れるを疏し淹へるを決し、裁斷流るゝか如く湖南の一路忽にして留獄なし。此の時湖南巨寇出沒して民爲に其の害を被ひること多し。天祥連に巨寇を平らけ、道路爲めに肅清。人民皆其の堵に安ひす。而して湖南時に故相江萬里の出で長沙に鎮するあり。天祥今亦來りて湖南に提刑たり。其の夏天祥萬里を長沙に見る。萬里素より天祥の志節を奇とす。從容として國事を語り、忽然として曰く。吾老たり。天時と人事とを

觀るに當に變あるへし。吾人を閱すること多し。世道の責其れ君に在る乎。君其れ之を勉めよと。天祥は夙に萬里を仰き稱して先生となす。萬里蓋し江心と號するもの。所謂江古心先生なるもの便ち是れ。

萬里か樞密たりしときより天祥は蓋し夙に其の訓戒を仰けり。嘗つて書を萬里に呈して曰

其他無能爲役至於守其本心不與流俗爲軒輊以求上不負知己下不負委瑣之所存則或可無愧作於此尙惟先生終數之

と以て天祥と萬里との干繫一斑を概見すへし。而して此の歲十月乙亥萬里齡方さに七十六天祥乃ち古体一首を擬して壽をなす、

炎圖啓丕運皇路熙以平。蜿螭發令姿有美而一人。鴻藻舒朝華大音鏘韶鈞。黼珽麗三階。火龍昭統紘。桓圭殿南服。熊旂被金城。瞻彼鷁爲火翼。軫宜其精神。鸞舞瑤席鳴鳳翔。嫺笙孟冬兆陽氣。西北無浮雲。觀言酌春酒。可以寫我情。揚旂下祝融。繼履朝奉清。嘉猷扇九垓。還以遂古淳。君子保金石。所以永國成。純嘏錫千歲。綿綿贊休明。

未だ幾ならずして萬里鄱陽に家す。而して江上難作り。元軍奄ひ至り。鄱陽陷る。萬里義辱められす。自ら水に沈むて死す。天祥其の集杜詩に書して曰く

江丞相萬里第四十五

先生居饒州廣入城先生投府第中池水死其弟萬頃於廳事上被執殺死哀哉
星折台衡地斯文去矣休湖光與天遠屈注滄江流

と又其の紀年錄に筆して曰く

予○灑○血○攘○袂○顛○沛○驅○馳○卒○以○孤○軍○陷○沒○無○益○於○天○下○追○念○公○言○輒○爲○流○涕○

と天祥は萬里語る所世道の責其れ君に在るかの一書を造次顛沛にも忘却せざる
なり萬里の一言は毎に天祥流涕の種となりしなり

同し年の冬天祥吉州に老親あるを以て奉養に便なる郡に赴かむことを乞ふ尋て
知贛州に除せらる乃ち母を奉して湘を發す發するるとき人衡陽より來る乃ち

傾蓋年華晚行人早發湘白雲虹浪小明月燕花香南浦春何急巴山日正長祝君加一
飯我意爲桐鄉

を賦す明けて甲戌咸淳十年の二月天祥贛に赴むくの道嶺洲里に過ぎる台人の長
沙より來て別をなすあり天祥詩を作て別をなす

君爲湘水燕我作衡陽鴈鴈去燕方留白雲草迷岸

と天祥又西昌を過く母を奉して方さに贛に赴むくの途なり詩あり

重○來○鷓○鴒○開○曉○帆○影○漲○新○晴○倚○檻○雲○來○去○閉○簾○花○送○迎○江○湖○春○汗○漫○歲○月○老○靜○襟○手○把○忘○憂
草○變○饒○饒○太○清○

と三月贛州に赴むき郡治に従事す平易にして務めて民を近づけ民と無事に相安
す十縣の民舉げて威信に服し故ちに官に具し牌位を設け家々に香火を置いて以
て天祥の恩に報す天祥贛に知たりしより親を奉して孝養を醫くす六月祖母劉夫
人の年八十七なるを慶す郡民七十より以上錢酒米帛を興ふること差あり
而して此の歳七月を以て度宗皇帝崩せらる賈似道帝暴を立て徳祐と改元す樊城
は此の時業已に危く湖南江西江浙勢早く變し臨安の朝廷方さに洵々たり

第七 哀痛の詔下る

度宗崩して徳祐の幼帝新に踐祚せられ大皇太后謝氏朝に臨て詔を稱す而して元
の丞相伯顔大に兵を襄樊に會し一軍は淮泗より一軍は舟師を以て襄陽より出て
水陸並進み沙市の新城を攻む元軍不意に出て沙市の兵敗れ鄂州亦降る元軍破竹
の勢を以て猛進して東南に下る

時維咸淳十年の十一月二十一日太皇太后哀痛の詔を發せられ天下に令して勳王

せしむ詔に曰く、

先帝傾崩、嗣君冲幼、吾至哀、盡勉御籙、惟曾日月之幾何、溘淵水之是懼、憤茲醜虜、聞我長江乘隙、抵嶼誘逆、犯順古未有、純是夷虜之世、今何至泯然、天地之經、嗚呼國步之陸危、皆吾德之淺薄、天心仁愛、示以星文、而不悟、地道變盈、誓以水患、而不思、田里有愁嘆之聲、而莫之省、憂介冑有饑寒之色、而莫之撫、慰非不受言也、而玩為文具、非不恤下也、而墜於上聞、靖言思之、出涕滂若三百餘年之德、澤入人也深、百千萬姓之生靈、祈天之祐、亟下哀痛之詔、庶回危急之機、尙賴文經武緯之臣、食君之祿、不避其難、忠肝義膽之士、敵王所慄、以獻其功、有國而後有家、胥保而相胥告、體上天福萃之意、起諸路勤王之師、勉策勳名、不吝爵賞、故茲詔諭、想宜知悉。

明年乙亥の正月、天祥贛州に在り、哀痛の詔下るとの報を得、詔を捧けて涕泣し、乃ち兵を起す、陳繼周をして郡中の豪傑を發し、並に溪洞蠻に結はしめ、方輿をして吉州の兵を召さしむ、諸方の豪傑、皆響の如く、應し、有衆萬人を得たり、更に檄を諸路に移し、兵を聚め糧を積む。

此の時元軍既に襄樊を發し、元の丞相伯顔自ら將として進み、阿里海牙を留めて鄂州を守らしめ、大軍江を渡り、流に順ふて東に下る、沿江の諸城風を望ひて降附す、既

にして江州降り、淮西陥る、事急なり、而かも賈似道軍馬を都督しなから、遷延して未だ出てす、元軍の已に建康に下ると聞て、始めて諸軍を率て臨安の行在を發す、似道業已に發すと雖ども、彼尙選舉一戰するの志なし、故らに道を迂して行き、數日にして始めて蕪湖に達す、二月將に安慶府に趨き、沿江下流の師を牽制せむとす、未だ至らざる三日の前、安慶の帥范文虎、彼襄陽の降將呂文煥の婿なるの故を以て、既に亦元に降る、沿江の諸城復固守するの志なし、似道乃ち官資を陸轉することを諸城將に許し、以て之と結はむとす、師駐つて魯港に在り、諸軍語て曰ふ、官資を彼に要して何をか做す、已未庚申の官資、何にか在ると、已未庚申の官資とは、即ち似道が嘗て忽必烈か襄陽を圍みたる時、諸軍に約したるものを指す、而して似道竟に約を履まざりしなり、故に諸軍亦似道の言を信せざるなり、似道之を聞て、亦答ふ所を知らず、鑼を鳴らすこと一聲、乃ち軍を珠金砂に退く、十三萬の兵衆、一時に潰散して、亦た收拾すべからず、似道奔つて揚州に入る、時方に二月の下浣なり。

是に於て天祥乃ち起つ、右文殿修撰樞密副都に除せられ、旨を江西安撫副使兼知贛州に承け、尋て江西提刑を兼ね、集英殿修撰江西安撫使に進む、四月天祥其の老將王輔佐を以て總統となし、兵を領して吉州に下る、天祥樞密兵部侍郎に除せられ、職任舊

に依る王輔佐尋て没す乃ち廣東統制方輿を以て之に代ふ天祥既に江西安撫使たり而して黃萬石時に江西に制置たり天祥萬石と素より舊嫌あり是に至て萬石天祥か聲望己の右に出つるを忌み朝廷に告ぐるに天祥の軍烏合兒戲益なきを以てす是に於て天祥の入衛は端なく廟堂の一問題となる初め天祥を主として遷擢したるは左相王煥なり又屢天祥の入衛を趣かしたるも王煥なり是に至て王煥右相陳宜中と議合はす嫌を引て去る朝議乃ち天祥の入衛を止め之をして留て隆興府に屯せしむるに決す國京の學生上書して宜中か天祥の事を沮むるを諷ふ而して宜中已に關を出て在らず劉夢炎代つて相たり夢炎素より宜中と厚く又江西制置黃萬石に黨す是に至て夢炎萬石を趣して入衛せしめ竟に天祥を以て移つて隆興に屯し九江を經略せしむ五月天祥祖母劉夫人の憂に丁かり官を解き六月劉夫人を葬ひつて起復す

天祥既に留て隆興に屯するの命を承く而して黃萬石は陰に隆興守將呂師範と通し之をして隆興より屯を退かしめ司を撫州に置き守臣をして天祥所率の義士軍都よりするもの樂安を劫すと聲言せしめ撫州より之を樞密院に申す天祥言ふ事都六姓にして招募せる者數千人皆吉州に駐り旨を候ふて入衛せむとす未だ嘗て一定撫州の境に至るもの有らずと蓋し天祥を忌むの徒陰かに相結托して其の勤王の大計を沮撓せむとするなりかくて天祥は留て吉州に在り未だ命の如く隆興に赴き屯せず時人か爲めに歌ふて曰く
出師自古尙張皇何況長江恣擾攘聞道義旗離漕口已驅北騎走池陽先持十萬來迎敵最好諸軍自畏糧說與無知饒舌者文魁元不是猖狂

と大史氏管發亦世天祥を以て猖狂として之を議するの非を辨し曰ふ天祥所部の兵皆土豪の忠義にして銳氣方に新なり戰闘せしめて勝捷を望むへし之を城郭に閉さすへからずと頻りに天祥を隆興に屯せしむるの非を極言す天祥亦知察院孫麟叟を經て奏し言ふ

江西安撫使文天祥申准省劄令江西副使黃萬星馳入衛文天祥率所部勤王義兵留隆興府事天祥以身許國義不辭難上下東西惟命奔走伏念天祥猥起書生豈諸兵事昨者恭承太皇太后詔書召天下勤王天祥待罪一州忠憤激發不能坐視移檄諸路冀有盟主願率兵以從人心未易作與世事多沮撓北兵日迫血淚橫流伏蒙公朝除天祥右文殿修撰樞密都承旨江西安撫使續准除江西提刑天祥極知該恩過當所當辭免痛心時危無暇爲平時掛遞丞憑使名召號所部惟是帥司無兵無將無官無吏無錢

無米、徒手自奮、立爲司存、今已結約贛州諸豪、凡溪關關悍輕生之徒、悉已糾集、取四月
 初一日、提兵下吉州、會合諸郡民丁、結爲大屯、來赴闕下、忽得留屯隆興指揮、觀聽之間、
 便生疑惑、緣天祥所統、純是百姓、率之勤王、正以忠義感激使行、又有官資在前、爲之勸
 勵、此曹銳氣、方新戰鬪、可望勝捷、若閉之城郭、責以守禦、日月淹久、烏合之衆、不堪安坐、
 必至潰迹、此勤王與留屯、較然利害之不同也、謹瀝忠忱、告鈞慈、特與收回留屯隆興之
 命、容天祥、照原降旨、

と、因りて所部の義兵を揮して、闕下に赴かむとし、衢州に至る時に天祥の軍亢健に
 して、風紀正肅、過くる所秋毫も犯すなし、朝廷の近臣之を見て、大に驚き、こゝに撫州
 守臣等か、漫に事を皇張して、朝庭を誑惑し、天祥勤王の大計を沮撓せむとせるの奸
 計甫めて露はる、是に於て、旨あり、撫州の守臣を責めらる、而して天祥は權工部尙書
 に除せられ、都督府參贊軍事を兼ぬ、職任舊に仍る、時に八月十七日なり、

第八 入衛赴闕

元軍既に鄂州を降し、江州を陥れ、又池州を取り、建康を破る、臨安の都城戒嚴し、朝臣
 雖を接して宵に遁る、是に於て、王掄、陳宜中等、賈似道が不忠の罪を彈劾す、宜中もど

賈か恩を受くるもの、是に至て亟かに賈似道を劾して、以て自ら解く、彼亦國を誤る
 の徒なり、かくて似道は貶せられて漳州に至り、人の爲めに殺さる、嗚呼、此の彈劾を
 して、十年の前に在り、此の貶死をして、又十年の前に在らしめは、天下の事尙は挽回
 すへきものありしならむに、今や業已に晚し、

八月十九日、天祥詔を奉して入衛す、初め天祥將さに入衛せむとす、其の友之を止め
 て曰く、今元軍郊畿に薄る、君新集の兵を以て之に赴ひく、是何を群羊を驅つて、猛虎
 を搏つに異らむやと、遮莫群羊を驅つて、猛虎を搏つか如きも、國事日に急なり、苟く
 も一片の血誠あるもの、誰れか奮鼓するを思はざらむや、天祥答へて曰く、吾豈に之
 を知らざらむや、たゞ國家臣庶を養育すること、三百餘年、一旦急あつて、天下の兵を
 徴さる、一人一騎の關に入る者なきは、吾深く此を恨む、故に自ら力を量らず、敢へて
 身を以て之に殉せむとす、庶くは天下の忠臣義士、將さに風を聞て起つものあらむ、
 義勝つ者は謀立つ、人衆き者は功濟る、此の如くひは、社稷保つへきなりと、乃ち盡く
 家資を以て軍費となし、以て義兵を招募せり、毎に賓佐と語り、語且つ時事に及へば、
 天祥輒はち流涕几を撫し、言つて曰く、人の樂を樂みむものは、人の憂を憂ひ、人の食
 を食むものは、人の事に死すと、是に至つて、江右湖南、淮廣諸項の軍馬を獎率して京

畿に抵る、乃ち新除權工部尙書兼都督府參贊軍事を辭免す、太皇太后詔あり、允さす、曰く、

三省進呈卿狀辭免工書兼督贊事具悉、自吾有敵難、羽檄召天下兵、惟卿首倡忠義、料合熊羆之士、誓不與虜俱生、文而有武、儒而知兵、精忠勁節、貫日月、質神明、惟寵嘉之、投袂纓冠、提兵入衛、師律嚴肅、勝氣先見、宗社生靈、特以爲安、繇少常伯進長冬卿、未足以酬賢勞、相臣督師於外、命卿參佐庶幾、集允文采石之功、夫移孝爲忠、以國爲家、古有明訓、矧危急之秋、其往求朕、攸濟理、考親擢魁彥、以貽孫謀、意其在此、又何遜乎、故茲詔示、想宜知悉、

天祥既に臨安に抵る、而かも朝論宜中未た在らざるを以て嫌となし、天祥をして兵を西湖に駐めしむるに決し、二十六日内批あり、天祥の工部尙書兼督贊は舊に依り、更に浙西江東制置使兼江西安撫大使知平江府事に除せらる、辭免すれども皆允さず、二十八日勅あり曰く、

三省進呈卿狀辭免權工部尙書江東制置使兼知平江府恩命事具悉、朕未堪多難、疆圉孔棘、御車罔不曰艱、大夫誌我成功、所惟時魁儒秉忠、倡義獎率、三軍入衛、社稷國勢爲之增重、人心特以爲安、精神折衝、文武是憲、若稽商廟、命臣願浩、開制闔于江浙、宏濟

中興之業、善定枚功、卿器度才猷、克遇前哲、惟長江之險、要未復、畿甸之備、守當嚴、命卿以大常伯兼領二使、表裏捍拓、以固吾圉、東西運掉、以清虜氛、儒帥一臨、士勇百倍、用保父我文祖、受命民茲、惟豐邑貽謀之意、亟其禱牙紆服、宵旰之憂、所辭宜不允、

九月初七日、又勅會文あり曰く、尙書獎率義兵入衛、王空忠忱、義概深可嘉、尙除已頒三路制帥之命、仍兼督府參贊知平江府、今已日久、秋風浸致、事不可緩、合行催促、須議旨云々、

而かも陳宜中未た至らざるを以て、留めて遣らす、權臣の掣肘、由來豪傑の事を誤る多し、慨すべきかな、

此の時朝議恰かも呂師孟を以て兵部尙書となし、呂文德和義郡王に封し、頼て以て元と好を求めむと欲す、師孟因て益偃蹇、自ら肆にす、天祥上疏して言ふ、朝廷姑息奉制の意多く、奮發剛斷の義少し、乞ふ師孟を斬り、鼓に疊り、以て將士の氣を作さむと、書奏報せられず、

願みて廟堂の上如何と見よ、陳宜中等ありと雖ども、彼れ唯死せる賈似道の餘黨を攻撃し、自家の舊罪を抹殺するを是務め、亦防禦の策もなく、邊警の計もなし、張世傑兵を以て入衛せる時は、元軍既に境上に在り、常州早く急を告げたり、是に於て朝議

始めて天祥を遣はして戊に就かしむるに決す、天祥乃ち十月十五日を以て平江府に入る、十六日旨あり、端明殿學士に除せられ、職任舊に仍る、制詞あり曰く、
 勅、元戎十乘、先行式倚、真儒之望、師中三命、承寵遙隆、方面之權、朕若稽先朝之舊章、最重承明之遠職、內以傳畿廷之意、外亦褒帥閫之賢、王素之牧平涼、程勣之莅益部、皆膺茲選、今得其人、某官、實學濟時、英猷緯國、文有武備、義概質于神明、儒知軍情、忠忱貫于霜日、傳檄召兵、而志士奮纓、冠赴難、而國勢張、不負素定之猷、允謂寡二之略、予欲復江表之疆宇、命爾攘除、予欲壯浙西之翰藩、咨爾修扞、威稜聳前茅之令、夷虜折破竹之威、惟任之專者、位必崇、惟名之至者、功必集、乃躋班規殿之峻、以增華帥閫之嚴、噫、邦咸喜、戎有良翰、茂對涉明之渥、身雖外心、在王室、越成敵愾之勳。

常州已に急なり、而して天祥方に平江に在り、陳宣中乃ち使を遣はし、張全をして淮兵二千人を將ひて、常州を援はしむ、天祥因りて其の將朱華、尹玉、麻士龍をして廣贛の兵三千を將ひて、之に従はしむ、張全兵を以て虞橋に伏す、麻士龍戰死すれども、全援はす、走て五牧に回り、以て朱華に就く、華乃ち守禦の措置をなす、全許さす、而して元軍華の軍に薄り來れり、華一戰して敗績す、張全其の軍を擁し、河を隔て、之を傍觀し、一矢を發さず、華か軍敗走して水を渡る者、争ふて全か軍船を挽く、全其の軍に

令して、船を挽く者の指を斷せしむ、華か軍多く溺死す、而して元兵既に山後を繞つて贛軍に薄り來る、曾全先づ遁れ、張全亦早く遁れて影もなし、尹玉獨り孤軍を以て叱咤、其の鋒に當り、殊死して戰ふ、殺す所の人馬殆んど算なし、尹玉之に死す、明くるに及て、脱するを得るもの四人、亦一人の降る者なし、天祥軍律を案して、張全を斬らひ、と欲し、之を督府に請ふ、督府張全の罪を宥り、獨り曾全を斬つて、以て三軍に徇ふ、天祥又奏して、尹玉に團練使を贈り、廟を死所に立て、其の二子を官にす、

十月十一日、天祥詔を賜はる、曰く、
 卿乘忠忱、以濟時難、倡義旅、以衛王室、經營四方、如召虎、獎率三軍、如武侯、愛咨常伯、之英趣、奮制閫之寄、將士用命、遂汎掃於虜氛、精神折衝、益振揚於勝氣、有嘉體國之志、亟奏攘夷之勳、元戎啓行、周邦咸喜、載加錫賚、式示眷懷、今賜卿金二十兩、注盃一副、金十五兩、盤盞一副、細色二十四匹、纈羅二十四匹、龍涎香三十餅、度金香合一具、十兩、清馥香三十帖、龍茶十片、至可領也、故茲劄示、其體吾注倚之意。

十八日、元軍竟に常州を破り、其の城を屠る、州郡連りに降り、元兵臨安を距ること十里、獨松關急を告ぐ、時に張世傑か軍五萬、諸路勤王之兵四十餘萬あり、天祥世傑と議す、兩軍堅く閩廣を守り、城を全らし、王師一齊に血戰して、萬一捷を得は猶なすべし、

と世傑大に喜び共に約して師を出す、ついで劉夢炎、陳宜中と議して平江を棄てむと決し、天祥を趣して移つて餘杭を守らしむ、天祥平江を去るに恐ひず、猶豫して未だ決せず、左右兩相府の府割再至る、乃ち印を通判王舉之に委し、環衛王邦傑を責め、以て城守せしめ、竟に平江を去る、天祥平江を去つて三日、舉之邦傑門を開いて迎へ降る、都人大に駭き、天祥平江を棄つるを議す、天祥乃ち左右兩相府の割榜を朝天門外に出す、衆始めて其疑を釋き、輿論乃ち定る、天祥は是に於て資政殿學士浙西江東制置大使兼江西安撫大使に除せられ、屯を餘杭に置き、獨松關を守る、天祥と世傑とは師を出して一血戰をなさむと期す、而して宜中王師を以て務て重きを持し、詔を降して之を沮み、使を遣はして和を乞ひ、天祥等に詔して兵を罷めしむ、尋て元の一軍湖南より來つて潭州を圍ひ、守臣李芾力を竭して戰守し、屢捷つ、竟に衆寡敵せずして死す、潭州陷る、是に於て元軍獨松關を攻むること益急、二十三日、竟に獨松關を破る、而して和を求めたる劉夢炎先遁る、十二月内批あり、天祥簽書樞密院事に除せらる、其の十六日、隆興府降り、制置黃萬石圖を撫州に移す、元兵至ると聞て、乃ち遁る、撫州降る、

第九 阜亭山の樽俎折衝

獨松關既に破る、臨守の都城指顧の間に在り、德祐二年正月、天祥知臨安府に除せらる、天祥拜せず、允されず、乃ち楚月穿春袖、吳霜透曉鬢、壯心欲填海、苦膽爲憂天、役役慙金注、悠悠歎瓦全、丈夫竟何事、一日定千年、

を吟し、輕兵を以て闕に赴ひ、初八日、天祥福王沂王を以て臨安に判し、以て民望を緊き、身少尹となつて死を以て宗廟を衛らむことを請ふ、蓋し大臣日に三宮江を渡るを請へども、太皇太后之を允さず、而して都人競うて危言をなし、車駕を持して動くを欲せされはなり、而かも天祥諸老と議合はず、此の時張世傑恰も重兵を六和塔に宿せしむるを以て、天祥又世傑に請ふて京師の義士二十萬と、城内外の軍數萬人を將ひ、少保に諜し、城を背し、一戰を借て、以て守をなさむとす、世傑天祥を勉て、歸りて江西に據らしめ、己れ淮堧に歸り、以て共に後圖をなさむとす、十五日、壬午、臨安在朝の臣一時に俱に逸る、而して十七日を以て、元の丞相伯顔大軍を擁して、阜亭山に至る、臨安を距ること僅かに五里、宰相陳宜中使を遣はして、絡繹和を請はしむ、伯

顔當國者を邀へ相見むとす此の時劉夢炎は既に遁れり乃ち陳宜中を見むことを
 求む宜中之を許し其の夕を以て遁れ去る明日張世傑も亦遁る十八日元軍の一軍
 又臨安の北七里に至る而して朝廷亦人なし因りて始めて天祥の議に従ひ益王廣
 王をして太皇太后に従ひ關を出て江を渡らしめ大將蘇劉義兵を以て之を衛り間
 を以て永嘉に走らしむるを得たり

十九日早朝天祥樞密使に除せられ又右丞相兼樞密使に除せらる拜せずこの時元
 兵已に修門内に迫る戰と守と遷と皆及ばず施樞紳大夫士皆な吳堅が左丞相府に
 奉りなす所を知るものなし會元丞相伯顔の使到り當國者を邀へて相見むことを
 求め促す上下震恐し策の出づる所を知るものなし嗚呼堂々たる廟堂一人靖難を
 以て任とするの人なきか事急にして責ある者悉く遁る是に於てか竟に天祥を煩
 はさるべからず時に旨あり天祥をして北軍に往て講解辨理せしむ衆皆な天祥
 をして往かしめば以て國難を紓ぶるを得べしと謂ふ今や邦家の責は挂つて天祥
 一人の雙肩に在り國事此に至る天祥亦た身命を愛さざるなり彼一身を犠牲に供
 するも以て國難を排せむことを誓へり且つ謂らく北虜尙は口舌を以て之を動か
 すべし又最初より奉使往來すれども一人の北軍中に留めらるゝ者なし我も亦一

たび往いて其の内實を覘ひ歸り以て救國の策を講ずるの一助となさむと是に於
 て乎天祥は一の國家を脊負うて起てり事急なり新に官を命ずるの暇なく直に資
 政殿學士の舊職を以て二十日元軍の牙營たる阜亭山に赴むく
 天祥既に阜亭山に赴むき元の宰相伯顔を見る因て伯顔に説て曰く宋は帝王の正
 統を承くるもの固より遼金の比にあらず今北朝將た宋を以て與國となさむと欲
 するか將其の宗社を毀たむと欲するか二者何れに出でむとする者乎若し以て與
 國となさむとならば宜しく兵を平江或は嘉興に退けて然後に歲幣金帛を議して
 師を犒うべし天祥躬ら請ふ議定する所を督して之を軍前に輸はむ此の如くにし
 て北朝師を全うして以て還らば此れ戰はずして全勝なるもの策の上なり若し然
 らずして其の宋社を毀たむとならば兩淮兩浙閩廣尙は未だ下らざるもの多し兵
 を窮めて之を擧げば利鈍未だ知るべからざるなり假し能く宋の邦土を擧げて盡
 く之を取るとするも豪傑並起り兵連り禍結ぶ此より始まらむと正々堂々として
 國際の大義を論破し來て銳鋒當るべからず伯顔應接に苦るしむ乃ち危言を以て
 天祥を折かむとす而かも天祥は竟に擾すべからざるなり撓ますべからざるなり
 天祥は意氣昂然として眉を軒け膽を吐いて謂ふ今日宋の狀元宰相欠く所あらば

一死國に報せむのみ、宋存すれば與に存し、宋亡へば與に亡ふ。刀鋸前に在るも、鼎鑊後に在るも、懼るゝ所に非ざるなり。何の怖るゝことか、我れなさむと、悍然として睨一睨す。伯顔之が爲めに容を改む因りて天祥を留めて還さず、且つ曰ふ、前日已に程鵬飛を遣はして、宋の太皇太后の簾前に詣り、親しく處分を聽かしめたり。鵬飛の至るを候ふて、即ち丞相と議を定めむと、是に於て天祥留められて還るを得ず、天祥蓋し他の術中に陥れるなり。

臨安の朝廷にては、既に天祥をして敵手に陥らしめたり、今や亦た一人の懼るべきものなし。明日直に左丞相吳堅、右丞相賈餘慶以下、同知樞密使謝堂、僉書樞密使院事家鉉、同僉書樞密院事劉昱、及呂師孟等、傳國玉璽を奉じ、降表を持して來り獻ず。天祥是に於て深く一出の誤を悔い、甫めて嚮に廟堂兼議、天祥の出使を從與したる者は、意あつて天祥を推陥せしものたることを覺れり、即ち是れ、德祐二年丙子正月二十一日なり。宋元に降る、且つ詔を降して、副ふるに省札を以てし、各州縣をして元に歸附せしむ。嗚呼、廟堂を擧げて皆な巾幗婦人たり、竟に一人の男兒、一人の丈夫を見ず。堂々たる丞相を以て國を擧げて容易に人に降る、千載の下予、尙は其の面に唾せむと欲す。

左丞相吳堅以下五人、表を捧げ祈請使と號して元軍の牙營に至る。伯顔天祥を引いて、坐を同うして之を觀せしむ、而して堅等各車に就て歸る。獨り天祥を留めて遣らず。天祥怒氣滿腔、切齒して憤惋し、總髮冠を衝き、目光爛々電の如し、四座を睥睨して大に賈餘慶等の國を賣るを罵倒し、叱咤し、且つ伯顔人を欺き、大に信を失するを詰責す。襄陽の降將呂文煥、傍より天祥を慰解す。天祥益怒りて、聲厲らかに呂師孟の風に早く斬るべかりしを喝破し、叛道の遺孽當さに春秋亂賊を誅するの法を用ゆべしとて、頻りに罵つて逆賊々々と呼ぶ。文煥乃ち天祥に謂ふ、何が故に逆賊を以て罵らるゝや。天祥坐に靜り返りて曰ふ、國家不幸にして今日に至るは、汝罪魁たり。逆賊に非らずして何ぞ三尺の童子、猶ほ汝を斥け罵る。獨り我のみならむや。文煥曰ふ、襄陽を守ること六年、救はず、是を以て此に至ると。天祥直に曰ふ、呂氏一門父子兄弟國の厚恩を受く、不幸にして勢窮し、援絶すれば、死を以て國に報むて可なり。豈に降るの理あらむや。汝自ら身を愛し、妻子を惜み、竟に家聲を壞ひたり。今汝闔族逆をなす、尙は何をか言ふと。文煥は慚悲し、師孟は忿怒し、云ふ、丞相今日何ぞ師孟を斬らざる。天祥謂ふ、汝叔姪國を賣つて降る、恨らくは朝廷刑を失し、汝を族滅せざることを、汝今日能く我を殺さば、我は大宋の忠臣たることを得む足れり。豈に死を懼れむや。師

孟語塞る、伯顔之を聞き舌を吐て云く、男子男子と是より愈益天祥を留めて還さず、
而して買餘慶歸る、

二十四日、學士院をして天下に詔して歸附せしむ、而して伯顔其の鎮撫唐兀兒、宋趙、
興相等を遣はして、先づ天祥所部の義兵一萬餘衆を罷め散じて、各郷里に歸らしめ、
皆文榜を給與せらる、天祥之を聞いて流涕自ら堪へず、嗚呼苦心慘愴して招集し、
より吉より湘より潭より閩より廣より四方來り會して漸く臨安の重きをなすの、
獅子祥、彼等は其の獅子王を失ふて今や四潰四散す、天祥十年の經營一朝にして空、
し、天祥の心事尙に哀むべきものあり、
悠悠天地、淵世事與誰論、清夜爲揮涕、白雲空斷魂、死生蘇子節、貴賤翟公門、前輩如瓶、
戒、無言勝有言、

天祥大に議論して却て憚られ、爲めに還るを得ず、而して其の所招の義兵爲めに散、
するを致せるを深く恨む、故に曰ふ、前輩如瓶、戒、無言勝有言、と、而かも天祥は大に言、
ふ所ありしなり、言あつて以て他の肝膽を寒からしむ、有言却て無言に勝るなきや、
天祥所部の勤王義兵、今や解散を命ぜらる、而して多くは皆な歸附し、其の浙を渡つ、
て閩に歸るもの、惟方興朱華鄒鳳張朴數人のみ、

九門一夜漲風塵、何事癡兒竟誤身、子產片言圖救鄭、仲連本志爲排秦、但知慷慨稱男、
子、不料蹉跎愧故人、玉勒雕鞍南上去、天高月冷泣孤臣、

方興朱華鄒鳳張朴亦た天祥の爲めに、一掬の血涙を搦して、天に慟じ地に訴ふるも、
のあらむ、

かくて天祥は二月八日を以て、吳堅、賈餘慶等所請使と、俱に北に送らる、初め天祥の、
將さに阜亭山に赴かひとす、や天祥の諸客皆な行くことを賛す、天台の杜澥獨り、
其の行を留む、諸客澥を逐ひ去らしめ、以て天祥を行かしめたり、是に至つて諸客皆、
散す、而して澥獨り天祥の孤苦を憐み、留て行かず、終始天祥と辛酸共に嘗めたり、
眼看銅駝燕雀羞、東風花柳自皇州、白雲萬里易成夢、明月一圓都是愁、男子鐵心無地、
着、故人血淚向天流、雞鳴會脫函關厄、還有當年此客不、

食客三千人、侯嬴竟に得難し、鷄鳴狗盜の客尙は得易しとするも、此の如きの客は、田、
文も未だ得ざる所たりしならむ、天祥にして此の客ある、以て其の人たる、既に田文、
以上のものたるを知るに於て餘あるべし、

第十 間關と崎嶇と (其一)

(囚人として北行す)

臨安の朝臣は降表を捧げて跪けり、天祥は陥つて北虜の營中に在り、彼は此より將に北燕都に送致せられむとはするなり、鳳篋に在り、鶴樊に在り、蒙古の屈辱を受けむよりは、寧ろ自ら死を潔よくするに如かず、天祥は意を決したり、二月初七日の夕、天祥乃ち家書を作くり、悉く家事を處置し、翌日北行せば、直に引決して終はらむものをも、既に死を決して居たり、參政家鉉翁亦祈請使と共に營中に留めらる、天祥の死を決するを見て慰めながら、公今死したらむには、却て公の勇を傷けなむ、北に至り南還を求め、若し許さずば、こゝに死を以て争ふとも、未だ晚からずと言へば、天祥も然りと思ひて、隱忍して猶ほ一日を冀ひ、國に報ずるの道を講ぜむとはせり、初め賈餘慶、吳堅等が學士院をして、天下州郡に歸附を令せしめ、各州毎に一省割を附せむとするや、家鉉翁時に樞密たり、固く執つて肯へて省割上に押せず、丞相吳堅老儒を以て自ら號しながら、惟賈餘慶の命に惟れ従ふのみ、廟堂の骨髄、獨り鉉翁あるのみ、元使程鵬飛其の命を奉ぜざるを見、堂中に鉉翁を縛し去らむとす、鉉翁凜乎とし

て持し曰ふ、中書省執政を縛するの理なし、私廳に歸つて執へらるゝを待たむと、元使敢へて犯さず、是に至て天祥と共に捕へられて、北に送られむとはするなり、天祥は將に二月初八日を以て、祈請使と共に北に送られむとす、而かも天祥は使列にあらず、實は一の捕虜たるなり、此れ蓋し賈餘慶等の計に出てしものにて、天祥を驅逐し、廟堂亦忌憚するものなからしめむとするに由るものたり、天祥はかくて北行せり、従ふもの獨り天台の杜澣あるのみ、天祥の北營に捕へられてより、天祥の諸客皆な散せり、獨り杜澣去らず、朝旨あり、宣教師に改め、禮兵部架閣文字に除せらる、是に至て天祥に従うて北行す、蓋し天下の義士なり、天祥深く其の高義に感し、爲に五絶二首を賦す、
仗節辭王室、悠悠萬里轅、諸君皆兩別、一士獨星言、啼鳥亂人意、落花消客魂、東坡愛巢谷、頗恨晚登門、
昔○越○魏○公○子○今○事○霍○將○軍○世○態○炎○涼○甚○交○情○貴○賤○分○黃○沙○揚○暮○靄○黑○海○起○朝○氛○獨○與○君○携○手○行○吟○看○白○雲

天祥北營に入てより、未だ嘗て雞鳴を聞かず、九日の曉、泊して謝村に在り、始めて喔々たる雞鳴を聞けり、鷺禽は毎に籠を脱せむことを思ひ、蹠者未だ嘗て起つことを

忘れず天祥の脱し去らむと計る日一日にわらず此の曉天祥實に杜濬と共に逃れ去らむと計りしなり不幸にして二更の頃劉百戸等二三十人一舟を擁して來り天祥に通つて船に下たらしめ遂に脱走するを果さす十一日留遠亭に宿す北人火を亭前に燃き祈請使の諸公を聚め列坐酒を行る祈請使一輩北人の屈辱を受けて恬然として恥つるなく甚に至つては淫褻の戯をなして北人の笑を買ふ禮樂衣冠地を掃つて空し天祥之を見て悲憤已む能はず切かに長嘆大息之に繼くに流涕を以てしたり國の將に亡ひんとするや此の如きの徒輩擾々として多し嗟夫

途吳門の平江府を過く吳門は元軍南下の勢を扼すへき咽喉の地天祥か向きに知たるの命を受けたるの府たり當時若し天祥をして之を死守せしめば元軍たどへ風雷を叱咤して南下し來るも未だ容易に獨松關に通るを得ざりしならむに惜かな當時天祥は平江府に知たるの命を承けなから權臣の掣肘により未だ往いて之を死守するに及ばず逡巡の間元軍早く獨松關を破り阜亭山に營し臨安降り國家辱められ身亦囚繫の人となるを致せり天祥今一の囚人として此の地を過さる天地俯仰の間其の悽愴の感念に禁せざるものありしは固より言ふを俟たず天祥は憤慨の餘り病めるか如くに舟底に偃臥せり平江府の舊吏三五つて天祥を慰人來

問し且つ其の經關する所を聞き皆な流涕して去る日落ちて纜を解く夜行くこと十里

又た無錫の河を經由す巳未の歲即ち理宗開慶の元年天祥年二十四の時嘗つて弟壁と共に父を葬ひり畢て再ひ臨安を指すの日實に長江より裏河に入り以て京江に趁り時に此の地を經由せり今天祥復此の路に由りて北行す首を回せば十八年昔は進士として此の地より南上し今は囚虜として此の地より北折す天祥豈に今昔の感に耐ゆへけむや乃ち七律を賦して感懷を遣る金山は冉々たり錫水は混々たりたとへ此の山礪の如く此の河帶の如きも天祥區々の志安く能く替へむ

金山冉々波濤雨錫水混々草木春二十年前曾去路三千里外作行人英雄未死心爲碎父老相逢鼻欲辛夜讀程嬰存趙事一回惆悵一沾巾

生は難く死は易し程嬰趙を存する天祥にあらすむば誰か亦其の任に當る者乎如何せむ身は籠の鳥溟渤を縦斷するの大鵬翼も鐵索もて繁縛せられては亦如何すへき術もなし天祥の憾金山と共に大に錫水と共に長し

既にして又五木を過ぐ五木は天祥の將朱華血戰の場にして尹玉戰死の地たり此の戰や尹玉手に七八十人を殺して自ら倒れ其の麾下亦血戰して死し一の降る者

なかりき朝廷乃ち濠州團練使を贈り、爲めに廟を立て、其の二子を官せり、歴々たる山河、是れ當年の舊戰場、天祥之を過ぎ、太た尹玉の死を憐み、爲めに尹玉を哭す、團練濠州廟贛川官其二子賜良田、西臺捕逐多亡、將還有焚黃到墓前、

元軍南下してより以來、或は捕へられて死し、或は戦ふて没するもの、其れ幾何、獨り尹玉其の死所を得たり、五木の地碧血石に結し、痕猶は斑なり、尹玉の魂、此の間を遶くる、而かも其の死所を得、尹玉たるもの、以て地下に瞑すべし、

常州に抵る、常州は宋の睢陽郡なり、固守して降らず、元軍怒つて城市を屠り、殺戮して遺種なし、鬼火青くして草風腥し、忠義の鬼長く響くる所なし、天祥乃ち五律之を吊す、

山河千里在、煙火一家無、壯甚睢陽守、冤哉馬邑屠、蒼天如可問、赤子果何辜、唇齒提封舊、撫膺三嘆吁、

睢陽の提封、血杵を深はし、幾千百の赤子、凡て無告の鬼となる、舉目矚望すれば、山河悽愴として、孤臣の涙一掬、二掬、衣巾を沾はし、殘日斜に射つて、落花狼藉たり、

第十一 問關と崎嶇と (其二)

(鎮江より眞州に脱走す)

天祥か諸祈請使と共に、京口の鎮江府に達せしは、方さに二月の十八日なり、此より將に明十九日を以て、瓜洲より江を渡らむとするなり、而かも未だ渡らすして京口に在り、杜游従ふて亦京口に至る、天祥間を得て脱去せむと計るも、舟の得へき術もなく、連日志の如くなる能はずして、空しく岸上なる沈願か家に在り、窈かに杜游と共に眞州に走らむことを謀る、帳前將官余元慶亦謀に與かる、元慶は眞州の人なり、

脱走の計天地三人の外、何人も之を知らず、天祥南歸の心殊に切なり、孤舟霜月、迥曉起、入柴門、斷岸行、簷影荒畦、落履痕、江山渾在眼、宇宙付無言、昨夜三更夢、春風滿故園、

脱去の心愈切にして、脱を得ること太艱し、天祥他の杜游、余元慶二人と終に計を定む、杜游天祥に語て云ふ、事成らば萬々の幸なるべきも、若し不幸にして謀の泄るゝあらば皆共に死するあらむのみ、死して怨あるや、如何にと、天祥心を指し自ら誓つて、死するも悔ゆるなしと云ひて、乃ち一匕首を辨し、之を挟み、萬一事濟らずむば以

て自殺せんとす、杜濬も亦死を決して計に従事せむとす、是に於て杜濬僞つて顛狂の人となり、醉ふて市に遊び、宋朝を追思して感憤するものあるに遇へば、即ち金を捐て、之に與へ、密かに通れむと欲するの謀を告ぐるに、皆な自ら効すことを願はざるはなし、たゞ舟なきを以ての故に輟む、此の如きもの前後十數回、其の謀の泄れざりしは、眞に幸なるのみ、

京口は城なきも、通衢多く隘うして、市井太複雑、江を去ること尙三里、脱するに艱くして、出づるの路なし、杜濬偶一の老校を得、賄ふに銀三百兩を以てし、甫めて間道を知るを得たり、此の道に由れば、僅かに三數巷を出て、即ち荒涼の野、直に走つて江岸に至るべし、路頗る近し、若し此の間道を知らずして、市井の正路を行かむとせば、固より脱出するを得へき理なかりしなり、既に間道を得たりと雖ども、江頭終に一の舟を得べきなし、北船は江に滿ち、巡邏頗る密なり、杜濬百方計を運らすと雖ども、皆船なきを以て長嘆して止み、一人の杜濬の爲めに舟を贖するなし、既にして余元慶其の故舊に遇ふ、蓋し元慶が真州の故舊にして、今北軍の管船たるものなり、元慶就て密かに之を叩き、許すに銀千二百兩を以てし、以て舟を得むと欲す、管船云ふ、吾宋の爲めに一丞相を救ふて、回りにて大功業を建つるを得せしめば足る、何ぞ錢を

以てするをせむと、たゞ批帖を求めて他日の證となせるのみ、此の如くにして又船を得たり

杜濬既に間道を得、又船を得たり、此の日方さに二月二十九日、天祥大に喜び、脱去の心益切なり、是の午北人瓜洲を過ぐべきを促す、賈餘慶等諸人皆な渡る、たゞ天祥丞相吳堅と報を得ること最遅し、因りて故に托して、來日を以て吳丞相と同むく江を渡らむと云ふ、北人天祥を疑はず、故に亦敢て追らず、是を以て天祥竟に此の夕を以て、通るゝを得たりしなり、若し此の日を以て必らず渡らざるべからざりせば、天祥か杜濬余元慶と慘憺經營せる所、皆な水泡に歸せしならむ、杜濬既に老校に就て間道を知るを得たり、因て之と日に歡飲し、顔情甚た狎る、老校は蓋し間道を監するもの、走る必ず之が門を過ぎざるべからず、是の夜杜濬等と出て、門を伺ふ、彼の老校中をろ心を變じ、酔うて出て、其の妻詰問し、大呼將に四隣を喚びむとす、此の夜逃るゝ者十二人、三人先づ伺ふ、一人走つて杜濬に報ず、杜濬乃ち固かに老校を喚起こし、三人を回らしめ、更に銀三百星を與ふ、是に因りて漸くにして間道を引いて走るを得たり、

此の夜天祥沈願の家に宴す、天祥か此に寓してより、天祥を監するの從者あり、王千

戸と曰ふ、狼突惡むべきもの、天祥と相隨つて上下し、頃刻も傍を離れず、毎に天祥の前後に臥す、此の夕天祥將に明三十日を以て、江を渡らむとするの故を以て、酒を行つて沈願と別をなし、之を辭はしめ、復た王千戸を辭はしめ、其の熟寢を伺うて、門を啓らき、以て出つるを得たり、

天祥等既に巷に出つ、巷々管夜ありて、往來を呵すること嚴なり、天祥如何にして此の間を出つるを得たるか、是より先き一會の夜沈願が家に入るあり、其の名を問へば劉百戸と曰ひ、其の職を問へば管夜禁と曰ふ、蓋し官燈もて往來を提照するものなり、杜濬乃ち劉百戸に隨て出強て之と交り、竟に約して兄弟となり、之を拉へて妓舎に狎飲し、此夜之を妓家に宿せしめ、劉百戸の官燈を其の小卒に持せしめ、來つて杜濬等に従はしむ、小卒至る、天祥乃ち服色を變じ、沈願か家を出て、杜濬等と共に小卒の導くに隨うて、諸巷を出つ、一巷の呵するなし、蓋し官燈を點するを以てなり、かくて人家漸く盡くるの處に至り、乃ち小卒に銀若干を與へ、僞て歸來の日、某所に待てよと云ひて別る、小卒齡方さに十五六、固より天祥等の通るを知らず、既にして市井の盡くる處に至る、隘所あり、十餘馬匹を以て路を欄し、以て夜を警す、天祥等至れば、馬乃ち驚き嘶く、而かも北軍皆な熟睡、一人の覺る者なし、是に於て天祥等、甫めて

向きに聞く所の間道より、江岸に出つるを得たり、而して二校をして先つ往いて舟を艤し、天祥等を甘露寺下に待たしめたるに、天祥至れば、則ち二校も見へず、船の所在も分らぬなり、天祥も殆むと絶望し、皆船已に約を失せるなりと言へば、天祥益力を失ひ、將さに七首を出して自決せむとするも、自ら殘するに忍ひねば、已むなくむば、水に投して死せんと既に心を決したり、余元慶往いて尋ねむと、裳を褰けて水を涉り、此の岸彼の汀、遍ねく尋ねること一二里許にて、船方さに至るに會ふ、皆なく、稽首して、天祥の爲に賀す、天祥大に喜び、乃ち船に登る、同舟凡そ十二人、

天祥既に船に登り、自ら意ふ、此より流に游つて直上するも、最早他事なかるへしと、何ぞ圖らむ、江岸一望皆北船連亘數十里に及び、前者は鑼を鳴らし、後者は鉦を打ち、以て江上を警戒す、氣勢甚た盛なり、天祥の船亦北船の傍に沿ふて經過せざるを得ず、而かも幸にして疑はれず、呵するものも、問ふものもなくして、漸くに七里江に至るを得たり、七里江に抵る、忽ち聞く、一巡船上、聲荒らかに誰呵するものあるを、天祥の舟、舉舟皆な蓬底に竄伏して潜む、巡者呼ひて、其の船何の船ぞと云ふ、舟夫恐れ、是れ河鮑船なりと答ふ、巡者は更に聲張揚げ、此れ怪しの船暫し止まれと叫ぶ、叫ぶ聲の下より、彼の船首はこなたに向けて、飛ぶが如くに馳せ來る、すはや大事と、船中の

人々手に汗を握りて居たりしが、此の時潮も落潮となりて、彼の船大なり馳せ来る勢に淺瀬に乗り上げ、動くさへ自由ならぬに、こなたの船は力の限りに錨推し、漕漕ぎはや彼の船も見へぬ程になれり、舟中の人稍心を安むじたるどころに、又もや聲高らかに呼ぶ音のするに、再び巡船の來たるならむと、耳を傾き聞けば、舟夫が船頭に突き立つて、江神に順風を請るにてありける、舟夫稽首合掌して、高聲に、江河田相公、江河田相公と叫ぶ聲の下より奇なる哉、一陣の順風、そよ／＼と海東より吹き來り、一帆風を孕みて江を上り、馳すること箭の飛ぶ如く、北船竟に追及ぶものなかりき、もしかく順風に帆を掲げて久く走ることを得しならむには、眞州に抵るは五更の頃なるべかりしに、風は良久して靜に、舟往くことも早からざれば、天明くるとき、尙は眞州を隔つること四五里、舟中の人深く北船の後より追躡するを恐れ、戦々兢々、舟中舉りて力の限ぎり、人毎に槳を搖かし、篙を撐げ、一心に舟を推上げ、岸近く過ぐれば、纜にて拽き上げ、汗を流し、膏を絞りて、眞州指して急げども、急ぐものは心のみにて、力は逃ばず、眞州城は眞近く見ゆれども、舟の進まぬに心えらち、益力を罄くして漕ぎ上げ、漸く眞州城外二里の處に着きたり、是に於て船を棄て、岸に上る、見渡せば眞州城一望平野掌の如く、四顧荒涼闊として、人影なし、行

々左顧右盼、追騎の猝かに至らむことを恐れ、よろ／＼にして、三月朔を以て、眞州城に入ることを得たり。

第十二 間關と崎嶇と (其三)

(眞州より揚州に走る)

天祥城下に抵る、眞州の諸城將皆な天祥の至ると聞いて、争うて出て迎ひ、觀者路傍に滿つ、城守苗再成迎へて天祥を見、國事を語つて時を移し、感憤流涕、乃ち天祥を迎へて、之を清邊堂に住せしめ、且つ李龍眠畫せる所漢の蘇武忠節の圖を袖にし來り、天祥に題詠を求む、天祥卷を撫するに、凄凉浩氣憤發、人をして慷慨激越、國を去り君を思ふの念に禁ぜざらしめたり、乃ち三詩を賦して、之を卷後に書す、天祥記して曰く、
 時丙子三月二日也、文天祥執筆於清邊堂之寓舍、其の詩に云く、
 忽報忠圖紀歲華、東風吹淚落天涯、蘇卿更有歸時國、老相兼無去後家、烈士喪元心、不
 易達人知、命事何嗟、生平愛覽忠臣傳、不爲吾身亦陷車、
 獨伴羝羊海上遊、相逢血淚向天流、忠眞已向生前定、老節須從死後休、不死未論生可
 喜、雖生何恨死、堪憂甘心賣國人、何處曾聽蘇公義、膽不

漢々愁雲海戍迷十年何事望京師李陵罪在偷生日蘇武功成未死時鐵石心存無鏡
 魏君臣義重與天期縱饑夜久胡塵黑百煉丹心涅不緇

天祥の眞州に至るや、守將苗再成京師の消息を知らざる已に數月因て天祥に問ふに、京師の事を以てす、天祥遂一其の梗概を語る、再成之を聞いて、慷慨激烈、泣數行下る、諸將校も來れり、諸幕下も來れり、皆な天祥を見て、感憤激昂、皆謂ふ、兩淮の兵力を以て興復を圖るに足る、懼むらくは揚州制置李庭芝と淮西宣撫夏貴と隙あり、合従するを得ず、若し丞相の兩關を交通するを得、一月間ならずして兵を連ね大舉せば、江南敵を傳へて定むべきなりと、天祥因りて再成に計將に安に出でむとするかと問ふ、再成言ふ、灣頭の如き、楊子橋の如き、之を守るもの皆沿江の脆兵なり、今通泰の軍を以て灣頭を攻め、高郵寶應淮安の三軍を以て、楊子橋を攻め、揚州の兵を以て瓜州に向ひ、再成と刺史趙孟綿と舟師を以て直に鎮江を擣き、同日に大舉せば、彼勢相救ふ能はざらむ、復灣頭と楊子橋との兵を以て三面より瓜州を合せ攻め、再成は江中の一面より之に薄らば、智者ありと雖ども之が謀をなす能はざらむ、然後に淮東の軍を以て京口に入り、淮西の軍を以て金陵に入り、兩浙の歸路を要せば、其の大帥生ながら致すべきなりと、天祥聞いて喜ぶこと甚し、即ち書を爲くりて、李庭芝と

夏貴とに致し、使を遣はして、四出約を結ばしむ、回天の事業、是に於て將に其の緒に就かむとするもの、如とし、惜夫一の危疑は李庭芝をして天祥を信ぜざらしめ、大事終に去り、亦た收拾すべからざるに至る、豈に慨すべからずや、

是より先き、二月二十三日、臨安の朝廷にては、元の阿朮平章、諸祈請使をして、手札して李庭芝を勉めて歸附せしむ、獨り天祥名を署せず、尋で揚州脱歸の卒あり、元一丞相を遣はして、眞州に入り、降を説かしむと報ずるに會す、是に於て庭芝天祥の書を得て、反て疑ふらく、宰相十二人と併せ脱するを得るの理なし、天祥必らず來つて降を説くならむと、乃ち書を遣りて眞州門を開いて、天祥を納るゝの罪を責め、再成に諭して、丞相に天祥を殺して、以て自ら白うせしむ、再成は天祥を殺すに忍びざるなり、乃ち天祥を給き、出て、城濠を視せしめ、王陸二都統をして、天祥を導いて城を出でしむ、既に城を出づ、二都統示すに再成の文書を以てす、天祥方さに驚嘆するとき、二都統早く馬に鞭て城に入り、門は已に閉せり、天祥門外に傍徨すること之を久らす、杜濬城濠に赴いて死せむと欲す、張徐二路分あり、從ふ、云ふ、苗安撫丞相を遣り送らしめたり、惟丞相の向ふ所に之けよと、天祥今は詮方もなし、揚州に往かむのみと云ふ、路分云ふ、苗安撫は揚州往くべからずと謂へり、と、天祥云ふ、然らばとて淮西に

赴かむにも、淮西の夏貴は相識らざるの人なり、今は命を天に委ねて、たゞ揚州に往かむと、因て揚州に向ふ、之を久うして、弓刀の卒五十人の至るあり、張徐二路分各騎に就き、二騎を以て天祥に従ふ、天祥杜游等と連騎行くこと二里、張徐馬より下らむことを請ふ、天祥既に馬を下れば、又歩し行かむと云ふ、既に行けば、又坐せむと云ふ、坐すること久うして語る、張丞は云ふ、揚州の李制使は苗安撫に諭して、丞相を殺さしめむとせしも、安撫固より忍びず、故に某等二人をして、丞相を送くり行かしめたるなり、今丞相安に往かむとすると、天祥たゞ揚州に往かむと云ふ、張徐云はく、揚州は丞相を殺さむと欲するもの、丞相必ず往くべからずと、天祥今や往く所なく、歸する所なし、たゞ奈何ともすべきなしと言ひて、茫然として自失するのみ、張徐乃ち云ふ、然らば丞相を送くりて淮西に往かむかなと、天祥云ふ、淮西路の歸すべきなし、今たゞ揚州の李制使を見て、自ら此の心を白うせむと欲するのみ、庶幾くは信ぜられ、て共に恢復を圖ることを得む、否されば通州より海に遊て、行朝に歸せむのみ、行朝とは宋新帝の行在を指すなり、張徐云ふ、苗安撫已に船を具ふ、今丞相に従ふて江行せむ、南に歸ると、北に歸ると皆な可なりと、天祥云ふ、此の如くむば、苗安撫も亦我を疑ふなりと、張徐始めて實を吐いて云ふ、安撫今猶は信疑の間に在り、某等二人をし

て便宜事に従はしめたり、某等丞相の忠義、此の如きを見る、何ぞ敢て害を加へむや、既に揚州に往かむと決したらむには、當さに相送るべしと、然かも猶は淮西の路を以て之を導き、天祥の疑ふべきものなきを見て、然る後に導いて揚州に向はしむ、既にして日暮る、乃ち張徐二路分に與ふるに、賜金百兩を以てし、五十兵に與ふるに、銀百五十兩を以てす、張徐先づ辭去り、二十兵を留めて従行かしむ、頃刻にして亦去る、天未だ明けずして、揚州に抵る、時に三月初三日なり、

第十三 周關と崎嶇と (其四)

(揚州より高沙に越る)

三日月の淡き影に、揚州を指し春風鞭を揚げて行く程に、月傾きぬ、雲の一抹染れて地に在り、續き三日月はや西に落ち夜更けぬ、天祥は踏み慣れぬ路に、導くものもなく、夜行杖を啣ひて揚州の西門に至れり、憊ること甚し、一廢廟あり、屋壁悉く破れて、僅かに墻堵を存す、天祥の一行皆地に枕藉して睡る、時に夜三更、風寒く露濕る、凄苦道ふべからず、揚州城市に入れば、方さに四更を打す、城の西門に近づき、漫に地上に坐して、亦立つの力なし、頭を城上を候へば、濠を隔て、城兵に誰何せらる、而かも

亦應ずるの力もなし、杜濬謂ふ李制使既に丞相を殺さむとするもの、若し揚州の城門を叩かば、恐くは矢石の下に死するに至らむ、城外又楊子橋を隔ること遠からず、必らず北軍の哨騎もありなむ、且らく哨騎を避くること一日にして、夜を以て高郵に趨り、通州に至り海を渡つて、江南に歸り二王を見て、報國の志を伸ぶるには如かず、城下に徒死するも、亦た益なからむと、而して金應は謂ふ門を出れば、即哨騎あり、通州此より尙二十五里、何を以て能く之に達するを得む、其の途に死せむよりは、揚州に死するに如かず、且李制使の果して丞相を害するや否やを必ずべからざるなりと、頻りに留らむことを勸む、天祥未だ決する所を知らざるなり、余元慶時に一の賣柴夫を引き至る、之に問ふに能く導いて高沙に至るや否やを以てす、彼之を能くすと曰ふ、乃ち何の處にか一日を避くべきやと問ふ、彼我家可なりと答ふ、此より幾里ぞと問へば、五里と答ふ、哨騎至るやと問へば、數日一も至らずと答ふ、而して杜濬は去らむと主張し、金應は留らむと懇懇す、金應に従はむか、天祥は李制使の爲めに殺さるべし、杜濬に従はむか、北軍哨騎の爲めに捕へられなむ、左せむか、右せむか、東せむか、西せむか、天祥未だ決する所を知らず、時に曉色漸く分ち、東天微かに白を呈し來る、去らむとして數歩せば、金應天祥を牽き、回らむとして數歩せば、杜濬又來り

拖き、天祥進退維谷まる、杜濬と金應と共に天祥の衣を持して放さず、共に涕を揮つて各其の意見を陳じて止まず、天祥同行凡そ十二人行むか止らむか、共に未だ決せざる中、余元慶以下四人、遽かに叛心を生し、各懷にする所の白金百五十星を携へながら、遁れ走り、其の之く所を知らず、天祥困憊殊に甚だし、而して又饑餓に頻す、困行數十歩、喘くこと急にして、進むこと能はず、倒れて荒草の中に横臥するを覺せず、衆扶け起して又行く、而して天祥復倒る、此の如きもの數十回、天既に曉なり、是に於て終に意を決して、揚州城下を去り、賣柴夫に隨つて、其の家に越る、未だ至らずして天色漸く明なり、足疲れて亦進むを得ず、山腹に一の土圍あり、もとは是れ民居、今は毀蕩の餘、椽もなく瓦もなく、其の間馬糞堆積穢道ふへからず、而かも天は明けり、足は疲れたり、北軍の哨騎若し此の一行を見るなきを保すへからず、穢なりと雖ども、猶ほ暫く避くるの計をなすに足らむと、乃ち土圍の中に入る、四山たゞ閑として人影もなく、飢れども米の飯すへきなく、米あれども火の炊くべきなし、懐金ありと雖ども亦救ふなし、且夫れ土圍の中、糞穢避くべからず、但數尺の地を掃淨し、携ふる所の衣服を以て、之を地に敷き、坐しながら睡り、睡りながら起き、起きても睡り、坐しても睡り、日長うして過こし難く、情緒奄々たり、蓋し北軍の法として午前哨を出たし、午

後各歸るを常とす、是の日睡起すれば既に午後皆備ひて哨騎の至らざりしを賀す、忽ち聞く鐵蹄の地を蹴り、人聲の甚喧嘩なるを、因て壁隙より之を窺ふに、乃ち哨騎數千東よりして西するものなり、天祥是に於て、揚州城下に死せずして、此の困阨に逢ふを悔ゆ、悔ゆれども今は詮なし、哨騎の蹄音は益近く來れり、幸なるかな、大風忽ち地を捲いて起り、黑雲暴かに濔渤として興こり、亂雨急に至り、天地皆冥、哨騎數千山に沿うて行き、正さに土圍の後を遶つて過ぐ、天祥の一行凡て人色なし、皆な牆壁の蔭に潜ひて動かず、此の時若し一騎の入來するありしならむには、天祥以下固より瞧類なかりしなり、彼等は今門前を過ぐるなり、馬蹄の響も劍佩の音も、歴々として耳に在り、僅かに一壁を隔つるのみ、危哉危哉、幸にして風雨大に作り、哨騎路を急き徑に去つて亦た深く探らず、天祥の一行始て蘇生の想をなす、此の時土圍中に在るもの、天祥を併せて八人、曰く杜濬、金應、張慶、夏仲、呂武、王青、鄒捷と已に午を過ぎ、皆謂ふ、哨騎最早來らざるべしと、山下の一里、古廟あり、廟中一丐婦之に住す、廟前一井あり、遂に呂武、鄒捷をして山を下り井に就て水を汲ましめ、又た米菜を得て少しく飢餓を救はむとするなり、此の時哨騎卒然として至り、二人を捕ふ、呂鄒二人乃ち腰金三百兩を出して、悉く之を與へ、幸にして免るを得たり、此の日

衢に賣柴夫に従ひ其の家に往かひとせしも、足前ひの方なくて、此の土圍中に入りたるより、乃ち彼に約して、揚州の城に入り、米を糶し來りて、性命を救はしめんとせしに、彼既に城に入り、北騎數百西城門に薄りしか爲め、門閉されて彼出づるを得ず、天祥饑ゆること益甚しくして、彼歸り來らず、窘むこと殊に切なり、且つ土圍の中、露天にして雨を凌ぐなく、以て睡臥すへからざるが故に、是に於て山を下たり、古廟に投じ、丐婦人と同じく居る、時に日既に暮る、忽三四人の陸續來るあり、天祥以て哨卒至るとなし、免れざるを知り自ら決せむとす、幸にして是れ樵夫の城中より來り、夜柴薪を伐り、翌朝直に城に赴いて賣らむとするもの、固より惡意あるものに非ず、天祥意始めて安す、諸樵柴を焚いて糶糞を煮い、其餘を出して、之を天祥に遺くる、天祥等はを以て、辛ふして身を存するを得たり、嗚呼堂々たる宋の狀元宰相にして、窮阨一に何ぞ此に至る、孔子陳蔡の野に飢ゆ、曰はく、兇に匪す、虎に匪す、彼の曠野に率ふ、我道非なるかど、顏淵曰はく、夫子の道至大なり、故に容られず、容られずして後君子を知る、と、天祥道非なるにあらず、至大なるなり、彼れ至大の道を行つて、興復の業を建て、ひとす、故に困阨一に此に至るなり、天の偉人を生ずる、必ず先づ其の人を饑寒せしむ、饑寒こゝに聖賢を鑄り、疾風に必ず勁草を知る、天祥不撓不拔の氣、一難を

經る毎に百倍し來る此の間以て天祥の面目を窺ふに足るものあるを覺ゆ

第十四 間關と崎嶇と(其五)

(高沙より通州に抵る)

時に初三日の夜なり天祥諸樵夫と伍して宿す因て導いて爲に高沙に往くやを問ふ欣然として従うて曰ふ此の處高沙に赴むに使ならず城の北門買家庄に駐ると一日以て高沙に赴かむには如かずと夜方に五鼓天祥諸樵夫に隨うて往く初四日天祥桂公塘に在り北騎數千東行するを見る其の故を知るに由なし後買家庄に至れば樵夫あり云ふ昨夜北營に白鬚の老子あり南朝の相公と稱すと因て其何如の人なりしと問ふ曰く面大にして體肥たり蓋し家鉉翁其の人なるべく樵の北騎は鉉翁を護送せしものなるへし嗟夫天祥たどへ道路に顛踏し窮途に泣くと雖も今や既に樊中の鶴にあらず諸を家鉉翁等の諸老に較せば彼を以て此に易ゆへからざるなり天祥亦以て聊か意を慰むるに足る面かも彼れ鉉翁を忘るゝに忍ひず其の北行を聞いて泣然として流涕するもの之を久うす是に於て初五日天祥三樵夫に隨ひ黎明始めて買家庄に至るを得乃ち亦土圍の中に止まる臥所糞壤散亂

し風露凄然加ふるに褥腹己に兩夕及一日半飢殊に甚だし乃ち三樵夫に懇請して城に入り米を糶し肉を買ふて到らしむ午に至て甫めて食を得たり其の夜天祥騎を雇うて高沙に越る行くこと六里板橋に至り迷ふて道を失し通宵田畝の間を行き東西を別つを得ざるに至る風露滿身人馬共に饑乏且霧中を行き咫尺を辨せず歩行太艱む須臾にして四山微に明にして曉霧の中忽ち隱々として北騎の至るあり道傍竹林あり天祥等亟かに之に避く頃刻の間二十餘騎至り竹林を過つて喧噪す叱咤するあり疾呼するあり弩を響くあり戟を投するあり林中を踟躕して過ぐるあり竹木を躡倒して行くあり一箭飛ひて虞侯張慶か右眼に中つ帳兵王青縛せられ馬上に上せ去らる架閣杜澹と路分金應と亦林中に獲らる携ふ所の黄金を賂うて免るゝを得たり天祥其の時方さに杜澹の傍に匿る北騎鉄蹄蹴倒し叱咤鞭を揚げ天祥の傍を過ぐるごと三四皆な天祥の匿るゝを知らず因て辛うして身を全うするを得たり僕老鄒捷は天祥が匿れたる彼方の蘆叢に潜り鐵馬躍り過ぎて鄒捷か足を踏み足は挫かれ血進る總轄呂武と親隨夏仲とは各散して他の所に避け皆な全きを得たり既に過ぐると思へば鉄馬また躍りくゞて來る竹の關み折らるゝ音馬の嘶き人の叫ぶ聲萬竅は一時に怒號したりすはや來れりど

天祥も覺悟を極めたりしが、彼等は唯徒らに過ぎ去りたるのみ、天祥は既に九死の中に一生を得たれども、彼等は林中頗ふる怪し、焚伐にせむと言放ちて去りたれば、心も安からず、亟かに皆々相促して、向の山に入り、他の靈を尋ねて、潛み匿れたり、行くべき路さへ識らざるに、食する糧すらなきなれば、一同途方に暮れて居たりける、夜はまだ全く明けやらず、何れに之くへきもあらず、又何れに之くべき力もなし、流石の天祥も、是に至りては半死半生、人心地もなし、此の時、呂武來りて、北騎は最早遠く灣頭へ還りたりと報したれば、天祥も少しは力を得て、勇を鼓し身を起し、行かむとすれど、足起たず、匍匐して歩まむとすれど、足力なし、如何にして高郵まで落ち延びひかな、而して楊州より伴ひし嚮導三人、馬引三人も、今は或は執へられ、或は逃れて、後に残りし僅か二人も、最早從ふの心なく、促せども行かず、而して三月初六日と云ふ日も、早や西に入相の鐘もろどもに、沈める音を送ること、一杵二杵、聲疎らなり、

路は何處と分たざるに、七日の夕月も名残を西山の端に留めて落ちたり、行くべき路は尙ほ遠し、案内の二人は命に従はず、幸に樵夫五六人の夜半に起き、山より出て來れるあり、天祥之に助を乞ふ、彼其の背負へる簣を卸ろし、天祥を之に載せ、轎の代

をとし、樵夫六人かはるく、之を負ひ、夜の明けぬ間にと、急げば急ぐ程途は長し、從ふもの亦息絶へく、眼を射られたる張慶流血滿面、衣衫皆汚かれ、足を躡まれたる、都擡血まみれたる足を曳きながら行く、相扶け相率いて行けども、途塞行かず、高郵の城西に抵る頃は、東方稍白らみ初めたる時なりき、高郵の制司は關防嚴なり、城に入ることを難し、因て急き去らむと思へども、淮水は前に横はる、舟は得へき術なし、而して夜は明け初めたり、追騎は來るべし、天祥今は詮方なく、陳氏店に宿り、茅もて地を覆ひ、饑をも渴をも忍びて、其のまゝ、大地に伏し倒れ、夜の明け舟の至るを待ちたり、

天も明けたり、舟も來れり、天祥は舟を放つて、淮水に浮び行く、平淮千里、葦々として東望西望、凡て丘墟のみ、滿目空曠、人の心を傷しむ、既に城子河に至る、兩岸の野、積屍滿ち充ちたり、水中また流尸算なく、舟の舳に觸れ、舳に觸れ、臭穢當るべからず、上下幾んど四里間斷なし、舟夫指して是れ戰場なりと云ふ、

曉發高沙、一航平沙漠、水茫茫、舟人爲指荒煙岸、南北今年幾戰場、

去る二月六日の事なりき、元の奉使柳岳と洪雷震とが、輜重を載せて北行、此の地を過さりしとき、積家莊の守兵は、其の前を撃ち、高郵の守兵は、其の腰を撃ち、大に之を

破ふり、柳岳は戦死し、洪雷震は擒にせられたり、近來の大捷とぞ聞こゆ。天祥今之を
 經る、四顧聞然、花も咲かず、鳥も啼かず、雲低れ、風腥し、天祥豊に多少の感なからんや、
 たゞ灣頭近く、元軍の營彼れに在り、陸には哨騎出沒し、水には邏船上下するあり、舟
 中の人心安からぬ折柄、舟卒然として中流に柁折れたり、舟人狼狽急ぎ、柁の折れた
 るをつくり、柁を整へて、舟程を急ぎよう／＼に稽家莊に抵るを得たり、時に三月
 初七日なり、半天の月は弦の如く、光さやかに天祥の蓬牕を射る、泊すること良久、去
 つて壽州に向ひ、海陵に泊す、此より將さに通州に向はむとはするなり、而して前程
 尙は三十里、淮上北人の哨船出沒すと稱す、英雄眞是泣窮途。

天祥は泊して海陵に在り、天地を俯仰して、寥々の感に耐へず、徐ろに旅懷を賦して
 曰ふ、

天地雖寬、靡所容長、淮誰是主人、翁江南父老、誰相念、只欠一帆、東海風。
 昨夜分明夢到家、飄飄依舊客天涯、故園門掩東風老、無限杜鵑啼落花。

七日の月もまどかとなりて、また缺け、はや二十夜の月とはなりける、二十夜の月ま
 だ残る曉、天祥は孤舟飄然として海陵を發せり、二十一夜白漕下三里の所に宿す、夜
 五更北騎來るとの報あり、乃ち速かに帆を掛け、直に海安を指す、一文字の水程、二十

三日漸くにして海安に達し、海安より如阜を経て、二十四日竟に通州に達するを得
 たり、此の間天祥路分金應を失ふ、天祥已に通州に抵る、海陵より通州に抵る其の間
 三十里、四日の程、舟常に追騎と相前後し、殆ひと免れざるもの、亦幾たびなるを知ら
 ず、蓋し天祥か鎮江に脱走したるは、二月二十九日指を屈すれば、已に二十五朝夕を
 經たり、元は天祥を喪へり、虎を野に放てり、龍を海に放ちたり、追騎は四方に出てた
 り、八面に探せり、天祥は半死半生、此の嚴密なる偵察眼の下を截りぬけ、辛うじて身
 を全らし、通州まで來りけり、首を回せば、二十五日の間、其の嘗めたりし辛酸、果に幾
 許すや、衣は敝れたり、鞋は敗れたり、骨は瘦せ、顔は蒼く、岸に立つて、斜陽黃き處、天祥
 の形影自ら憐み、覺へず、涙泣然として下る。

第十五 間關と崎嶇と(其六)

(通州より温州に赴く)

天祥已に通州に抵る、守將團練使楊師亮郊に出て迎へ、天祥を郡に館せしめ、衣服飲
 食より以て舟楫に至るまで、凡て師亮自ら之を料理せり。
 仲連義不帝、西秦拔宅迓來住、海濱我亦東、尋烟霧去扶桑、影裏看金輪。

楊子江の一帶流れて海に入る處、是れ東海の濱、通州即ち此の大江の頭、江頭に立つて、東大東洋を望めば、扶桑影裏日輪金の如し、太陽は海の東より躍り出づ、獨り我が君何の處、天祥は將に是より江南に泛ひて二王を尋ねむとするなり、通州を發し、海船に帆桂け、浦風負うて東に馳せ、石港より賣魚灣に出て、北海門より海洋に入る、天祥蓬牖を推して一望すれば、森茫たる蒼海、水天に接するを見る、呼びて曰ふ、極目皆水、水外惟天、大哉觀乎、乃ち一詩を賦す、

水天一色玉空明、便似乘槎上太清、我愛東坡南海句、茲游奇絕冠平生。

見渡す限りは、海海の外は直に天、天と海とは是れ天祥の天地、陸地の上は既に敵國、海洋の上、一葉の舟、獨り是れ宋の一版圖、而して天祥此の版圖に在り、一舟の外はたゞ水、天祥此の水に泛ひて江南を指す、茲の游奇絶真に平生に冠たり、大なる海の天地、天祥一舟に坐して、之を坐斷す、快絶亦道ふべからざるものありしならむ、天祥は北海門より海洋に出て、再び潮に乗つて楊子江の南海門を渡り、蘇州洋に出て、以て直に江南を指さむとするなり、

幾日隨風北海游、回從楊子大江頭、臣心一片磁針石、不指南方不肯休、

海上西に指せば、髣髴の間、一髮の青を看る、是れを金鰲山とて、臺州の境なりとす、日

は斜に金鰲の山脊に落ちて、潮勢急に大濤天を拍ち、一鴻空に横る、夜に入て風雨到り、潮流益悪し、

雨惡風猙、夜色濃、潮頭如屋打孤蓬、漂零行路丹心苦、寥裏一聲何處鴻、

楊子江口に泊し、天明けて蘇州洋に出づ、亂礁危岩、波濤の間に峙立す、風景絶奇なり、天祥記して曰ふ、

至蘇州洋、其間最難得山、僅得蛇山、洋山、大小山、斂山而已、自入瀾東山、漸多、入亂礁洋、青翠萬疊、如畫圖中、在洋中者、或高或低、或大或小、與水相擊、觸奇、惟不可名狀、其在兩傍者、如岸上山、叢山、實則皆在海中、非有畔際、是日風小、浪微、舟行石間、天巧、提出、令人應接不暇、殆神仙國也、孤憤愁絕、中爲之心、廣目明、是行爲不虛云、

天祥詩あり曰ふ、

海山仙子國、邂逅寄孤蓬、萬象書圖裏、千崖玉界中、風搖春浪軟、礁激暮潮雄、雲氣東南密、龍騰上碧空、

礁は危く、こゝに削立、かしこに聳峙、岩は亂れ、右手に敬ち、左手に傾く、千礁萬岩の間に、夕日は斜なり、濤は拍なり、天祥の舟、此の間を過ぎて、東海に入る、賊船此の間に出沒すと聞ゆ、天祥心安からず、礁を遶くり、岩を遶くりて行くこと四五里、また賊船來

るどの報あり、遂に推して望見すれば、舟あり十餘艘、帆を張つて、喚口を馳せ行く、亟かに路を靈巖に取り、之が島陰に匿れたり、舟は岩角を掠めて過ぐ、波激すること

烈しく、舟は通宵動搖甚安からず、夢結ばむ術もなし、
鯨波萬里送歸舟、倏忽驚心欲白頭、何處結衣操劍戟、同時黃帽理兜鍪、人間風雨真成夢、夜半江山總是愁、雁蕩雙峰片雲隔、明朝躡屩作清游。

曉深く立つ霧を推し分け、舟は台州の岸に着く、海舟を棄て、岸に入り、台州に入り、張氏の家に至る、張氏堂を聞いて、子弟を教化す、堂扁して、綠漪と曰ふ、天祥宿してこゝに在り、

義方堂上看窓戶、翠玲瓏、硯裏雲、擅月席、間淇水、風清聲隨地、到直節、與天通、庭玉森如笋、千霄雨露功。

四明天台の間、山又山、天祥展轉して此の間を経、四月に入り、此れより温州に向はむとす。

去年傷北使、今日嘆南馳、雲濕山如動、天低雨欲垂、征夫行未已、游子去何之、正好王師出、經餽麥熟時。

世途陸孔棘、行役苦期頽、良馬比君子、清風來故人、相看千里月、空負一年春、使有桃源

路、吾當少避秦、草宿披霄露、松餐立晚風、亂離嗟我在、艱苦有誰同、祖述關河志、程嬰社稷功、身謀百年事、宇實浩無窮。

四月八日天祥竟に温州に至る、二王是より先き此の地を経たり、天祥こゝに始めて二王の福安に赴かれ、大元帥府を福州に建てさせられたるを聞けり、

第十六 福建の朝廷

臨安の朝廷は既に降りぬ、祈請使は北に行きぬ、恭帝は北に送られて燕の開平府に着し給ひぬ、府は燕京の北三十里に在り、元は是に於て帝を降し封して、瀛國公となす、此の時五月なり、天祥は既に鎮江より逃れ、通州より江海に泛びて浙東に入り、温州に至る、而して此の歳正月を以て、嚮きに海に航して南向し給へる、皇兄益玉壘と皇弟廣王昺とは、錫首南を指し、海道より温州を経て蘇劉義陸秀夫の來り會するに遇ひ、此の時既に福州に至り給ふ、陳宜中と張世傑と亦海舟を以て福州に至り、謝大后の手詔を宜し、廣王を以て天下都元帥となし、益王を以て副元帥となし、府を福安に開き、諸路の忠義を召さる、天台四明より南に向ひたる文天祥四月の下句を以て

漸く温州に抵り、こゝに二王の福安に在ますと聞き、書を奉して勸進せむとし、報國の策一決して、大に再舉を計る。舊客張汴と鄒瀨と及部曲朱華等、皆な閩より來つて天祥を迎ふ。

景炎元年五月朔、陳宜中、陸秀夫、張世傑等、德裕帝燕に在るを以て、共に益王を擁立して、帝となし、位に福安に即き給ふ。是を端宗皇帝となす。而して廣王昀を封して衛王となす。天祥は方さに觀文殿學士侍講を以て召されて行在に赴む。二十六月、天祥通議大夫、右丞相、樞密使、都督諸路軍馬を授けらる。制詞に曰はく、

帝王之立中國、惟修政所以攘夷、輔相之重朝廷、惟用儒所以無敵。朕作其即位、圖厥成功。介臣不二心、歷險夷而一致。咨汝宅百揆、賴文武之全才。亟歸右揆之班、并授元戎之柄。肆敷大號、專告群工。具官某、骨鯁魁落之英、股肱忠力之佐。仁不憂勇、不懼坎維心之享。國忘家、公忘私、蹇匪躬之故、適裔庸之猶。夏率義旅、以勤王、慷慨施給、鐘之資、豪傑雷動、感激灑登舟之淚、忠赤天知、雖成敗、利鈍逆視之、未能然、險阻艱難、備嘗之、已熟、獨簡慈元之愛、爰升次輔之聯、方單騎以行、驚破夷虜之膽、及免胄而大慰國人之心、天地之所扶持、鬼神亦爲感泣。今職方雖非周邦之舊、而關輔未忘漢室之思、伊欲闡鞏轂而追三宮、復鍾簫而安九廟、非內治、飭何以實元氣、非國威、振何以折遐衝、披荆棘於靈武之

初、予未知濟、收桑榆於澗池之後、事尙可爲思。昔元勳有如臣浚、在思陵已登於亞相、更孝廟乃復於舊班。武同今日之中興、罔俾前修之專美。况同列崇、畢陶之選、而初政、俟公且之來。庸再乘於國鈞、仍惠長於樞宥、優督府、擢戈之錫、峻文階、黃黻之除、申拓賦會、式隆寵數。於戲春秋、以歸季子爲喜。朕方徇於私情、晉人謂見夷、吾何憂爾。共扶於輿、運尙堅忠孝。大布公忱、迄圖社稷之安。茂紀山河之績、其祗予命、永弼于彝。

陳宜中左丞相にして、張世傑少保たり。天祥二人と意を異にするを以て、亟かに右丞相たらず、連りに上章して辭す。因て改めて樞密使、都督諸路軍馬を授けらる。七月四日、福安を發し、十三日南劍に至り、九月、督府を南劍に開らき、兵を募て數千を得たり、遂に郡武軍を復す。

十月、天祥師を帥ひて汀州に次す。興化軍の通判張日中等來り會す。時に贛州の寇勢方さに猖獗なり、閩廣の二路、之れが殺戮を受け、殘酷道ふべからず。故に日中等、天祥が督府を開いて勤王すると聞くや、直ちに兵を起こして來り應ぜしなり。天祥因りて趙時賞、張日中及び趙孟潔を遣はし、一軍を將ひて贛に趨ひき。寧都を取らしめ、吳浚を遣はし、一軍を將ひて、寧都を取らしめ、吳浚進ひて瑞金に屯す。劉洙、蕭明哲、陳子敬皆江西より兵を起して來り會す。鄒瀨贛に在り、元人と寧都に戦うて敗績し、武崗

の羅開禮亦兵を起して永豊縣を復せしむし、戦利あらずして死す、天祥爲めに服を製して哭す、十一月元の阿剌罕、董文炳建寧府に入り、進んで福州を侵す、宜中、世傑是に於て帝及衛王、楊太后等を奉じて、海に航し潮州より廣州に至り、富陽に趨き、謝女峽に遷る、福安陥る、

景炎二年丁丑正月、阿剌罕進んで汀州に入る、天祥城に據つて固守、敵を拒がむと欲すれども、汀守黃去疾は車駕海に航すと聞き、早く郡兵を擁して異志あり、天祥乃ち漳州に奔り、龍巖縣に次す、入衛せむと謀れども、道阻つて通ぜず、暫く次して此に在り、時賞孟滌軍を遣し、天祥に中途に追ひ及ぶ、而して吳浚は戦敗れて元に降り、因て潭に來り、天祥に降を説く、人心騷然、天祥乃ち責むるに大義を以てし、之を誅す、人心始めて定る、二月天祥進んで梅州を復し、始めて母弟妻子と相見る、四月二大將の跋扈するもの、都統錢漢英、王福を斬り、鼓に響りて、江西に出て、府を會昌縣に開く、趙時賞、張日中の兵皆之に會す、五月張世傑潮州を復す、六月天祥元軍を零都に破り、遂に吳國縣に次す、潭州衡山縣の趙潘等兵を起し、岳下の張玘亦兵を邵武の間に起し、數縣に跨つて、勢太振ふ、撫州の何時兵を舉げて又來り應ず、分軍、武寧、建昌三縣の豪傑、皆使を遣はし、天祥の軍門に詣て、約束を受く、

七月督謀張汴、監軍趙時賞、孟滌等を遣はして、吉贛の諸縣を復せしむ、諸軍進んで贛城を圍む、此の時張世傑既に潮州を復したるを以て、進んで泉州を圍む、克たす、帝の舟因りて湖陽より遷りて潮州の淺灣に在り、是より宋の朝廷は、毎に海上に在り、禹城九州亦朝廷を開く、へき地なく、渺茫たる海上、一族の鷓首之を宋國の國都となす、主權の中點は、海上、一草の上に存するに過ぎず、悲むへきかな、

此の月招諭鄒瀘贛諸縣の兵を率ゐて、永豊、吉水を擣き、招撫副使黎遣達吉諸縣の兵を率ゐて、太和を攻む、時に獨り贛州の孤城を以て降らざるのみ、吉八縣其の半を復し、臨洪諸郡の豪傑争うて款を送ること、盧日なし、大江以西、一舉して席卷の勢あり、福建には汀州の僞天子黃從を斬り、淮西には興國軍を復し、黃州には壽昌軍を復し、湖南所在義兵を起す、舉げて計るべからず、四方響の應ずるが如し、孔明嘗て云ふ、あり漢事將成也、天未悔禍、と、旋乾、幹坤の基、經國濟民の本、是に於て乎、將さに立つもの、あらむとするが如し、たゞ所部の兵訓練なく、殆むど戦ふに足らざるを奈何せむ、八月黎貴達正軍千人民兵數千を以て、鍾歩に次す、會北軍來り、民兵驚潰如何どもすべからず、未だ旬日ならずして、張汴、趙時賞、趙孟滌等民兵數萬を率ゐて、贛城に薄まる、元軍百餘騎を以て之を衝く、衆奔潰す、鄒瀘兵數萬を聚めて、永豊の境に在り、而

して元の李恒は既に兵を遣はして嶺を援はしめ、自ら軍を引ゐて天祥を興國に襲ふ。天祥不意に李恒が軍猝かに至る、乃ち兵を引ゐて走て鄒温に、永豊に即く、温が兵先づ潰ゆ。李恒其の弊に乗じ、大軍を驅つて天祥を窮追す。天祥廬陵の方石嶺下に至る、李恒が軍追ひ及ぶ、都統輩信數十卒を率ゐて、短兵接戦、縦横奮撃當るべからず、元軍其の寡を以て衆を拒ぐに、駭き山中伏あるを疑ひ、兵を斂めて敢て進まず、輩信は一の巨石に坐し、餘卒は左右に待す、元軍之を射る、箭雨の如く集る、輩信屹として動かず、北軍愈疑うて進ひ得ず、既にして一村夫を獲て、間道を引かしめ、嶺を踰へて山後に至れば、間として人なし、就て輩信等を視れば、遍身是れ創傷死して未だ仆れざるのみ、此の如くにして元軍太だ稽滯せり、天祥因りて間を以て、遠く奔るを得たり。

天祥走つて空坑に至る、李恒の軍又追ひ及ぶ、張日中奮て力戦す、元兵少く却く、李恒鎧騎を麾いて、横さまに之を撃たしむ、日中身に十餘創を被ひり、尙は手から十餘騎を刃して死す、兵盡く潰ゆ、天祥走る、追騎既に及ぶ、天祥か夫人歐陽氏、男佛生と二女柳小娘、環小娘と及顔孺人、黃孺人等皆な俘虜となる、夫人行々意ふ、路深水險、艇あらば、即ち投して死せむと、而かも一路平坦、竟に元師の所に至れば、已に佛生を失ふ、天

祥走り、趙時賞肩輿に坐して後くる、元人其の風姿偉大なるを見て、名を問ふ、時賞曰く、我が姓は文と、衆以て天祥となし之を擒にす、天祥是に由て、身を挺するを得、母曾夫人長子道生及杜謙、鄒温と騎に乗り逸し去る、幕僚客將皆執へらる、時賞隆興に至り、元軍の營に在り、奮激し罵て屈せず、刑に臨む、劉洙あり、頗る爲めに辨す、時賞死して曰く、死せむのみ、何を必しも然らむと、竟に害せらる、是に於て將佐幕屬の執へられたる者皆死す、而して天祥が妻子眷屬は遠く北の方燕に送り致さる、二子道にして死す、天祥既に逃れ、遂に循州に奔る、散兵頗集る、乃ち南嶺に屯す、

元軍は一方に於て、既に天祥を破ふれり、而して他の一方に於ては、進ひて廣州を陥れ、十一月元の劉深舟師を以て潮州の淺灣を襲ふ、張世傑戦て利あらず、帝の舟を奉じて秀山に走る、陳宜中は占城に之て兵を求む、而して遂に復還らず、是に於て帝を護るもの、獨り陸秀夫と張世傑とあるのみ、十二月帝再び井澳に遷る、颶風作り、帝疾あり、而して元の劉深は復舟師を以て來て井澳を襲ふ、俞如珪執へらる、帝の舟謝女峽に遷る、

景炎三年戊寅正月、張世傑師を遣はして雷山を討ぜしむ、克たず、二月天祥兵を惠州の海豐縣に進め、三月兵を會して麗江浦に次し、通衝を扼し、使を遣はし、海に沿うて

車駕を訪問せしむ此の時元張弘範を以て都元帥となし李恒を副となし師を帥ひて閩廣に入る而して帝の舟は福州に遷れり

四月十六日帝益不豫竟に福州に崩す遣詔して曰く

朕以幼冲之資當艱厄之會方大皇帝之南服勉于行及三宮晉而北遷悲憂欲死以薪之憤飯麥不忘奈何乎人猶托於我涉阨而登廟府次閩而擬行都吾無樂乎爲君天未釋于有宋強膺推戴深抱懼慚而夷虜無厭氣侵甚惡海桴浮避澳岸棲存雖國步之如斯意時機之有待乃季冬之月忽大霧以風舟楫爲之一摧神明拔於既溺事而至此夫復何言矧驚魂之未安奄北哨其已及頼師之武荷天之靈連濱於危以相所往沙洲何所垂問十旬氣候不齊積成今疾念衆心之鞏固忍萬古以遠離藥非不良數不可追惟此一髮千鈞之託幸哉連枝同氣之依倚王其聰明夙成仁孝天賦相從險阻久聚本根可於樞前即皇帝位傳璽綬喪制以日易月內庭不用過哀梓宮母輒置金玉一切務從簡約安便州郡權暫奉陵寢嗚呼窮山極川古所未嘗之患難涼德薄祚我乃有負之臣民尙竭至忠共扶新運故茲詔示想宜知悉

と字々紅涙の凝つて成る所之を誦する誰か亦哀痛悲愴腸断ち魂銷へ涙盡きて血之に繼かざるを得ひや

帝既に崩す群臣多く散じ去らむと欲す陸秀夫曰ふ度宗皇帝の一子尙在り將た焉にか之を置かむ古人一旅一成を以て中興する者あり今百官有司皆具はり士卒數萬天若し宋を絶するを欲せずむば此れ豈に國をなすべからざらむや乃ち衛王局を擁立して位に即かしむ

第十七 崖山の朝廷

四月十七日端宗の崩したる明日を以て衛王昀寶位に福州に登り給ふ時に年僅かに八歳楊太后政を聽き陸秀夫左丞相たり樞密使を兼しひ群衆と改元す詔を下して曰く

朕勉承丕緒祗若令猷皇天付中國民既勤用德聖人居大寶位曰守以仁義茲渺冲適際危急惟我朝之聖神繼統而家法以忠厚傳心滲漉在人億萬年其未泯遭逢多事百六數之相乘先皇帝聰明出乎群倫孝友根於天性痛憤三宮之北未嘗一日而忘遺大投艱難丕應後志除兇刷耻惟懷永圖托於神明辱在草莽上霧下潦之所假薄洪濤巨浪之所震驚謂多難以殷憂宜祈天而永命胡寧予忍而不其延日月爲之無光社稷凍乎如髮攀髯何及繼志其誰以趙孤猶幸僅存查使爲宗禱之主以漢賊不容兩立庶將

復○君○父○之○讐○大○義○攸○關○興○情○交○迫○閔○予○小○子○遭○家○不○造○而○况○斯○今○于○前○事○人○圖○功○攸○終○其
 難○莫○甚○尙○賴○元○勳○宿○將○義○士○忠○臣○合○志○而○并○謀○協○心○而○畢○力○敵○王○所○懷○扞○我○于○難○茲○用○大
 布○寬○恩○率○循○彝○典○于○以○導○迎○和○氣○于○以○迓○續○洪○休○可○大○赦○天○下○於○戲○人○心○有○感○則○必○通○世
 運○無○往○而○不○復○成○誦○雖○幼○有○周○寧○後○於○四○征○少○康○之○興○祀○夏○實○基○於○一○旅○往○來○攸○濟○咸○與
 維○新○

時に朝廷定所なく、海濱に播越して、庶事疎略なり、時節朝會ある毎に陸秀夫獨り儼
 然として、笏を正うして立ち、盛時の治朝の如くす、或は行中に在りながら、悽然とし
 て泣下れば、朝衣を以て涙を拭ふ、衣爲めに盡く濕へり、左右悲慟せざるものなし、首
 相に拜せらるゝに及ひて、張世傑と共に政を乗る、外は軍旅を籌り、内は工役を調し、
 萬機凡て其の手より出づ、忽遽流離の中と雖も、猶ほ日に大學章句を書して、以て勸
 講せり、宋祀の絶えずして今日に至るを得たるは、陸秀夫の力なり、

六月帝の舟桐州より南下して新會の匡山に遷る、天祥麗江浦に在り、帝の即位を聞
 き、此の月入覲す、張世傑の沮格する所となり、進むことを得ず、因りて使を遣はし、表
 を上りて自ら江西に敗るゝの罪を劾す、詔を降して、獎諭せらる、詔に曰く、
 勅○天○祥○才○非○盤○錯○不○足○以○別○利○器○時○非○板○蕩○不○足○以○識○忱○臣○昔○聞○斯○言○乃○見○今○日○卿○早○以

魁○彦○受○知○穆○陵○歷○事○四○朝○始○終○一○節○厲○氣○正○惡○鞠○旅○勤○王○皇○路○已○傾○捐○軀○殉○國○脫○危○機○於
 虎○口○涉○遠○道○於○鯨○波○去○桀○就○湯○可○觀○伊○尹○之○任○歸○周○辟○紂○咸○喜○伯○夷○之○來○方○先○皇○側○席○以
 需○賢○乃○累○疏○請○身○而○督○戰○精○神○鼓○動○意○氣○慷慨○以○句○奴○未○滅○爲○心○棄○家○弗○顧○當○王○事○靡○盬
 之○日○將○母○承○行○忠○孝○兩○全○神○明○對○越○雖○成○敗○利○鈍○非○能○逆○暗○而○險○阻○艱○難○亦○既○備○嘗○如○精
 鋼○之○金○百○鍊○而○彌○勁○如○朝○宗○之○水○萬○折○而○必○東○尙○遲○赤○烏○之○歸○已○抱○烏○號○之○痛○朕○勉○當○繼
 紹○未○有○知○思○政○茲○圖○任○舊○人○克○數○多○難○俟○來○候○吏○疊○覽○封○章○巋○然○靈○光○之○固○存○此○殆○造物
 者○陰○相○胡○然○引○咎○益○見○勞○謙○至○如○諗○問○之○勤○備○悉○忱○悃○之○至○然○今○吉○日○既○戒○六○月○于○征○倚
 卿○愛○君○憂○國○之○忠○成○我○刷○耻○除○兇○之○志○緬○懷○眷○俊○深○切○嘆○嘉
 雖○成○敗○利○鈍○非○能○逆○暗○而○險○阻○艱○難○亦○既○備○嘗○如○精○鋼○之○金○百○鍊○而○彌○勁○如○朝○宗○之○水○萬○折
 而○必○東○天○祥○の○志○は○眞○に○精○鋼○の○金○なり○彼○如○何○なる○鐵○槌○と○熱○火○と○に○遇○ふ○も○百○鍊○彌○勁
 なる○なり○天○祥○の○心○は○詢○に○朝○宗○の○水○なり○如○何○なる○巨○石○と○亂○岩○と○に○逢○ふ○も○萬○折○必○東
 する○なり○天○祥○の○志○此○の○如○く○天○祥○の○心○亦○此○の○如○し、
 天祥又奏して

鄒○滙○ 右文殿修撰樞密都承旨江西安撫副使兼同都督府參謀官
 趙○孟○潔○ 遙縣郡團練使左驍衛將軍江西招捕使兼同提刑都督府諮議官

杜○游○ 帶行軍器監廣東招諭副使兼同都督府參謀官

鄒○藥○ 帶大府寺丞同都督府參議官

陳○龍○復○ 帶行兵部廣東招諭司使兼同都督府參議官

章○從○範○ 帶行開門祇候同都督府計議官

丘○夢○雷○林○琦○葛○鐘○

帶行架閣同都督府幹辦公事

朱○文○翁○ 同都督府准備差遣

各除せられむことを乞ふ旨あり特に奏に依て除せらる。天祥又奏す、潮循梅三郡並

に已に之を取る、乞ふ

陳○懿○ 右驍衛將軍知潮州兼管內安撫使

張○順○ 帶行環衛官權知循州

李○英○俊○ 帶行開門祇候差梅州通判權州事

各拜除の旨あらむことをと旨あり特に奏に依て除せらる。而して天祥の弟文璧は既に五月二十五日を以て、權戶部侍郎廣東總領兼知惠州に除せられ、今又次弟文璋は帶行大理寺丞知寧武州に除せらる。是に於て天祥軍を移して入朝せむことを乞

ふ優詔ありて許さず。天祥又廣州に入らむと欲す。然るに凌震の王道夫始めて廣州を復し、自ら恣にせるか故に、天祥の望重きを憚り、陽には舟を遣はして、天祥を迎へなから、中道にして散回せしむ。天祥因りて廣州に入るを果たさず。蓋し去冬陳宜中か占城に通れてより、世傑樞密副使右丞相を以て、日に宜中を迎へむとし、宜中朝に還るを辭となし、勤めて天祥の入朝を沮格す。天祥入らば必らず樞密副使右丞相たるへければなり。且諸大將皆嘗て宜中の超擢を受けたるもの、夙に其の寛縦を樂しめり。随つて天祥の英氣豪邁なる、一旦朝に在らば、必ず副貳を以て節制を受けざるを得ず。是れ彼等の大に不便として忌む所宜へなり。天祥を沮格して入朝せしめざるや。

八月天祥少保信國公を封ぜられ、母曾氏は齊魏國夫人に封ぜられ、天祥が都督府の官屬各轉し、更に官舎を給して、軍を犒はしむ。而かも天祥の入朝は許されざるなり。天祥竊かに局量褊小の徒相結ひて私を計り、亦責任を知らざるを憤り、書を陸秀夫に抵す。中に曰ふあり、

天子冲幼、宰相遁荒、制詔勅令出諸公之口、豈得不恤軍士以游詞相拒。

と、秀夫其の言の剴切なるを知る、而かも奈何ともする能はず、書を得て太息亦答う

る所を知らず、時に天祥の督府大に疫す、軍中死するもの數百、天祥亦數病む、九月六日母曾夫人没す、旨あり、使を遣はして宣祭せしむ、十月長子道生復た亡す、是に至て天祥の家屬俱に盡く。

此の月、天祥が嘗て奏して知潮州たらしめたる陳懿を討ず、陳懿兄弟五人、號して五虎となす、本は劇盜なり、今は潮州に知たり、彼潮陽に據て數叛附し、人其の慮に苦しむ、彼又督府の節制を聽かず、天祥因つて其の罪を聲らして之を討ず、懿山寨に走る、潮の士民府を潮に移さむことを請ふ、十一月天祥乃ち進んで潮州に入り、潮陽に屯す、若し夫れ天祥をして凶を殲し逆を攻め、以て天討を正うするに於て、假すに歲月を以てし、潮州の民に因り、山海の險を沮て、兵を増し糧を貯へ、以て中興の根本を立てしめは、潮州の一團亦宋の莒と即墨たるに相違なかりしに、惜哉、天祥未だ之を以て立脚の地となすに及ばずして、早く北軍の襲ふ所となり、終に此の如きを得ざりしことを、

かくて陳懿は既に山寨に走り、天祥は府を潮陽に移せり、鄒淵、劉子浚、皆師を集めて之に會す、因て進んで盜陳懿、劉興を討す、劉興亦潮の宿寇にして、叛服常ならず、數郡に據て跋扈し、殺戮虐掠尤も慘を極む、天祥進んで之を撃ち破ぶり、遂に之を誅す、陳

懿は遁れて山寨を守り、重賄を挾むで元帥張弘範の兵を導て、潮陽を攻めしむ、十二月十五日、元軍明秀より步騎水陸並び進む、事不意に出づ、天祥報を得て循の南嶺に入り、險に柵して自ら固うす、二十日、弘範水陸の兵を合して奄ひ至る、天祥力支へず、引ひて山谷に避け、南嶺に走らむとす、行くこと數日、元の追騎疾く天祥を追ふ、天祥方さに五坡嶺に在り、虎皮の胡床に坐して、客と飯す、陳懿、元帥張弘正を導き、潛かに舟を海岸に具して濟らしむ、因て輕騎直ちに天祥の督帳を指すを得たり、鐵騎馳突して帳を蹴て入る、事倉卒に出て、軍早く潰ゆ、天祥終に執へらる、

天祥は復た執へられたり、死を鋒鏑に求むるも得べからず、乃ち腦子を服す、未だ殊せず、冷水を得ば必死すと聞く、天祥詐つて監者に告ぐるに、渴甚しきを以てす、因て水を掬して飲む、已にして乃ち暴下して竟に死せず、鄒淵は自刎して未だ絶せず、衆扶けて南嶺に入り死す、劉子浚、陳龍復、蕭明哲、蕭資、張鏗、熊桂、吳希輿、陳子全俱に死す、杜游執へらる、憂を以て死す、惟趙孟滌通る、諸軍皆潰ゆ、かくて天祥は送致せられて張弘正を和平に見る、大に罵て死を求む、越へて七日、潮陽に至り、踴躍して劍に就て死せむことを請ふ、弘範必す禮を以て天祥と相見むと欲す、左右之に拜を命す、天祥曰く、吾拜する能はず、吾嘗て伯顔阿朮を見るに、惟長揖せしのみと、左右曰く、奈何そ

拜せざる天祥曰く吾能く死するも拜する能はずと日且つ及ならむとす弘範其の強うる能はざるを度り即曰く伯顔を阜亭に見たるるとき吾實に傍に在り客として見るへし殺すを得ずと遂に客禮を以て長揖相見る時に十二月二十七日なり此の月端宗を崖山に葬れり

祥興二年己卯正月二日弘範天祥を騙つて舟中に置き自ら従はしめ六日潮陽を登し八日宮富場を過ぎ十三日大軍崖山を攻む張世傑力戦して禦く弘範之を奈何ともするなし時に世傑の甥韓元師の中に在り弘範三たび韓をして宋の師に至らしめ世傑を招く世傑従はずして曰く吾降れば生き且富貴なることを知るたゞ義移すへからざるのみと因りて古の忠臣を屢敷して答ふ弘範已むを得ず天祥に逼りて書を爲くりて世傑を招かしむ天祥曰く已に父母を救ふ能はず又人に教へて父母に叛かしむ可ならむ乎と愈亦急に索む天祥乃ち過零丁洋の一詩を書して之を與ふ其の詩に云く

辛苦遭逢起一經、千戈落落四周星、山河破碎風拋絮、身世飄搖雨打萍、惶恐頭說皇恐、零丁洋裏歎零丁、人生自古誰無死、留取丹心照汗青。

と弘範笑うて之を置き此より守護益謹めり然れども禮貌は益隆なり弘範復た人

を遣はし崖山の士民に語らしめて曰く汝が陳丞相已に去り文丞相已に執へらる汝何をなさむと欲すると士民亦一の叛する者なし弘範又舟師を以て海口に據る宋の師樵汲の道絶へ兵士乾糧を茹ふ十餘日にして大に渴す乃ち下て海水を掬し之を飲む水鹹し飲めば即ち嘔泄す兵士大に困む世傑蘇劉義方興等を帥ゐて旦夕大に戦ふ弘範太た苦しむ時に元李恒廣州より師を以て會す弘範恒に命じて崖山の北面を守らしむ

二月戊寅の朔世傑の將陳寶叛して元に降る二日都統張達夜元の師を襲うて敗れ還る元人進むて世傑の舟に薄まる六日弘範其の軍を四分し自ら一軍を將ゆ相去ること里許諸將に令して曰く宋の舟西の方崖山に賊す潮至らば必らず東に通れむ急に之を攻て去るを得せしむる勿れ吾樂作るを聞かば乃ち戦へ令に違ふものは斬らむと先づ北面の一軍を麾ねき早潮に乗して戦はしむ世傑之を敗る李恒等潮に順うて師を退く午潮上はる元の師樂作る鼓吹の音波間に浮ふ宋の師以て且く懈るとなし備を設けず弘範舟師を以て其の前を犯す南師之に繼ぐ宋の師南北より一時に敵を受く而して兵士皆疲れ復た戦ふ能はず俄かに一舟の檣旗仆るあり諸舟の檣旗隨うて皆仆る世傑事の去るを知り乃ち精兵を抽て中軍に入る諸

軍皆潰ゆ、元の師乃ち宋の中軍に薄まる、會日暮る風雨晦冥にして昏霧四に塞り咫尺も辨せず、世傑乃ち蘇劉義と維を斷ち、十六舟を以て港を奪うて去る、陸秀夫帝の舟を走らしむ、帝の舟大なり、且諸舟環結す、出走るを得ず、進ひて大妃に請うて、曰く、臨安母子已に辱めらる、殿下宜しく再ひ辱しめらるへからずと、言訖りて先づ其の妻孥を驅つて海に沈ましめ、冠裳して祥興帝を抱き、海に赴きて死す、太妃宮人已下皆之に従ふ、將士官屬皆海を蹈ひ、越て七日屍海上に浮ぶ者十餘萬人、因て帝の屍及詔書の寶を得たり、天祥元師の舟中に在り、之を目撃して、悲憤に勝へず、南向慟哭、爲に長歌を爲りて、之を哀しむて曰く、

長○平○一○坑○四○十○萬○秦○人○歎○欣○趙○人○怨○大○風○揚○沙○水○不○流○爲○楚○者○樂○爲○漢○愁○兵○家○勝○負○常○不○一○紛○紛○干○戈○何○時○畢○必○有○天○吏○將○明○威○不○嗜○殺○人○能○一○之○我○生○之○初○尙○無○疾○我○生○之○後○遭○陽○九○厥○角○稽○首○併○二○州○正○氣○掃○地○山○河○羞○身○爲○大○臣○義○當○死○城○下○師○盟○愧○牛○耳○間○關○歸○國○洗○日○光○白○麻○重○宣○不○敢○當○出○師○三○年○勞○且○苦○咫○尺○長○安○不○得○觀○非○無○虜○虎○士○如○林○一○日○不○幸○爲○人○擒○樓○船○千○艘○下○天○角○兩○雄○相○遭○爭○奮○搏○古○來○何○代○無○戰○爭○未○有○鋒○蝟○交○滄○溟○遊○兵○日○來○復○日○往○相○持○一○月○爲○蟻○蚌○南○人○志○欲○扶○崑○崙○北○人○氣○欲○黃○河○吞○一○朝○天○昏○風○雨○惡○炮○火○雷○飛○箭○星○落○誰○雌○誰○雄○頃○刻○分○流○屍○漂○血○洋○水

渾「昨朝南船滿崖海、今朝只有北船在。」昨夜兩邊桴鼓鳴、今朝船船鼾睡聲。「北兵去家八千里、椎牛灑酒人人喜。」惟有孤臣雨淚垂、寔寔不敢向人啼。「六龍杳靄知何處、大海茫茫隔煙霧。」我欲借劍斬佞臣、黃金橫帶爲何人。

天祥又六噫歌を作くる、字皆血、句皆淚、血と涙と、人をして殆むと誦する能はざらしむ曰く、

颶○風○起○兮○海○水○飛○噫○文○武○盡○兮○火○德○微○噫○鷹○鶴○相○擊○兮○靡○所○施○噫○鴻○鶴○欲○舉○兮○將○安○歸○噫○權○歌○中○流○兮○任○所○之○噫○獨○抱○春○秋○兮○莫○我○知○噫

一歌を作る毎に、情益激し、一詩を賦する毎に、心益切なり、天祥又哭崖山一篇を賦す、寶藏如山、席六宗、樓船千疊、水晶宮、吳兒進退尋常事、漢氏存亡頃刻中、諸老丹心付流水、孤臣血淚洒南風、早來朝市今何處、始悟人間萬法空。

宋の祥興二年は恰かも我邦弘安二年に當る、宋の崖山に亡ひたる歳は、即ち時宗が第二回の元使周福等を斬りし歳なり、宋亡ひて二年即ち弘安の四年は、元の大擧して入寇し、悉く筑紫に鑿にせられたるの年なり、其の明年即ち弘安の五年は、天祥が刑せられたるの年にして、又我が僧日蓮の寂せし年なり、かくて崖山は潰へたり、已にして世傑復崖山に還り、兵を収め、揚太后に遇ふ、率して

以て趙氏の後を求め、復之を立てむと欲す。楊太后始めて帝の崩するを聞き、膺を撫し大に働して曰く、我死を忍びて、艱關此に至るは、正さに趙氏一塊肉の爲めのみ、今望なしと、遂に海に赴ひて死す。世傑之を海濱に葬る、而して世傑は此より將さに安南に趨らむとし、平章山下に至る、颶風大に作るに遇ふ、舟人岸に懸せむとす、世傑かく、以てなすことなかれと、香を焚き天を仰ぎ呼て曰く、我趙氏の爲にする、亦已に至れり、一君亡びて、復一君を立て、今又亡ふ、我未だ死せざるは、庶幾くは敵兵退かば、別に趙氏を立て、祀を存せむとするのみ、今此の如し、豈に天意か、若し天我が復趙の祀を存するを欲せずは、則ち大風吾が舟を覆せと、舟遂に覆り世傑溺る、有宋三百年の宗廟社稷、是に至つて全く亡ふ、哀哉痛哉。

崖山とし曰へば、世或は其の崖州なるを疑ふ、崖州は廣西府の南東海洋中なる瓊州島の東端に在り、崖山に一敗せる張世傑が安南に趨りて再舉を圖らむとせしに見るも、崖山は即ち瓊州なるべしとの疑惑は第一に人の心上に浮ぶべきものなり、然れども是れ固より大なる誤謬にして、此の如き疑惑の起り易き、其の地位果して何處に在るかを明確にすべきは、尤も必要の事ならずむばあらず。

廣州府の西南二十里餘新會縣あり、其の南十里餘の海中、即ち是れ崖山の在る所、讀史方輿卷一百一廣東二第十九葉に曰く、

「崖山」縣新會縣南百里大海中、延袤八十餘里、高四十二丈、與奇石山相對立、如兩扉、潮沙所出入也、亦曰崖門山、故有鎮戍、宋末帝昀立於嶺州、張世傑以崖山爲天險、可扼以自固、乃奉帝移駐於此、云々

志云、崖山對峙有湯瓶嘴山、以形名、最高峻、文禽異木多出其中、又南有雙壁山、高百餘丈、南十里、曰九曲山、云々

然らば崖山は固より瓊州にはあらずして、新會縣の南なる海中十里に位地せる、方九里餘の面積を有せる一島嶼なり、其の天險扼して、以て自ら固うすべきは、周邊に海礁亂立するにても知るべし、然れども宋の朝廷をして此の如き一孤島に移さしむるに至ては、王者の規模に於て固より不可なる所、宋の末路は其の版圖を收縮して自ら小にし、竟に海上の温どなりしに在り、哀哉。

宋の咸淳は我が文永に當る、此の間元使の我が邦に来るもの、既に幾回なるを知らず、而して宋の亡民にして、我に歸化したるものも亦少からざりしなり、鎌倉五山の開基、特に圓覺の開山無學禪師の如き、即ち宋の亡民なりしなり、彼一緇衣の身を以

て、萬里の波濤を横断し、來つて我に亂を避け、我が當局の顧問として、大陸の形勢を指示し、我が士大夫の師範として、國の士氣を凝結せしめ、乃ち之を一大奮戦に發して、元師を一撃の下に殲さしむ

元主大發舟師凡十餘萬人、侵大宰府、當此時北條時宗佩甲冑、入無學師室、白師曰、弟子即今大事到來、師曰、怎麼生向前、時宗振威一喝、師曰、真獅子兒、能獅子吼、又家臣長崎次郎左衛門者來參、師曰、直振吹毛向前、必莫回首、次郎左首肯跨馬去、故今北洪川

此の如くにして、一大英斷、蒙古の大軍も筑紫の海の藻屑と消へ、亦我が邊を窺ふを得ざるに至り、詩人山陽をして全幅の力を揮て「蒙古來」と歌はしむるの痛絶快絶なる歴史を我に與へたり、

筑海颶氣連天、黑蔽海而來者、何賊、蒙古來、來自北、東西次第、期吞食、嚇得趙家老寡婦、持此來、擬男兒、國相模太郎、膽如甕、防海將士、人各力、蒙古來、吾不怖、吾怖、關東、令如山、直前、斫賊不許、願倒吾橋、登虜艦、擒虜將、吾軍賊、可恨、東風一驅、附大濤、不使、豷血盡膏、日本刀、

彼宋の一亡民、我が武に頼つて其の祖國の讐を報ず、張良韓に酬ゆるの志、此の如きのみ、之を陸秀夫、張世傑輩のなす所に比せば、堂々たる宋朝の大臣と雖も、其のなす

所殆むど兒戲の如し、天祥をして、若し當時宋の一亡民たる一浮屠が我が日本の威武を籍りて、祖國の爲めに讐を報じたるを知らしめたらむには、彼亦當さに爲めに愧死すべかりし、且又天祥をして、當時若し一葦海水を隔て、我か彼の擧あるを知らしめば、彼亦掌を拊て其の絶快を叫斷せしなるべし、惜哉、當時天祥限りなく、盡るなきの恨を抱いて、空しく燕獄に在り、亦我が此の大快擧を知るに由なかりき、

崖山の海は通ず、筑紫の浦、祥興帝の沈める水は同じく、元師百萬を溺らしめたる水なり、けり、讀者は須らく、元師の邊海に亡びたるは、趙宋の崖山に亡びたる、後二年にして、天祥が燕市に刑せられたる前一年なることを忘るべからず、

第十八 北行の丞相 (上)

崖山の朝廷は既に海波蒼茫の底に没せり、宋の宗廟社稷今や乃ち亡く、當年衣冠林立の士亦一人なし、獨り天祥宋の一遺臣として、又宋の一亡民として存する、あるのみ、天祥の外に宋なく、宋獨り天祥あり、首を擧げて四望す、天地皆な敵國、乾坤悉く敵地、此の敵國たる天地、此の敵地たる乾坤、天祥五尺の軀骸、即ち是れ宋最後の莖、即ち

墨となり天祥の身は宋の城天祥の骨は宋の壁天祥の血は宋の濠天祥の涙は宋の池天祥此の城に據り此の壁に嬰り此の濠を遶らし此の池を帯び固く守つて屈せず然かも屈せずと雖ども茫茫たる天地落落たる乾坤宋の遺臣宋の遺民獨り天祥あるのみとせば亡國の孤臣たる天祥の衷情其れ將た如何や天祥俯仰の間覺はず紅涙落つること一掬二掬血滴々
 不能變姓名卒於吳又不能髡鉗奴於魯遠引不如四皓翁高蹈不如仲連父冥鴻墮贈
 繳長鯨陷網罟

と賦し來つて涙縦横亦た草する能はず終に
 易簧不心如曾參結纓猶當效子路

と吟じて僅かに其の志を言ふ天祥の孤忠亦憐ひに堪へたり天祥涙を墨にし又吟じて曰ふ

竭來南海上人死亂如麻腥浪拍心碎
 風吹鬢華一山還一水無國亦無家
 男子千年志吾生未有涯

紳し來り紳し去り涙千行萬行乃ち涙を揮つて更に

海淵龍深蟄山空鳥雜鳴花隨春共去雲與水俱行壯士千年志征夫萬里程夜涼看星

斗何處是機槍

と吟す悲歌慷慨是に至つて極まる

三月十三日張弘範師を率ゐて還て廣州に至る天祥日夜殺さるゝの命あらむことを踰望す弘範は却て天祥を遇すること益厚く盡く天祥か嘗て亡へる所の妾婢僕役を取つて天祥に奉す天祥却て心を苦しむ

十四日弘範海上に置酒し大に諸將を會す天祥坐に在り因て酒を舉げて從容として天祥に謂うて曰く國は亡べり忠孝の事盡きたり丞相心を改め慮を易へ大宋に事へし者を以て大元に事は、大元の賢相たるもの丞相に非ずして誰ぞと天祥流涕して曰く國亡ふれども救ふ能はず人臣たるもの死するも餘罪あり況ひや取へて其の死を逃れて其の心を貳にするをやと弘範又言ふ國は亡べり身を殺して忠孝をなすも誰れか復た之を史に書するものぞと天祥曰く商亡びて夷齊は周の粟を食はず亦自ら其心を盡くすのみ豈に書せらるゝと書せられざるを論せむやと弘範之れが爲めに容を改む副元帥龐鈔兒赤起つて酒を行ふ天祥禮をなさず龐怒つて天祥を罵る天祥も亦大に罵つて速かに死せむと請ふ是の日弘範直に天祥の屈すへからざる状と之を殺さゝる所以とを具して燕京に奏せしむ四月十一日

使臣還りて世祖か誰家か忠臣なからむやとの嘆ありしこと、及び善く天祥を視之をして朝に來らしめよとの旨ありし由を報す、天祥は此より北に送られむとするなり、天祥曰く、予をして兵に死し刑に死せしめは已む、而るに萬里行役の迹るゝを得さるとは命なるかなど、

弘範乃ち都鎮撫石嵩を遣はして、謹しむて天祥の北行を護せしめ、且崖山獲る所宋の禮部郎官鄧光薦と與に俱にせしむ、二十二日、天祥光薦と俱に廣州を發す、英德に道して越王臺を過ぎ、南華山を経て、虎頭山下より贛州に入り、五月二十五日、南安軍に至る、江西は天祥の故國なるを以て、石嵩其の篡奪せられむことを慮り、始めて天祥の頸を繋ぎ足を繋して之を船に鑰す、天祥即ち粒を絶つて食せず、贛江に浴うて北に下る、天祥日を計ふるに、廬陵に至る頃、方さに死せむ、以て首丘の義を全うすべしと、乃ち告祖廟文及別諸友詩を爲くる、

告先大師墓文

維已卯五月朔、越二十有六日、孝子某自嶺被執、至南安軍、謹具香幣、遣人馳告于先太師革齋先生墓下、嗚呼、人誰不爲臣、而我欲盡忠、不得爲忠、人誰不爲子、而我欲盡孝、不得爲孝、天乎、使我至此極邪、始我起兵、赴難勤王、仲弟將家、遁于南荒、宗廟不守、遷

我異疆、大臣之誼、國亡家亡、靈武師興、解后歸國、再相出督、身荷憂責、江南之役、義聲四克、爲親拜墓、以剪荆棘、大勳垂集、一跌崎嶇、妻妾子女、六人爲俘、收拾散亡、息于海隅、庶幾奮厲、以爲後圖、惡運推遷、天所殞弃、有母之喪、尋失嫡子、哭泣未乾、兵臨其壘、倉皇之間、二女夭逝、剪爲囚虜、形影獨存、仰藥不濟、竟北其轅、係頸繫足、過我里門、望墓相從、恨不九原、爰指松楸、有言若誓、繼令支子、實典祀事、有姪曰陞、我身是嗣、與言及此、血淚如雨、嗚呼、自古危亂之世、忠臣義士、孝子慈孫、其事之不能兩全也、久矣、我生不辰、罹此百凶、求仁得仁、抑又何怨、幽明死生、一理也、父子祖孫、一氣也、冥漠有知、尙哀鑒之、

興言及此、血淚如雨、と曰ふ、讀むて此に到れば、覺はず筆を投し、几に俯して泣く、我生不辰、罹此百凶、求仁得仁、抑又何怨、天祥の志向に此の如し、天祥死して固より怨なし、革齋地下亦怨なかるへし、此の如きの子あり、以て笑を含ひて長へに眠すへきなり、天祥又別里中故反詩あり、青山重回、首風雨暗啼猿、楊柳溪頭釣梅花、石上尊故人無復見、烈士尙誰言、長有歸來夢、衣冠滿故園、

天祥此の文と此の詩とを爲くり、五月二十六日、黄金市より孫禮を遣はし、岬に登つ

て馳歸つて吉州に到らしめ六月二日吉州に在つて天祥の到るを俟つて復命せしむ天祥謂らく既に心事を以て諸を幽明に白うす吉州に到る頃即ち瞑目長逝笑を合ひて地に入らむと舟行風駛萬安縣を過ぎ泰和より吉州に入り孫禮に約する前一日即ち六月朔廬陵に達す天祥食を絶つこと既に六日而かも死せず孫禮も亦到らず蒼然亭に憩ふ

風打船頭繫夕陽亭前老子舊胡床青牛過去關山動白鶴歸來城郭荒忠節風流落塵土英雄遺恨滿滄浪故園水月應無恙江上新松幾許長

天祥は故園の山河を俯仰して過くるなり吉州の山吉州の水天祥此の間に及びて將に餓へ死せむとせしに斷食も以て死するに足らず孫禮も來らず舟竟に吉州を發す故園の山は天祥を送りて漸く遠く故園の水は天祥を泛へて尙長し

已卯六月初一日蒼然亭下楚囚立山河顛倒紛雨泣已亥七夕此何夕煌煌斗牛劍光濕戈疑雲雷電擊三百餘年火爲德須與風雨天地黑皇綱解紐地維折妾媵偷生自爲賊英雄扼腕怒髮赤貫日血忠死窮北首陽風流落南國正氣未亡人未息青原萬丈光赫赫大江東去日夜白

孫禮は如何にせしかと案し居る中最早豊城近くなれりこゝに忽ち孫禮か他舟に

在るを見たり天祥始めて嚮きに孫禮か往く能はさりしを知れり彼の文と彼の詩とは竟に何の告ぐる所も示す所もなかりしなり天祥之か爲めに痛哭流涕せり明朝に至り孫禮始て豊城に送られ放ち遣られたりと云ふ而かも今や晚し天祥是に至て食せざることを八日而かも死せず私かに念ふ若し廬陵にて死したらむには首丘たるを失はずとするも今や已に吉州を過ぎたり而かも死せず大義を明にせずして身を荒江に委せは誰れか天祥を知るもの少しく自重して以て義に就かむのみと復た飲食すること初の如し天祥曰ふ

昔讀左傳申包胥哭秦庭七日勺飲不入口亦不聞有它乃知餓踏西山非一朝之積也予常服腦子二兩不死絶食八日又不死竟不曉其何如之を本草家に聞く云ふ

宋文天祥買似道皆服腦子求死不得惟塵壘中以熱酒服數握九竅流血而死此非腦子有毒乃熱酒引其辛香散溢經絡氣血沸亂而然爾

乃ち天祥の水を以て腦子を服せしは固より死すへきの理なき所なるも其の八日食せずして死せさりしは將た如何ひや天祥従者七人ありしに或は逃れ或は死し或は逐はれ今僅かに一人を存す劉榮と曰ふ

錦江を下り鄱陽湖に出て、降興府に出て、彭蠡湖より九江を経て、湖口に抵り、此より長江一帯東を指して下る、安慶府より池州魯港を経て、方さに采石を過ぎる、不上蛾媚二十歳重來爲墮山河淚、今人不見虞允文、古人曾有樊若水、長江瀾處平如驛、況此介然衣帶窄、欲從謫仙捉月去、安得然犀照神物。

六月十二日建康府に至り、金陵の驛中に囚へらる、鄧光薦遷されて天慶觀に寓す、天祥留つて金陵に在ること六七旬、

草舍離宮轉夕暉、孤雲飄泊復何依、山河風景元無異、城郭人民半已非、滿地蘆花和我老、舊家燕子傍誰飛、從今別却江南日、化作啼鶯帶血啼。

山河は既に宋の山河にあらず、滿地の蘆花人と俱に老ゆ、城郭は既に宋の城郭にあらず、舊家の燕子誰に傍うて飛ふ、風光眞に人の腸を斷つに足る、既にして節秋に入る、

隻影飄零天一涯、千秋搖落欲何之、朝看帶緩方嫌瘦、夜怯衾單始覺衰、眼裏游從驚死別、夢中兒女慰生離、元朝無限江山在、搔首斜陽獨立時。

斜陽獨立して、六朝限りなきの江山を俯仰す、感如何、秋風衣を吹き、滿身是れ冷なり、天祥又中秋に遇ふ、彼感懷禁する能はず、

不教取骨瘞江邊、驅向胡沙着去鞭、舊奪宮袍空獨步、新浚官飯飽孤眠、客程恰與秋天半、人影何如月倍圓、猶是江南佳麗地、徘徊把酒看蒼天。

第十九 北行の丞相(中)

秋風嫋々として落木蕭々たり、天祥は八月二十四日を以て、金陵を發し、揚子江に泛ひて去る、

賞心亭下路、拍手唱吾歌、樓外梁時塔、城中秦氏何、江山如夢耳、天地奈愁何、回首清溪曲、長江一鴈過。

一葉の舟江の中流に在り、限りなきの前程、大江千萬頃、

葡萄肥汗馬、荆棘冷銅駝、巫峽朝雲濕、洞庭秋水沈、窮愁空突兀、晴淚自滂沱、莫恨吾生悞、江東才俊多。

大江より北に折れ、淮水に入り、二十七日眞州に至る、眞州は天祥か、嚮きに鎮江より脱せしとき、先づ馳せて投せし地たり、

山川如識我、故舊更無人、俯仰干戈跡、往來車馬塵、英雄遺算晚、天地暗愁新、北首燕山路、凄涼夜向晨。

楊州は方に近く、指顧の中に在り、
阮籍臨廣武、杜甫登吹臺、高情發慷慨、前人後人哀、江左遘陽運、銅駝化飛灰、二十四橋
月、楚囚今日來。

其の夕維揚の驛に泊す、

三年別淮水、一夕宿揚州、南極山川古、北風江海秋、昭君愁出塞、王粲怕登樓、千載英雄
淚、如今況楚囚。

當年此の城外に餓えて死せむと欲したる天祥、今日囚縶の身を以て此に泊す、照君
を説く勿れ、王粲を説く勿れ、千載英雄の涙、天祥如今一の楚囚たり、

二十八日邵伯鎮を過く、首を回せは江南の路、青山夕陽斷す、二十九日高郵に宿す、指
を屈すれば三年以前、天祥が此の間に飄泊し、展轉し、開關流離、死地に入りしもの其
れ幾回、追想すれば、たゞ涙の滂沱たるあるのみ、

借問曾游處、高沙第幾山、潛行鷹攫道、直上虎當關、一命虛空裏、三年瞬息間、自憐今死
晚、何復望生還。

三十日高郵を發す、

初出高沙門、輕舫過城樓、一水河曲折、百年此綢繆、北望渺無際、飛鳥翔平曠、寒蕪入荒

落日薄行人、愁行行湖曲、萬頃涵清秋、大風吹檣倒、如盪彭蠡舟、欲寄故鄉淚、使入長
江流、需人為我言、此水通淮頭、前與黃河合、同作滄海瀾、脚躡忽失意、拭淚淚不收、吳會
日已遠、回首重悠悠、馳驅梁趙郊、壯士何離憂、吾道久矣東、陸沈古神州、我今戴南冠、何
異有北投、不能裂肝腦、直氣摩斗牛、但願光岳合、休明復商周、不使殊方魄、終為異物羞、
九月一日淮安に至たる、楚州城門外、白楊吹風、淮河を過き、關石に宿す、北征垂半年、依
々只南土、我為綱常謀、有身不得願、妻兮莫望天、子兮莫望父、天長與地久、此恨極千古、
天祥は妻を思ひ、子を思ひ、展轉反側、夜眠るを得ず、二日淮安を發す、行行重行行、天地
何不寬、煙火無一家、荒草清漫漫、恍如泛滄海、身坐玻璃盤、三日小清江に宿し、四日桃源
に向ふ、

漠々地千里、垂々天四圍、隔溪胡騎過、傍草野鷄飛、風露吹青笠、塵沙薄素衣、吾家白雲
下、都伴北人歸。

桃源縣を過く

清野百年久、中原千里賒、火煙新聚落、山水舊生涯、種麥十畝畝、誅茅千百家、我來行正
倦、何處覓桃花。

秦を避くるの劉、今何の處ぞ、桃花覓むべからず、秦避くへからず、桃花を覓めず、秦を

避けず、而して天祥既に是れ仙、身囚人と雖ども天祥竟に囚人に非ず、英雄回首即神仙、天祥か神仙たる所以、又英雄たる所以、別に其の分あり、必しも桃花を覓めず、又秦を避けず、

五日、高鴈空秋興、寒蟬破曉眠、淡煙白似海、野水碧於天、雀鎮驛を發す、目を舉ぐれば是中原、

中原方萬里、明日是重陽、桑棗人家近、蓬蒿客路長、引弓虛射鴈、失馬爲尋羊、見說今年早、青々麥又秧、

一望唯原野、空曠又山を見ず、六日天外一髮の青を見る、

中原行幾日、今日纔見山、問山在何處、云在徐邳間、邳州山、徐州水、項籍不還、韓信死、誰爭虎鬪不肯止、煙草漫漫青萬里、古來劉季號英雄、樊崇至今已千歲、

邳州に宿す、首を回せば、昨年の秋、天祥麗江浦に督府を置くの時、軍中大に疫し、九月六日を以て、母曾夫人を喪へり、今既に一周年、天祥乃ち詩を賦して、母の小祥を哭す、我有母聖善、鸞飛星一周、去年哭海上、今年哭邳州、遙想仲季間、木主布筵几、我躬已不聞、祀事付支子、使我早淪落、如此終天何、及今畢親喪、於分亦已多、母嘗教我忠、我不違母志、及泉會相見、鬼神共歡喜、

天祥は一囚人として邳州に在り、此の忌辰に逢ふ、弟壁、弟璋、今惠州に在り、靈牌を設けて、香火を供するなるへし、二弟と相知らず、二弟定めて、阿兄を思うて涙を漉くへし、天祥亦二弟を思うて、涙萬行、天祥既に母の教を奉し、忠を盡してこゝに至る、母の教に違はず、天祥固より怨なく、母亦地下怨なかるべし、

七日、徐州に入り、彭城を指す、彭城はもと頂羽の都する所なり、昔漢高義帝の爲めに喪を發し、素服して五諸侯の兵五十六萬を率ゐて、楚を伐つて此に至る、項羽之を聞き、自ら精兵三萬を以て、還つて漢を撃ち、大に漢の軍を睢水の上に破る、死者二十萬人、水之か爲に流れず、漢王を圍むと三匝、會大風西北より起り、木を折り、屋を覆き、沙石を揚て晝晦し、漢王乃ち數十騎と通るゝを得たり、父太公と后呂氏とは捕へられたり、史の載する所此の如し、天祥今楚の故都に到る、項王宮あり、范增塚あり、西の方睢陽城を望み、又巨佛峰を望む、燕子樓何の邊、戲馬臺又何の處、汴水は彼に通し、黃樓此に立つ、山河丘陵、凡て懷古の情を興さしめざるなし、天祥長句を歌ふて曰く、

彭城古官道、日中十馬馳、咫尺不見人、撲面黃塵飛、向來漢王稿、素師美人燕、龍項羽啼、一時混戰四十萬、天昏地黑、雖水涸、乃知大風揚沙、失白晝、自是地利非、天時漢王倉皇、問道西、一兒一女、啼其危、太公呂后去不歸、祖上寧有生還時、未央稱壽太上皇、巍然女

編○帝○中○閑○終○然○富○貴○自○有○命○造○物○顛○倒○真○小○兒○

又彭城行一篇あり、

連○山○四○圍○合○呂○梁○貫○其○中○河○南○大○都○會○故○有○項○王○宮○晉○牧○連○揚○豫○虎○視○北○方○雄○唐○時○燕○子○
樓○風○流○張○建○封○西○望○睢○陽○城○只○與○汴○水○通○大○平○黃○樓○賦○尙○能○想○遺○風○邇○來○百○餘○年○正○朔○歸○
江○東○遺○民○死○欲○盡○莽○然○狐○兔○叢○我○從○南○方○來○停○瞻○撫○遺○蹤○故○河○蕃○潢○潦○荒○城○翳○秋○蓬○淒○涼○
戲○馬○臺○懽○悴○巨○佛○峰○滄○海○變○桑○田○陵○谷○代○不○同○朝○爲○朱○門○貴○暮○作○行○旅○窮○乘○除○信○物○理○感○
慨○繫○所○逢○古○來○賢○達○人○一○醉○萬○虛○空○如○此○獨○醒○何○悲○風○逐○征○鴻○

天祥燕子樓に上り賦して曰ふ

自○別○張○公○子○輝○娟○不○下○樓○遂○令○樓○上○燕○百○歲○稱○風○流○我○游○彭○城○門○來○弔○楚○王○闕○問○樓○在○何○
處○城○東○草○如○雪○蛾○眉○代○不○乏○埋○沒○安○足○論○因○何○張○家○妾○名○與○山○川○存○自○古○皆○有○死○忠○義○長○
不○沒○但○傳○美○人○心○不○說○美○人○色○

九月九日重陽の節に逢ふ天祥乃ち戲馬臺に上る

九○月○初○九○日○客○游○戲○馬○臺○黃○花○弄○朝○露○古○人○化○飛○埃○今○人○哀○後○人○後○人○復○今○哀○世○事○那○可○
及○淚○落○茶○羹○杯○

惠州の二弟高に登り茶羹を挿ひて定めて一人を少くると嘆せし彼等は天祥此の

日此の地に菊を把るを知るや知らずや

今○朝○正○重○九○行○人○意○遲○遲○回○首○戲○馬○臺○野○花○發○葳○蕤○草○埋○茫○塚○雲○見○樊○噲○旗○時○節○正○如○
此○道○路○將○何○之○我○愛○陶○淵○明○甲○子○題○新○詩○白○衣○送○酒○來○把○菊○臥○東○籬○

茶羹を把れば兄弟を憶ひ黃菊を採れば淵明を慕ふ兄弟見るへからず淵明亦學ふ
へからず尙は行旅の人たり此の日彭城を發せり

路山東に轉し入る十日沛縣に至る沛邑即ち是れ漢高の起る所沛歌一篇を賦す

秦○世○失○其○鹿○豐○沛○發○龍○顏○王○侯○與○將○相○不○出○徐○濟○間○當○時○數○公○起○四○海○王○氣○開○至○今○尙○想○
見○虹○光○照○人○寰○我○來○千○載○下○弔○古○淚○如○潛○白○雲○落○荒○草○隱○々○芒○碭○山○黃○河○天○下○雄○南○去○不○
復○還○乃○知○盈○虛○故○天○道○如○循○環○盧○王○舊○封○地○今○日○殺○函○關○

沛邑歌風臺あり憶ふ當年漢高六龍に乗して過ぎり置酒大風歌を作つて

大風起兮雲飛揚威加海内兮歸故郷安得猛士兮守四方

と歌ひたるの跡即ち是れ

十一日固陵城下を過ぐ漢王城は楚王城に對し昔時楚漢紛争の地なり九天雲下垂

一雨作秋色塵埃化泥塗原野轉蕭瑟

固○陵○城○下○兩○龍○爭○不○見○齊○王○來○會○兵○勒○取○河○山○新○分○地○項○王○之○後○到○韓○彭○

山東は齊の地、韓信主たり、彭越尋て王たり、今はたゞ十里一雙嶽、狐兔臥荆棘、あるのみ

十二日、晨炊發魚臺、碎雨飛擊面、團々四野周、冥々萬象變、疑是江南山、煙霧昏不見、秋風は瑟瑟たり、冷氣は烈々たり、蒲柳先已に零みて、松柏獨り凋に後るゝ、あるのみ、此の朝魚臺を發す、途すがら遠遊の一篇を賦す、

黃○河○流○活○々○太○行○高○嶺○々○王○屋○山○以○東○百○泉○山○以○西○鄒○魯○盛○文○獻○燕○趙○多○雄○姿○右○摩○秦○山○碑○左○躡○函○谷○泥○郊○邠○周○公○曲○阜○拜○宜○尼○或○登○廣○武○歎○或○上○北○邙○悲○平○生○幾○兩○履○汗○漫○以○爲○期○絕○交○天○下○士○要○爲○男○子○奇○吳○會○徧○王○業○中○原○隔○遺○黎○安○得○與○黃○鶴○比○翼○天○上○飛○江○河○異○風○景○華○楫○感○且○秋○陽○運○邁○百○六○興○否○俄○推○移○桑○田○變○滄○海○楚○囚○發○孔○悲○我○本○樞○車○客○爲○我○解○繁○維○青○蠅○附○天○驥○萬○里○相○追○隨○人○生○尙○行○樂○矧○復○新○相○知○周○道○思○下○泉○王○風○懷○黍○離○富○貴○豈○不○願○憂○患○那○自○持○人○命○危○且○淺○忽○若○朝○露○晞○長○恐○折○我○軸○中○道○欲○差○池○去○我○父○母○邦○我○行○且○遲○遲○聽○我○遠○遊○曲○寄○我○長○相○思○

遠遊曲就つて、天祥は多感多涙の人となり畢れり、潭口に宿す、彼感愴胸に横つて、彼を思ひ此を念ひ、腸を斷ち魂を銷するもの特に甚し、妻妾子女交彼か膝前に往來して、温暖なる愛の手と、柔和なる情の手とは、天祥の胸を撫し、天祥の背を撫し、こゝに

天祥をして六歌を歌はしむるに至れり、

有○妻○有○妻○出○精○練○自○少○結○髮○不○下○堂○亂○離○中○道○逢○虎○狼○鳳○飛○翻○翻○失○其○風○將○離○一○二○去○何○方○豈○料○國○破○家○亦○亡○不○忍○舍○君○羅○襦○裳○天○長○地○久○終○茫○茫○牛○女○夜○夜○遙○相○望○嗚○呼○一○歌○兮○歌○正○長○悲○風○北○來○起○傍○徨○

有○妹○有○妹○家○流○離○良○人○去○後○携○諸○兒○北○風○吹○沙○塞○草○凄○窮○猿○慘○淡○將○安○歸○去○年○哭○母○南○海○涓○三○男○一○女○同○歎○秋○惟○汝○不○在○割○我○肌○汝○家○零○落○母○不○知○母○知○豈○有○眼○目○時○嗚○呼○再○歌○兮○歌○孔○悲○鶴○鶴○在○原○我○何○爲○

有○女○有○女○婉○清○揚○大○者○學○帖○臨○鍾○王○小○者○讀○字○聲○琅○琅○朔○風○吹○衣○白○日○黃○一○雙○白○壁○委○道○傍○鴈○兒○啄○啄○秋○無○梁○隨○母○北○首○誰○人○將○嗚○呼○三○歌○兮○歌○愈○傷○非○爲○兒○女○淚○淋○浪○

有○子○有○子○風○骨○殊○釋○氏○抱○送○徐○卿○雛○四○月○八○日○摩○尼○珠○榴○花○犀○錢○絡○繡○襦○蘭○湯○百○沸○香○似○酥○歟○隨○飛○電○飄○泥○塗○汝○兄○十○二○騎○鯨○魚○汝○今○知○在○三○歲○無○嗚○呼○四○歌○兮○歌○以○吁○燈○前○老○我○明○月○孤○

有○妾○有○妾○何○以○如○大○者○手○將○玉○蟾○蜍○次○者○新○抱○汗○血○駒○晨○粧○靚○服○臨○西○湖○英○英○鴈○落○飄○瑤○珞○風○花○飛○墜○鳥○鳴○呼○金○莖○沈○澀○浮○汗○渠○天○摧○地○裂○龍○鳳○殞○美○人○塵○土○何○代○無○嗚○呼○五○歌○兮○鸚○紆○爲○爾○遡○風○立○斯○須○

我○生○我○生○何○不○辰○孤○根○不○識○桃○李○春○天○寒○日○短○重○愁○人○北○風○隨○我○鐵○馬○塵○初○憐○骨○肉○鍾○奇○
禍○而○今○骨○肉○相○憐○我○汝○在○北○兮○嬰○我○懷○我○死○誰○當○收○我○骸○人○生○百○年○何○醜○好○黃○梁○得○喪○俱○
草○草○嗚○呼○六○歌○兮○勿○復○道○出○門○一○笑○天○地○老○

天祥か手紀集杜詩に依れば

妻

丁丑八月十七日空坑之敗夫人歐陽人女柳娘環娘娘子佛生環之生母顏佛之生母
黃並陷失尋聞自隆興北行惟佛生已死人世禍難有如此者哀哉

長妹

余長妹適孫氏不幸孫氏傾覆家沒入燕妹奉孫氏生母攜子肖翁約翁及一女零丁孤
苦○客○食○萬○里○妹○雖○患○難○中○侍○養○撫○教○各○盡○其○所○可○謂○賢○矣○哀○哉○

二女

予六女長定娘次柳娘次環娘次監娘次奉娘次壽娘丙子定娘壽娘以病死於河源之
三角丁丑柳娘環娘陷惟監娘奉娘得存戊寅潮陽之敗復死亂兵中哀哉

長子

予二子長曰道生姿性可教不幸亂離隨家飄泊空坑之敗能脫身自全鍾愛於大夫人

以疾後大夫人六十日死於惠陽郡治中生十三年哀哉

次妹

予次妹自永新歸寧不子彭氏之難亂離中隨母兩國夫人上下自船澳奉喪越惠陽兄
妹不復見矣哀哉

十三日天祥潭口を發す吹面北風來拂翼堅氷至新濟州に宿す垂雲陰萬里平原望不
極百草盡枯死黃花自秋色時時見桑樹青青雜阡陌路上無人行煙火渺蕭瑟

十四日東平の路に入り汝陽を指す積雨不肯霽行陸如涉川汝陽に館す老槐秋雨暗
孤影照淋浪

十五日汝陽を發して鄆に向ふ風雨吹打人泥濘飛上衣來平に館す雨聲連五日もの
是に至て晴れ月色徹中流

十六日早起す曉日半懸紅隣鷄振翼雄前山渾不見籠翠霞霧中野州を發し晴に乗
して行く東阿に投す十七日商唐州に宿す孤館一夜宿北風吹白頭

十八日天祥平原を過く唐の顏真卿か兵を起したるの地即ち是れ天寶の末安祿山
亂を煽し河北二十四郡悉く守を失はざるなし玄宗之を聞き歎して曰く二十四郡
曾て一人の義士なきかど真卿兵を此の地に起して賊を討す真卿の奏至る玄宗大

に喜びて曰く、朕眞卿か何の状たりしを識らざりしと従兄顔杲卿亦兵を常山に擧ぐ、常山陥り杲卿執へらる、杲卿祿山を罵り、死に至るも罵つて口を絶たず、尋て祿山亡し、再び朱泚李希烈の亂となる、眞卿宰相盧杞か爲めに陥れられ、希烈の所に奉使せしめらる、留まりて賊中に在る、將に二年ならむとす、屈せず、竟に李希烈の爲めに縊り殺さる、天祥平原に至り、顔眞卿の忠節を欽し、景慕の情禁する能はず、古詩一篇を爲る、

平○原○大○守○顔○眞○卿○長○安○天○子○不○知○名○一○朝○漁○陽○動○鞞○鼓○大○河○以○北○無○堅○城○公○家○兄○弟○奮○戈○起○二○十○七○郡○連○夏○盟○賊○聞○失○色○分○兵○還○不○敢○長○驅○入○咸○京○明○皇○父○子○將○西○狩○由○是○靈○武○起○義○兵○唐○家○再○造○李○郭○力○若○論○牽○制○公○威○靈○哀○哉○常○山○慘○鉤○舌○心○歸○朝○廷○氣○不○攝○奇○嶮○坎○珂○不○得○志○出○入○四○朝○老○忠○節○當○年○幸○脫○安○祿○山○白○首○竟○陷○李○希○烈○希○烈○安○能○遽○殺○公○宰○相○盧○杞○欺○日○月○亂○臣○賊○子○歸○何○處○茫○茫○煙○草○中○原○土○公○死○于○今○六○百○年○忠○精○赫○赫○雷○行○天○

眞卿か盧杞に陥れられて賊に使し、竟に賊手に殞れたる處、殆ど天祥と其の揆を一にす、天祥此の一段特に同情を表せざるを得ず、憤激激昂直氣斗牛を衝かむとするものあり、陵州に宿す、中原滄海に似て、萬頃雲と連る、

第二十 北行の丞相(下)

一雁秋雲に滅没して、霜氣征衣を襲ふ、九月十九日、天祥陵州を發して獻州に入る、躡攀して崖磴を上り、厲揭して瀟瀟を涉り、十歩の九歩は崎嶇、上はり盡して矚目すれば、中原萬里一概の如し、津涯を見ず、歴々たる山河古戰場、天祥俯仰して感慨多し、彼詩を賦して曰ふ、

吾○常○涉○重○湖○東○海○際○南○海○茲○游○冠○平○生○天○宇○更○宏○大○心○與○大○虛○際○目○空○九○圍○内○反○身○以○自○觀○須○彌○納○一○芥○以○此○處○死○生○超○然○萬○形○外○

天祥は中原を一望し、其の大觀に游神矚目し、造化と融し、宇宙と合せむとするの概あり、

津沱河を涉る、河は東流して易水に合するもの、在昔後漢の光武が王郎の兵に路を梗せらるゝや、薊より南に馳せて蕪蕪亭に至る、馮異豆粥を上る、饑腸に至りて食に乏し、下曲陽に至る、王郎が兵後に在りて聞て、津沱河に至る、候吏還て白す、河水流漸す、船なくむは濟るへからずと、光武王霸をして之を視せしむ、霸衆を驚さむことを恐れ、還て即ち詭て曰く、氷堅うして渡るへしと、遂に前て河に至る、氷も亦合す、乃ち

渡る未だ畢らざること數騎にして氷解けぬ、南宮に至り大風雨に遇ふ、道傍の空舎に入る、馮異は薪を抱き、鄧禹は火を藪く、光武は竈に對して衣を燎る、異復た麥飲を進む、下博城の西に至り、惶惑して之く所を知らず、信都此を去ること九里、長安の爲めに城守すと聞き、光武即ち馳て之に赴ひく、滹沱河當年の事を追懐すれば、天祥も亦た江東嘗て關流離の時を忘るゝ能はず、

過了長江與大河、橫流數仞、絕滹沱、蕭王麥飯會倉卒、回首中天感慨多、

河間に抵り宿す、恰かも家鉉翁亦寓してこゝに在り、鉉翁は嘗つて省札に押するを拒ひて執へられ、祈請使の名を以て賈餘慶、吳堅等と俱に北に送られしもの、鉉翁既に北庭に至り、上書して所請の議を申し、北庭の意に忤ひ、燕邸に留められたり、已にして漁湯に移され、又河間に移され、特に飲食を官給せらる、今天祥端なくこゝに鉉翁に邂逅し、今昔の情禁する能はず、

江南車蓋走燕山、老子旁觀袖手閒、見說新詩題甲子、桃源元只在人間、

天祥鉉翁と久しく俱に在るを得ず、空しく袂を分ち、明二十一日を以て、保州に道す、宋か遼と當て界せる疆上は此處、燕趙の古戰場は何の處、蚩尤か亂を作せる、涿鹿の野、共工か誦せられたる、幽州の區、郭愧か樂毅を致せる、燕の故都、荆軻か匕首を提げ

て別をなせし、易水、歴々として指すへし、西風は落木を吹き、夕陽は征車に上る、昨日は滹沱を渡り、今日は太行を望む、白雲は渺々たり、天地は茫々たり、黃菊の月も將に盡きむとす、而して天祥既に保涿の間に在り、三十日保州より涿州に入る、趙宋の先は涿の人なり、涿縣に趙氏の墓あり、趙宋の宗廟社稷は今既に亡せり、天下は趙宋の天下にあらす、而して天祥獨り趙宋の丞相を以て、檻車の客たり、涿に過さる、

我行保州塞、御河直其東、山川如有靈、佳氣何鬱鬱、願我巾車囚、厲氣轉秋蓬、辦香欲往拜、惆悵臨長空、

山川靈ありと雖ども、亡國の孤臣を奈何せむ、亡國の孤臣、今や楚囚となりて此に過さる、山川靈あらは亦當さに爲に泣くへし、

涿縣の北六里の所、趙氏の故宅の地とす、樓桑と曰ふ、我過梁門城、樓桑在其北、元德已千年、青煙遠故宅、道傍爲揮淚、徘徊秋風客、天下臥龍人、多少空扼腕、

涿縣の外是れ涿鹿の野、太古軒轅氏か蚩尤と戦ひたるの地たり、我瞻涿鹿野、古來戰蚩尤、軒轅此立極、玉帛朝諸侯、歷歷關河鴈、隨風鳴寒秋、邇來三千

北行の丞相下
年○王○氣○行○幽○州○

楚山は望むへからず、趙山は淡なり、燕の山、皆な指顧の中、黄河の水は天上より来る、滿目の山河、凡て是れ古を撫するに足る、天祥、乾坤を俯仰し、古今を商榷し、志を古人に寓して、詠史五首を得たり、

斜○谷○事○不○濟○將○軍○殞○營○中○至○今○出○師○表○讀○之○淚○沾○骨○漢○賊○明○大○義○赤○心○貫○蒼○穹○世○以○成○敗○
論○操○懿○真○英○雄○孔○明○
中○原○蕩○分○崩○壯○哉○劉○越○石○連○踪○起○幽○井○隻○手○扶○晉○室○福○華○天○意○乖○匹○磔○生○鬼○賊○公○死○百○世○
名○天○下○分○南○北○劉○琨○
平○生○祖○豫○州○白○首○起○大○事○東○門○長○嘯○兒○爲○遜○一○頭○地○何○哉○戴○君○恩○中○道○奮○螳○臂○豪○傑○事○垂○
成○今○古○爲○短○氣○祖○逖○
常○山○義○旗○奮○范○陽○哽○喉○咽○胡○雛○一○狼○狽○六○飛○八○西○川○哥○舒○降○且○拜○公○舌○膏○戈○鋌○人○世○誰○不○
死○公○死○千○萬○年○顧果廟
起○師○哭○玄○元○義○氣○震○天○地○百○戰○奮○雄○姿○樹○妾○士○揮○淚○睢○陽○水○東○流○雙○廟○杲○百○世○當○時○令○狐○
潮○乃○爲○賊○游○說○許道

孔明の忠、劉琨の義、祖逖の志ありと雖ども、今や此の孤臣を如何せむ、杲卿の烈と許

遠の節と聊か自ら任するあらむのみ、

天祥は三月二十二日を以て廣州を發し北に送られたり、廣東より江西に入り、安徽、浙江より江蘇に轉し、山東より河間に出て、薊を経て燕に入り、十月一日竟に燕京に抵たる、指を僂すれば二百有餘日、殆むと七月の長日月を經過したり、江南を出てしときは、花笑ひ鳥啼く頃なりしに、燕山に着く頃は既に風雪帽履を壓するのときなりけり、燕薊の山も、幽井の嶺も、皆な雪ならぬはなし、天祥は吳越の人、吳越の人從來雪を知らず、天祥他の世界に生れたらむ心地せり、東望西望、雪は漫々、北望南望、又雪は漫々、天祥燕京に抵るとき、路に雪橋を經たり、玻璃盤上を行くか如とし、

小○橋○堆○雪○度○琉○璃○更○有○清○霜○滑○馬○蹄○遊○子○衣○裳○如○鐵○冷○殘○星○荒○店○野○鷄○啼○

水晶宮か、瓊玉臺か、天祥見る目も新なり、常憶江南三月裏、鷓鴣啼處百花香、と其の景、其の趣、孰れか軒、孰れか輕、燕山の風色、終に江南に同からざるなり、而して此の時楚、囚其の冠を纓したるまゝ、早く既に北廷に在り、

第二十一 不拜不跪不屈

挾之以刀鋸而不屈。誘之以大用而不從。卒之南向再拜。從容就義。以成光明俊偉之事業。

天祥は既に十月朔を以て燕に至れり、馬を會同館前に立つ、館人受けす、蓋し館來附の人を受くるも、罪人をは受けざるなり、之を久うして、引かれて一小館に去り、一の偏室に置かる、館人冷遇亦天祥を顧みず、次の日晚に供帳して、飲食せしむること上賓の如し、其の故を問へば、館人は云ふ、博羅丞相の命を稟けたりと、天祥義周の粟を食はず、又た周の室に寝ねず、坐して且に達せり、故の宋の丞相留夢炎來つて天祥を説く、天祥罵つて其の面に唾す、瀛國公は宋の恭帝なり、臨安の朝廷を擧げて嘗て元に降り、今や瀛國公に封せられて燕に在り、往いて天祥に説く、天祥恭帝を見るや、直に北面して拜し、號泣して聖駕を回さむと乞ふ、凜然たる忠節、誰れか亦移さむ、南山動かすへきも、天祥の志は動かすべからず、東海は掀すへきも、天祥の心は掀すべからず、平章阿合馬館驛に入る、坐に天祥を召して之を見る、天祥至り長揖して坐に就く、阿合馬曰く、我を以て誰とかなす、天祥云く、適主人の宰相來れりと云ふを

聞けりと、阿合馬曰く既に宰相たるを知らば何を以て跪かさる、天祥曰く、南朝の宰相北朝の宰相を見る、何を跪くをせむと曰く、備何を以て此に至る、天祥曰く、南朝早く我を以て相となさば、北人は南に至らざるへく、南人は北に至らざるへかりしと、阿合馬左右を顧みて曰く、此の人生死尙は我に由ると、天祥曰く、亡國の人なり、殺さむと要せば便ら殺せ、何の備に由ると、備に由らざると道ふあらむ、阿合馬黙然として去る、

越えて四日、元帥張弘範始めて師を遣えして燕に至る、五日天祥其の事を用ゆるの状を見る、大臣皆具さに天祥が屈せざるの状を以て、之を弘範に告ぐ、其の午天祥兵馬司に送られ、頸に枷し、手を縛せられて、一の空室に坐せしめらる、衛防甚だ嚴にして、携ふる所の衣物、錢銀、皆官封をなし、日に鈔一錢五分を給して、飲食をなさしむ、かくて天祥枷せられ縛せられて、空室に坐すること十餘日、然後に手縛を解かる、天祥此の間既に生死を一にし、晏如又裕如たり、所謂道義心肝を貫き、骨髄に徹す、直に死生の際を談笑すへきものか非か、天祥隨て感し、隨て賦す、凡そ十七首、今其の二三を擧げし、

直絃不似曲如鈞、自古聖賢多被囚、命有死時名不死、身無憂處道還憂、可憐杜宇空流

血○惟○願○嚴○顏○便○斫○頭○結○束○長○編○猶○在○此○竈○間○婢○子○見○人○羞○
 落○落○南○冠○自○結○纓○桁○楊○臥○起○影○縱○橫○坐○移○白○日○知○何○世○夢○斷○青○燈○闌○幾○更○國○破○家○亡○雙○淚○
 暗○天○荒○地○老○一○身○輕○黃○梁○得○失○俱○成○幻○五○十○年○前○元○未○生○
 心○期○耿○耿○浮○雲○上○身○事○悠○悠○落○日○西○千○古○興○亡○何○限○錯○百○年○生○死○本○來○齊○沙○邊○莫○待○哀○黃○
 鶴○雪○裡○何○須○問○牧○羶○此○處○曾○埋○雙○寶○劍○虹○光○夜○指○楚○天○低○
 亦○知○憂○憂○楚○囚○難○無○奈○天○生○一○寸○丹○鐵○馬○行○鑿○南○地○熱○緒○衣○坐○擁○北○庭○寒○朝○噓○淡○薄○神○還○
 爽○夜○睡○崎○嶇○夢○自○安○亡○國○大○夫○誰○為○傅○抵○饒○野○史○與○人○看○
 風○霜○陰○忽○忽○天○地○濼○悠○悠○我○自○操○吳○語○誰○來○問○楚○囚○寂○中○惟○滅○想○達○處○盡○忘○憂○手○有○韋○編○
 在○朝○聞○夕○死○休○
 浩○劫○風○塵○暗○衣○冠○痛○百○羅○靜○傳○方○外○學○晴○寫○獄○中○詩○烈○士○惟○名○殉○真○人○與○物○違○世○間○忙○會○
 錯○認○取○去○來○時○
 儼○然○楚○君○子○一○日○造○王○庭○議○論○探○堅○白○精○神○入○汗○青○無○書○求○出○獄○有○舌○到○臨○刑○宋○故○忠○臣○
 墓○真○吾○五○字○銘○
 衰○衣○坐○縲○紲○世○事○亦○堪○哀○枕○外○親○炊○黍○爐○邊○細○畫○灰○無○人○淚○垂○血○何○地○骨○生○苦○風○雪○江○南○
 路○夢○中○行○探○梅○

久○矣○忘○榮○辱○今○茲○一○死○生○理○明○心○自○裕○神○定○氣○還○清○欲○了○男○兒○事○幾○無○妻○子○情○出○門○天○字○
 滿○一○笑○暮○雲○橫○

其○之○命○有○死○時○名○不○死○身○無○憂○處○道○還○憂○と○曰○い○千○古○興○亡○何○限○錯○百○年○生○死○本○來○齊○と○曰○
 ひ○寂○中○堆○滅○想○達○處○盡○忘○憂○手○有○韋○編○在○朝○聞○夕○死○休○と○曰○ひ○烈○士○惟○名○殉○真○人○與○物○違○と○
 曰○ひ○久○矣○忘○榮○辱○今○茲○一○死○生○と○曰○ひ○又○理○明○心○自○裕○神○定○氣○還○清○と○曰○ふ○が○如○き○皆○是○達○
 人○の○言○

天○祥○手○縛○を○解○か○れ○て○よ○り○十○餘○日○疾○を○得○た○り○書○を○惠○州○な○る○弟○壁○に○與○ふ○中○言○あ○り○曰○
 廣○州○不○死○者○意○江○西○可○以○去○之○及○出○南○安○繫○吾○頸○繫○吾○足○於○時○不○食○將○謂○及○吉○州○則○死○首○
 丘○之○義○也○乃○五○日○過○吉○又○三○日○過○豐○城○無○飯○八○日○不○知○飢○既○過○吉○思○之○無○義○且○尙○在○江○南○
 或○尙○有○生○意○遂○入○建○康○居○七○十○餘○日○果○有○忠○義○人○約○奪○我○於○江○上○蓋○真○州○境○也○及○期○失○約○
 惘○然○北○行○道○中○求○死○無○其○間○矣○入○幽○州○下○之○陞○狂○枷○頸○鎖○手○節○其○飲○食○今○已○二○十○日○吾○舍○
 生○取○義○無○可○言○者○今○千○萬○寄○此○及○詩○達○吾○弟○蓋○絕○筆○也○

十○一○月○二○日○疏○枷○せ○ら○る○惟○頸○を○繫○く○に○鎖○を○以○て○す○る○の○み○戸○を○出○て○暄○を○負○に○し○て○
 履○を○取○る○を○得○た○り○天○祥○囚○せ○ら○れ○義○寢○處○せ○す○坐○し○て○且○に○達○す○示○す○に○骨○肉○の○親○を○以○

てするも願みず許すに穹職の榮を以てするも従はず南冠して囚坐し未だ嘗て北に面せず乃歌を作つて伯夷叔齊西山の歌に和す叙あり

和夷齊西山歌歌曰登彼西山兮採其薇矣以暴易暴兮不知其非矣神農虞夏忽然沒兮我安適歸矣吁嗟徂兮命之衰矣後二千餘年某人乃倚歌而和之曰小雅盡廢兮出車采薇矣戎有中國兮人類非矣明主不與兮吾誰與歸矣抱春秋以沒世兮甚矣吾衰矣

又從而歌之曰

彼美人兮西山之薇矣北方之人兮爲吾是非矣異域長絕兮不復歸矣風不至兮德之衰矣

天祥は西山の薇を採つて餓死するも決して北人には屈せざるなり天下周を宗とす而して夷齊其の粟を食ふを耻つ中國を擧げて蒙古なり而して天祥竟に屈せず其心一なり

五日天祥樞密院に赴く官見るに及はずして空しく歸る此の如きもの四日にして九日に至り院官始めて天祥を引問す院官は即ち丞相博羅と平章張弘範となり其の他院判あり簽院あれども名を審にせず皆な威儀を正うして倨然として坐す天

祥入つて長揖す通事跪けと曰ふ天祥曰く南の揖は即ち北の跪なり吾は南人なり南禮を行ふ畢に跪くへけむやと博羅左右を叱し天祥を地に曳かしむ天祥坐して起たす數人者或は頸を牽き或は手を擧ひ或は足を按し或は膝を以て天祥の背を押へ強めて天祥をして跪くの状をなさしむるも天祥は泰然として坐し亦屈すへからす通事因りて汝何の言あらむと問ふ天祥曰く天下の事興あり廢あり古より帝王以て將相に及ぶまで滅亡誅戮何の代か之れなからむ天祥今日忠を宋氏の社稷に盡くして此に至る唯死せむのみ何の言あらむ通事更に何の言あらむと問ふ天祥曰く我宋の丞相たり宋亡へり義當さに死すへし北朝の爲めに獲らる法當さに死すへし何をか言はむ博羅曰ふ你是天下の事興あり廢ありと道ふ且く道へ盤古より今に到る是れ幾帝幾王ぞ我理會するを得ず我か爲めに逐一説き來れと天祥怒ること甚し乃ち曰ふ一部十七史何の處より説き起さむ我今日博學宏詞の科に赴くに非ず泛言するに暇あらず博羅愧ちて乃ち云ふ我興廢に因ての故に問ふて古今帝王に及ひしなり你既に肯て説かすむは且く道へ古より曾て宰相にして宗廟城郭土地を以て人に與へ又逃れ走り去る者之れあるや否や天祥曰はく然らば予か前日宰相となつて國を奉し人に與へ而して後に之を去

りしと謂ふにや宰相となつて國を奉じて人に與うる者は賣國の臣なり賣國の者は必ず去らす去る者は必ず賣國の人に非ず予前きに宰相に除せらるゝも拜せず使を奉じて伯顔の軍前に至り尋て拘留せらる不幸にして賊の國を賣るものありしなり國亡へり本と當さに死すへかりしも但た度宗皇帝の二子浙東に在まし老母廣に在るの故を以て之れを去りたるのみ博羅問ふて德祐の嗣君恭帝を指すは爾の君に非すや天祥曰く吾か君なり博羅曰く嗣君を棄て、別に二王を立つ果して忠臣なるか天祥曰く德祐は吾か君なるも不幸にして國を失ひ給へり此の時に當ては社稷を重しとなし君を輕しとせず吾か別に君を立つるは宗廟社稷の爲めに計る所以なり故に忠臣なりとす懷惑に従うて北する者は忠に非す元帝に従ふを忠とせず徽欽に従うて北する者は忠に非す高宗に従ふを忠とせず博羅語塞り詰る能はず平章以下皆失笑す問ふものあり曰く晉元帝宋高宗皆な命を受くる所あり二王何の命を受くる所ぞ平章張弘範亦曰く二王是れ走れるの人なり立つこと正しからず是れ篡なりと詰問の矢は八方より射られたり天祥は緩む色もなく答へて曰く景炎は乃ち度宗皇帝の長子にして德祐の親兄なり正からずとすへからず德祐國を去るの後に位に即き給へり篡と謂ふへからず丞相陳宜中太皇

太后の命を以て二王を奉じて宮を出てたり命を受くる所なしと謂ふへからずと明確なる言議天祥侃々焉として持す舉座亦た辭なく唯命を受くるなしと固執するのみ天祥曰く天之を人に與ふ之を與へり傳授の命なしと雖ども推戴擁立する亦何の不可あると諸人支離伏せず天祥又曰く仁者は之を見て之を仁と謂ひ知者は之を見て之を知と謂ふ各其の是を是とする可なりと博羅云く備既に丞相となる若し能く三宮を挾ひて以て往きたらむには以て忠とすへし若し能はずは則ち伯顔丞相と一戦して勝負を決したらむには以て忠とすへし如何と天祥曰く此の責陳丞相に在り我時に未だ國に當らず以て我を責め難しと又た問ふて曰く汝二王を立て竟に何の功をかなせし天祥曰く君を立て以て宋社を存するは臣子の責なり不幸にして國家喪亡す一日を存せば臣子一日の責を盡くすなり何の功か之れあらむ成功は則ち天なりと又曰く既に其の不可なるを知りながら何そ必しも爲せし天祥曰く人臣の君に事ふるは子の父母に事ふるか如とし父母不幸にして疾あらば明になすへからざるを知るも雖ども醫藥を用ゐざるの理なし吾か心を盡くすのみ若し醫藥を用ゐざる者人の子に非ず救ふへからざるは天なり今日天祥此に至る惟一死あるのみ何ぞ必しも多く言はむ丞相言ふ所多く是なら

ず。博羅怒辭色に見はる、曰く、汝死せむと欲するも、快く死するを得るか、汝死する必ず快きを得へからずと、天祥曰く、死を得れば、即快なり、何の不快をかなさむとす。博羅愈怒り、猶云爲すれども、通事轉告せされば、天祥も亦答ふるをなさず、遂に獄吏を呼ひて天祥を引き去らしむ、初十日、天祥假獄に入る、意ふに假滿つるの日、即ち殺されむと、博羅天祥を殺さむと欲す、而かも世祖以下諸大臣可かす、張弘範病中より、亦表奏して、天祥事ふる所に忠なり、願くは釋して殺すなからむことを乞ふ、故に囚せれて殺されず、久しく消息もなく、たゞ兵馬司に囚せらるること四年、此の冬、天祥獄中に於て、靈陽子に逢うて、俱に道を談す、天祥贈るに古詩一篇を以てす、

昔我愛泉石、長揖離公卿、結屋青山下、咫尺蓬與瀛、至人不可見、世塵忽相纏、業風吹浩劫、融角爭浮名、偶逢大呂翁、如有宿世盟、相從語寥廓、俯仰萬念輕、天地不知老、日月交其精、人一陰陽性、本來自長生、指點虛無間、引我歸圓明、一針透頂門、道骨由天成、我如一逆旅、久欲躡屨行、聞師此妙訣、蓬廬復何情、

靈陽子示すに大光明正法を以てす、天祥是より死生の際に於て、脱然として遺するが如く、詩文亦超瀛世を忘るゝ意あり、

誰知真患難、忽悟大光明、日出雲俱靜、風消水自平、功名幾滅性、忠孝大勞生、天下惟豪傑、神仙立地成、

英雄回首即神仙、天祥今や脩然として塵渣の表に超へ、生死を出離し、濁世を解脱し、立地に神仙となり畢れり、

第二十二 獄中の神仙(上)

亡國の丞相は獄中の神仙となり、囚繫の孤臣は土室の道人となれり、神仙たる天祥道人たる天祥、彼既に亡國の丞相たるを忘れたり、囚繫の孤臣たることを忘れたり、既に之を忘れて世外に優容し、物表に超脱す、而かも彼か丞相たりし舊時の家國をばるゝ、忘能はざるなり、彼か孤臣たらざる以前の朝廷をば忘るゝ、能はざるなり、天祥は今や獄中の神仙として、土室の道人として、庚辰の新年を迎へり、

紅日は杲々として五雲は紫なり、嗟此の元正を如何に迎へむ、
鐵馬風塵暗、金龍日月新、衣冠懷故國、鼓角泣離人、自分流、年晚不妨吾道春、方來有千載、兒女狂悲辛、

新しき日月を觀ては、舊き堯龍を憶はざるを得ず、今の衣冠を看ては、昔の軒冕を慕

はさるを得ず、正月十三日は、天祥か元帥張弘範の舟に驅られて、方さに崖山に着せし日なり、回首すれば恰も一周年、天祥覺せず紅涙を落すこと數行、

去年今日到崖山、望見龍舟咫尺間、海上樓臺俄已變、河陽車馬不須還、可憐羝乳煙橫塞、空想鸞啼月掩關、人世流光忽如此、東風吹雪鬢毛斑、

風生江海龍游遠、月滿關山鶴唳高、遠く游へる龍、今尋ぬへからず、高く唳れる鶴、竟に已ぬるかな、神たり仙たる、術なきにあらす、道たり佛たる、亦其の道あり、術ありと雖ども、神と仙とは如何せむ、道ありと雖ども、道と佛とは吾關せず、朝に道を聞かば夕に死すとも可なり、既に道を聞き、又死を分とす、即是れ神、即ち是れ仙、又道、又佛、英雄回首便神仙、なるのみ、

萬里雲山斷、客魂浮雲心事向誰言、月侵鄉夢夜推枕、風送牢愁晝揜門、蘇子窖中閑日、月石郎家裏、舊乾坤、朝聞夕死吾何恨、坐把春秋子細論、東風吹草日高眠、試把平生細問天、燕子秋迷江右月、杜鵑聲破洛陽煙、何從林下尋元亮、只向塵中作魯連、莫笑道人空打坐、英雄收歛便神仙、

其の脱然として禍福生死と得失榮辱とを超越するや、可憐大流落、白髮魯連翁、每夜瞻南斗、連年坐北風、三生遭際處、一死笑談中、贏得千年

在丹心射碧空

更に仙骨崑崙の方面を自ら寫して曰ふ、

終夕起推枕、五更聞打鐘、精神入朱鳥、形影落盧龍、弭節蓬萊島、揚旗太華峯、奔馳竟何事、回首謝喬松、

蓬瀛以て節を弭ひへく、秦華以て旗を揚ぐへし、土室三間、便是れ蓬瀛とすへく、秦華とすへし、萬里區々として何ぞ奔馳せむ、仙子羽人却て自ら勞す、王喬と雖ども、赤松と雖ども、這裏の天祥に比せば、是れ羽人にあらす、仙子にあらす、

天祥又史を把て讀む、仙骨崑崙の天祥も、亦性來の誠忠義烈なる、古人の薄命を見て、自ら同情の涙を漉かざるを得ず、

自古英雄士、還爲薄命人、孔明登四十、韓信過三旬、壯志摧龍虎、高詞泣鬼神、一朝事千古、何用怨青春、

孔明四十に登り、韓信又三旬を過ぐ、高詞鬼神を泣かしむるも、壯志龍虎を摧くも、畢竟薄命の人たるなり、天祥亦齡既に四十有五、而して薄命の人たるは一なり、彼今や獄中の人、囚繫の身たるなり、薄命其れ孔明と韓信とに孰れず、四月八日天祥獄中、灌佛の節會に會ふ、

今朝浴佛舊風流。身落山前第一州。嶺上瑤桃俄五稔。海中玉果已三周。人生聚散真成夢。世事悲催一轉頭。坐對薰風開口笑。滿懷耿耿復何求。

首を回せば、乙亥天祥か兵を起して勤王し、江西安撫使を以て兵を領して吉州に下たり、贛江の上に督府を開きしは、五年前の四月に在り、丁丑福安の朝廷陥り、端宗の車駕海に航して潮州に向へるの時は、方さに三年前の四月に在り、回顧すれば、茫々として渾て夢の如し、世は皆な蘭湯を燻して、金佛に灌く、釋迦昔法輪を轉すること八萬四千、而も亦夢中の夢、釋迦の身既に夢の身なり、天祥亦夢の人、釋迦曰く、萬法皆是空、坐に薰風に對して口を開いて笑ふ、方寸耿耿の光、蓋天盖地、宇宙に盈ち、乾坤に塞り、十分を縦斷し、八表を横絶し、空前絶後千古萬古、耿耿たる者は、耿耿復何をか求めむ、寄語して釋氏に謝す、天祥亦求むる所なし、

春は落花と俱に去り、夏は新緑と共に來り、端午も過ぎ、七夕も過ぎ、中秋も過ぎ、早や八月十七日となりける、丁丑の歳、方石嶺戰敗れて、天祥の夫人と子佛生二女、柳娘環娘及顔黃二孺人とか、竟に空坑に陥つて、俘虜となりしは、三年以前の、今日なり、往事追懐して、淚泣然たり、平生心事付悠悠、風雨燕南老楚囚、故舊相思空萬里、妻孥不見滿三秋、絕憐諸葛隆中

意○贏○得○子○長○天○下○游○一○死○皎○然○無○復○恨○忠○魂○多○少○暗○荒○丘○

其の二十四日は、天祥が楚囚を以て金陵を發し、北に向へるの一周年なり、去年の今日金陵を發し、十月一日燕に至り、越えて五日控犴に罹れり、而して今庚辰中秋後九日となる、感懷の餘、四十字を書して自ら遣る、去歲趨燕路、今晨發楚津、浪名千里客、剩作一年人、鏡裏秋容別、燈前暮影親、魯連疑未死、聊用托芳塵、

涼月もはや過ぎて、桂の月となり、なるまゝに、九月の七日は、天祥が先母夫人大祥の辰にあり、天祥子となり、不孝几苑を設けて、祀を奉ずるを得ず、空しく獄囚の身となりて復此の辰に逢ふ、南望嗚咽、天に哭し、地に慟し、哀章一首を爲くる、

前○年○惠○州○哭○母○歛○去○年○邳○州○哭○母○葬○今○年○飄○泊○苑○何○處○燕○山○獄○裏○菊○花○時○哀○哀○黃○花○如○昨○日○兩○度○星○周○俄○箭○疾○人○間○送○死○一○大○事○生○兒○富○貴○不○得○力○一○抵○今○誰○人○守○墳○墓○零○落○瘞○鄉○一○堆○土○大○兒○狼○狽○勿○復○道○下○有○二○男○并○二○女○一○兒○一○女○亦○在○燕○佛○廬○設○供○捐○金○錢○一○兒○一○女○家○下○祭○病○脫○麻○衣○日○晏○眠○夜○來○我○夢○歸○故○國○忽○然○海○上○見○顔○色○一○聲○鷓○鴒○叫○淚○滿○床○化○爲○清○血○衣○裳○濕○當○年○髮○緝○意○謂○何○親○曾○撫○我○夜○枕○戈○古○來○全○忠○不○全○孝○世○事○至○此○甘○滂○沱○夫○人○開○國○分○齊○魏○生○榮○死○哀○送○天○地○悠○悠○國○破○與○家○亡○平○生○無○憾○惟○此○事○二○郎

已。作。門。戶。謀。江。南。葬。母。麥。滿。舟。不。知。何。日。歸。兄。骨。狐。死。猶。應。正。首。丘。

其の明日天祥夫人歐陽氏燕に在るを聞く、夫人は空坑の敗に執へられて、北に送られたるもの、事既に三年の前に在り、是に至つて終に屈せず道冠道篋、日に道經を誦す、天祥之を聞き、腸爲めに寸断す、乃ち妻を哭するの文を作くる、其の文に曰く、

烈女不嫁二夫、忠臣不事二主、天上地下、惟我與汝、嗚呼哀哉。

妻は二夫に嫁せずして全くし、夫は二主に事へずして囚せらる、此忠臣と彼の烈女と、此の夫ありて此の妻あり、天上天下、惟天祥と天祥の夫人とのみ、厥の忠厥の烈、洵に千古萬古、

越えて九日、方さには是れ重陽の節、去年今日彭城の路、楚王の故都、此の節に逢ふ、今獄中に在り、江南故舊、今何の状ぞ、惠州の二弟亦何の状、棣萼の情に禁せず、

飄零萬里、芥爲家、一夜西風吹鬢華、祗有新詩題甲子、更無故舊對黃花。

菊は秋光を帯ひて、金萼を擗く、黃花は同し黃花なれども、地は是れ江南にあらず、燕山の孤囚、涙は黃花の露よりも多し、

葉月も去りぬ、白菊黃菊半は残しぬ、紅葉の月とはなりぬ、霜は天に滿つ、十月の一日、是れ天祥か去年幽燕に入りし日なり、歲月冉冉として、春過ぎ夏は蟬の聲、はや秋の

過なき盡きて、雁天に横はる頃となりぬ、回顧すれば既に一年、而かも尙は獄中の人、未だ死するを得ざるなり、

去冬陽月朔、吾始至幽燕、浩劫眞千載、浮生又一年、天南照天北、山後接山前、夢裏乾坤老、孤臣雪咽嚔。

而して其の九日は、天祥か燕城に至りし日なりける、かく天祥は亡國の宰相、囚繫の孤臣となりて、空しく獄中に嘯傲し、未だ死するを得ず、又未だ何の命もあらず、鬱勃孤憤、泄らす所なく、慷慨激越、怒つて筆を呵す、長句一篇、立ろに成る、

君不見、常山大守罵羯奴、天津橋上舌盡劄、又不見、睢陽將軍怒切齒、三十六人同日死、去冬長至前一日、朔庭呼我弗爲屈、丈夫開口即見膽、意謂生死在頃刻、赭衣冉冉生蒼苔、書雲時節忽復來、鬼影青燈照孤坐、夢啼死血丹心破、只今便作涓水囚、食粟已、是西山羞、悔不當、年跳東海、空有魯連心、獨在。

去年の今日燕城に入り、爾來賊を罵り、賊を折き、屈せず、撓まず、正々堂々の言、赫々炳々の節、巍然として立ち、凜然として持す、詰問雨の如きも、一々截断して、裕如たり、威嚇雷の如きも、凡て驅却して、晏如たり、而して引き去られ、而して獄に投せられ、囚坐兀々として、今日に至る、今日は冬至、方さに書雲の時節、首を同せば、業已に一裘葛猶

は塵の世の絆免るへくもあらずして空しく獄中の囚となりてこゝに在り既に周の粟を食はずして西山の薇を採り首陽山に餓死する能はず又義秦を帝とせすして諸王を游説して東海を踏ひて死する能はず夷齊に耻ぢ又魯連に愧づ而かも夷齊の心魯連の志は造次にも顛沛にも是れ

冬至も過ぎて神無月は師走となりぬ一日も往き二日も去りはや弟月二十日と云ふ日となりけり今を去ること二年前戊寅の歳天祥は空坑に敗れたる敗軍の將として南嶺に柵して楯籠りしも大軍突如として風雨を捲き雷霆を驅つて來り竟に今月今日を以て俘虜の身となりぬ僕指すれば既に二周星を経たり限なきの思限りなきの恨

横磨十里坐無謀回道蹉跎海上州太傅抵圖和藥了將軍便謂斫頭休乾坤顛倒眞千劫身世留連復一周一死到今如送佛空隱淡月夜悠悠

歳聿に暮れぬ天祥は依然として囚人たり庚辰の歳も残少くなりぬ辛巳の歳は間近く來らむとはするなり花々たる天地天祥は三間の空室に膝を抱いて坐す

得兒女消息

故國斜陽草自春爭元作相總成塵孔明已負金刀志元亮猶憐典午身骸骸到頭方是

漢娉婷更欲向何人癡兒莫問今生計還種來生未了因

除夕二首

門揜千山黑孤燈伴不眠故郷在何處今夕是窮年住世眞無係爲囚已自然勞勞空歲月得死似登仙

歲暮難爲客天涯况是囚乾坤還許大歲月忽如流夢過元無夢憂多更不憂屠蘇兒女態肯作百年謀

第二十三 獄中の神仙(下)

辛巳元日二首

金虬銜日出鐵騎勒春回天上青門隔人間白髮催霜寒欺舊草山晚放新梅瓊塔甘牢落東風枉却來

慙愧雲臺客飄零雪滿甍不圖朱鳥影猶見白蛇年宮殿荒烟隔門庭宿草連乾坤自春色回首一潸然

洪鈞一轉して斗寅を指し乾坤今日既に是れ春辛巳の春是れ獄中の春千門萬戸新正を祝し衣冠貂蟬紫闕に上はる遮莫れ沙隄金馬に鞭つて槐宸に朝するを吾は自

ら被を擁し、喧を負ふて斗室三尺、臍を曲けて眠る、而かも江南の新春、一念此に到れば、天祥亦涙なきを得ず、此の日天祥獄中家書を爲り、男陞に付せり、父少保樞密使都督信國公批付男陞子、汝祖革齋先生以詩禮起門戶、吾與汝生父及汝叔同產三人、前輩云、兄弟其初、一人之身也、吾與汝生父俱以科第通顯、汝叔亦致饗、纓使家門無虞、骨肉相保、皆奉先人遺體以終于、屬下人生之常道也、不幸宋遭陽九、廟社淪亡、吾以備位將相、義不得不、徇國、汝生父與汝叔姑全身以全宗祀、惟忠惟孝、各行其志矣、吾二子長道生、次佛生、佛生失之於亂、離尋聞已矣、道生汝兄也、以病沒於惠之郡治、汝所見也、嗚呼痛哉、吾在潮陽、聞道生之禍、哭于庭、復哭于廟、即作家書報汝生父、以汝爲吾嗣、兄弟之子曰猶子、吾子必汝、義之所出、心之所安、祖宗之所享、鬼神之所依也、及吾陷敗居北營中、汝生父書自惠陽來曰、陞子宜爲嗣、謹奉潮陽之命、及來廣州、爲死別、別復申斯言、傳云、不孝無後、爲大吾雖孤子於世、然吾革齋之子、汝革齋之孫、吾得汝爲嗣、不爲無後矣、吾委身社稷、而復道不孝之責、賴有此耳、汝性質剛爽、志氣不暴、必能以學問世、吾家吾爲汝父、不得面日訓汝、汝于六經、其專治春秋、觀聖人筆削褒貶、輕重內外、而得其說、以爲立身行己之本、誠聖人之志、則能繼吾志矣、吾網中之人、引決無路、今不知死何日耳、禮狐死正丘首、吾雖死、萬里之外、豈頃刻而忘南

嚮哉、吾一念已注于汝、死有神明、厥惟汝、歎仁人之事親也、事死如事生、事亡如事存、汝念之哉、歲辛巳元書于燕獄中、

天祥の二男道生と佛生とあり、佛生は丁丑八月空坑の敗に執へられて、尋て亡し、道生は戊寅十月疫に罹りて、惠州の府中に沒せり、而して天祥嗣子なし、其の明年己卯天祥執へられ、崖山陥る、天祥嚮に潮陽より家書を弟壁に付し、其の子陞を以て嗣子となさむことを報し置きたりしに、天祥が捕へられて北營の中にあるとき、弟壁書到り、謹むて潮陽の命を奉すと答へ來れり、是に於て陞子は天祥の嗣子となりしなり、今や天祥燕に入つてより、既に二周星、彼れ死朝夕を計るへからず、故に辛巳の元日、先づ家書を作りて之を陞子に付せしなり、其の汝于六經、其專治春秋、觀聖人筆削褒貶、輕重內外、而得其說、以爲立身行己之本、誠聖人之志、則能繼吾志矣、

と曰ひ、又吾一念已注于汝、死有神明、厥惟汝、歎仁人之事親也、事死如事生、事亡如事存、汝念之哉、

と曰ふが如き、何ぞ其れ堂々として、大儒の遺訓の如く然るや、天祥は正大の氣、公明